

3. 南部地区の遺構と遺物（付図1参照）

府内町跡第51次調査の大半を占めるのが南部地区である。この地区で検出された遺構は、北部地区から延びる大友館の東側を区切る施設と関連するSD060、大友館の東側を通り豊後府内の中央を南北に貫通する第2南北街路であるSF012をはじめ、万寿寺の周辺に設置された大規模な溝、街路下で検出された土坑、天正14年（1586）の島津氏の豊後府内侵攻に起因すると考えられる焼土層など様々な遺構が検出された。以下それらを遺構ごとに報告を行なう。位置については付図1に記載する。

(1) 街路

焼土層

第2南北街路

版築状

SF012 府内町跡第51次調査区の中央部を南北に貫くように検出されたのがSF012とした第2南北街路である。街路遺構は、表土除去後、遺物包含層を除くと最初に検出される遺構である。遺構の構造は、砂層と土層の版築状で、北の大友館に近い程厚く、約50cm積み上げられている。付図1-1は街路の上面の検出状況とそれに付帯する側溝、及び轆（わだち）状の窪みを図化したものである。また、付図3-2～3-4は街路土層断面とSD060の関係を報告するものである。

第36～41図1～107に図示した遺物は、版築状に整備された土砂を発掘中に出土したものである。1は碁笥底の皿で小野編年のC群にあたる。2は碗、3は見込みに文様のある碗の底部である。いずれも青花で、1・2は景德鎮窯系、3は漳州窯系である。4・5は龍泉窯系の青磁で、4は碗、5は蓋である。6～8は白磁の皿であるが、8は口縁部周辺の釉がかけられており、それ以外は露胎である。9は焼締陶器の蓋である。10・11は朝鮮王朝産の船徳利で、11の内面には叩目が見られる。

船徳利

天目茶碗

12は瀬戸美濃産の天目茶碗である。13～22は備前焼の各器種である。14は口径10.5cmの筒形の鉢である。13・15～17は播鉢である。13は口縁端部が肥厚する形態で、灰色の色調をしている。15は口縁端部の肥厚が上方に拡張し、口縁帯部を形成し、外端部が尖るように仕上げられている。内面には底部に向けて放射状に播り目が入れている。16も15と同様の仕上げであるが、口縁帯部の外面に二条の凹線が巡る。17は16に比較すると尖る外端部の内傾面が窪み凹線状になる。内面の播り目に斜めの播り目が加わる。18～19は壺の資料である。18の口縁部は直立し、口縁外端部がわずかに肥厚する。19・20はその底部と考えられる。21・22は水屋甕の胴部と底部である。12の胴部中位に断面三角形の突帯が一条巡る。

水屋甕

京都系土師器

23～59の京都系土師器は、口径は23～31・53～55の8cm台、32～35の10cm前後、36～51・56～59の12cm台・52の16cm台の4群が確認できる。特に8cm台の最小の京都系土師器は灯明皿として再利用されているものが目立つ。60は京都系土師器の技法で造られた耳皿である。61・64・65は内面にロクロ目が残るロクロ目土師器である。62・67は糸切り底であるが、口縁部の仕上げ方は京都系土師器に類似する。63・66は在地系土師器である。68は吉備系土師器の底部である。

吉備系土師器

69～74は瓦質土器である。69は口縁部に雷文のスタンプが付く火鉢である。70は直立した口縁端部が肥厚する壺である。71は双頭蕨手文スタンプがある火鉢である。72は69・71と同類の火鉢の胴部から底部と考えられる。中位に細い突帯が二条巡る。73は口縁内端部が肥厚する播鉢で、内面に播り目がある。74は壺の胴部から底部である。

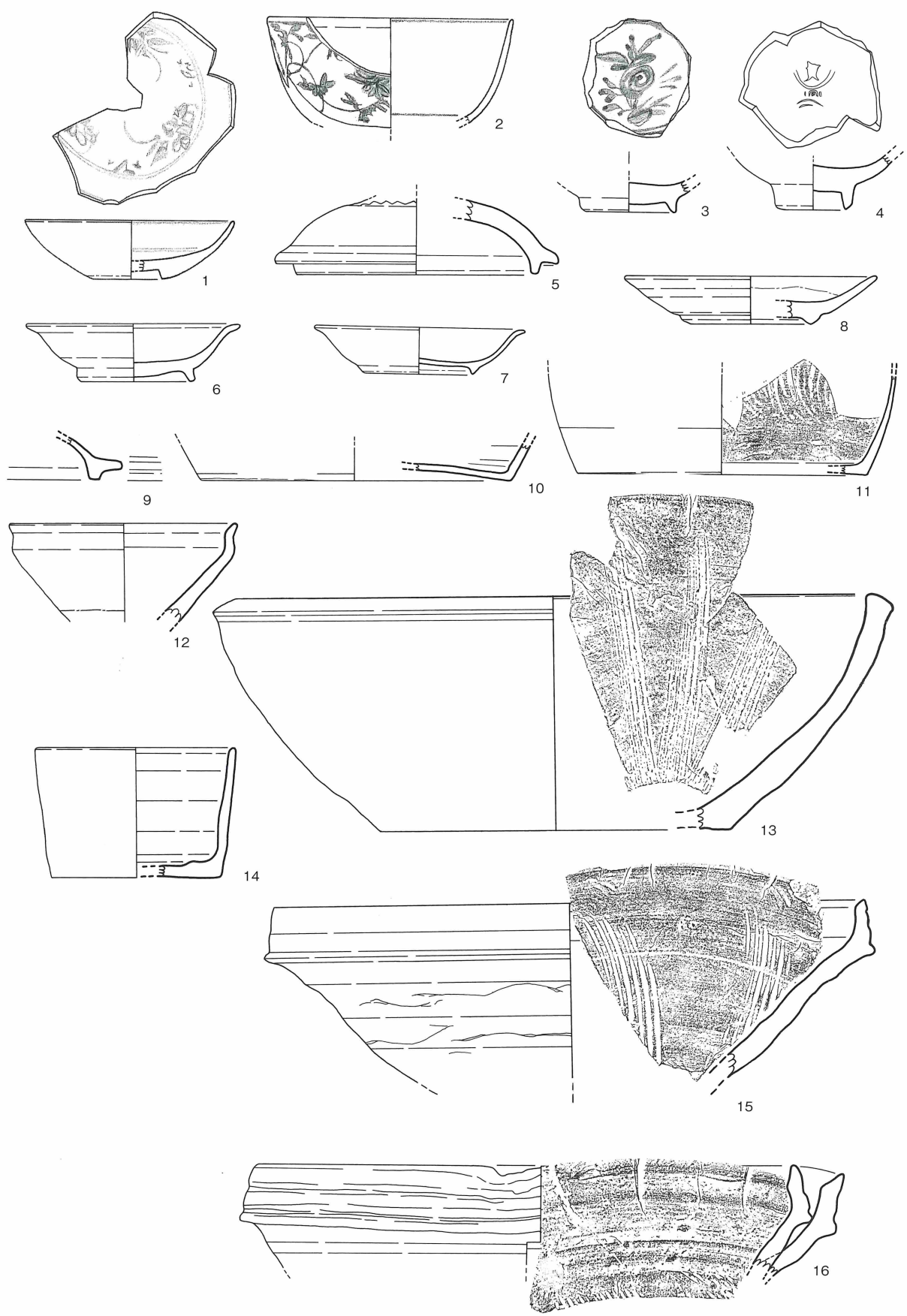
石鍋

75は燭台と想定される。76はルツボ、77は古代の甌の破片である。78は滑石製の石鍋の口縁部で、79は粘板岩製の硯である。80～83は紡錘形の土錘で、完形品の82は4.3gである。84は土鈴と考える。85・86は土師質土器片を円盤状に加工したものである。87～90は青銅製品であるが、87は鉞状をしており、88・89は不明であるが、中空の製品である。90は鉞前の一部である。

鍵

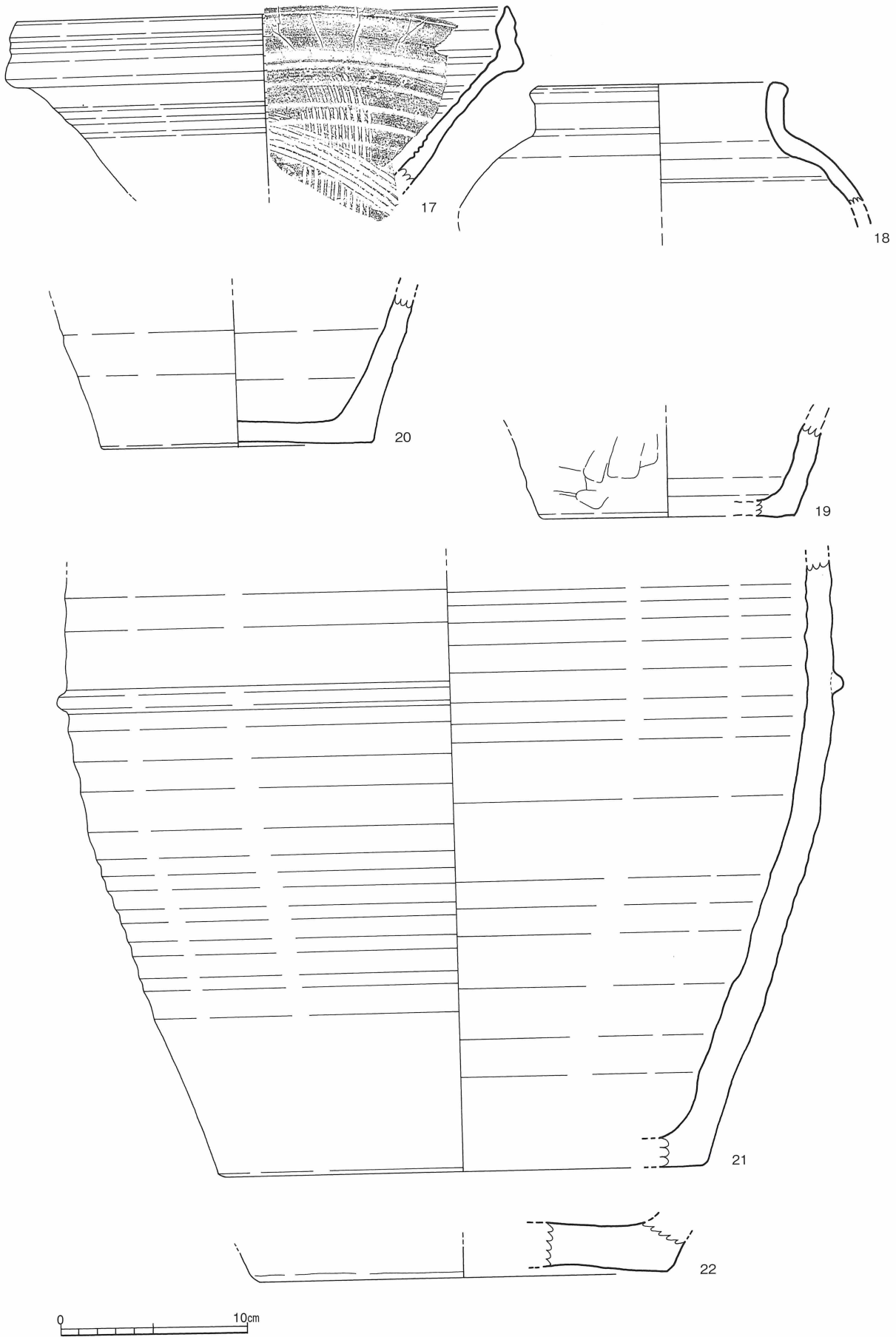
91～107は街路を調査中に出土した銅銭である。91～93の1009年初鑄の「祥符通寶」から105・106の1368年初鑄の「洪武通寶」まで含まれる。

以上の出土遺物からみた、SF012の整備時期は瀬戸美濃天目や備前焼の編年、京都系土師器の形態から、16世紀後葉と想定する。

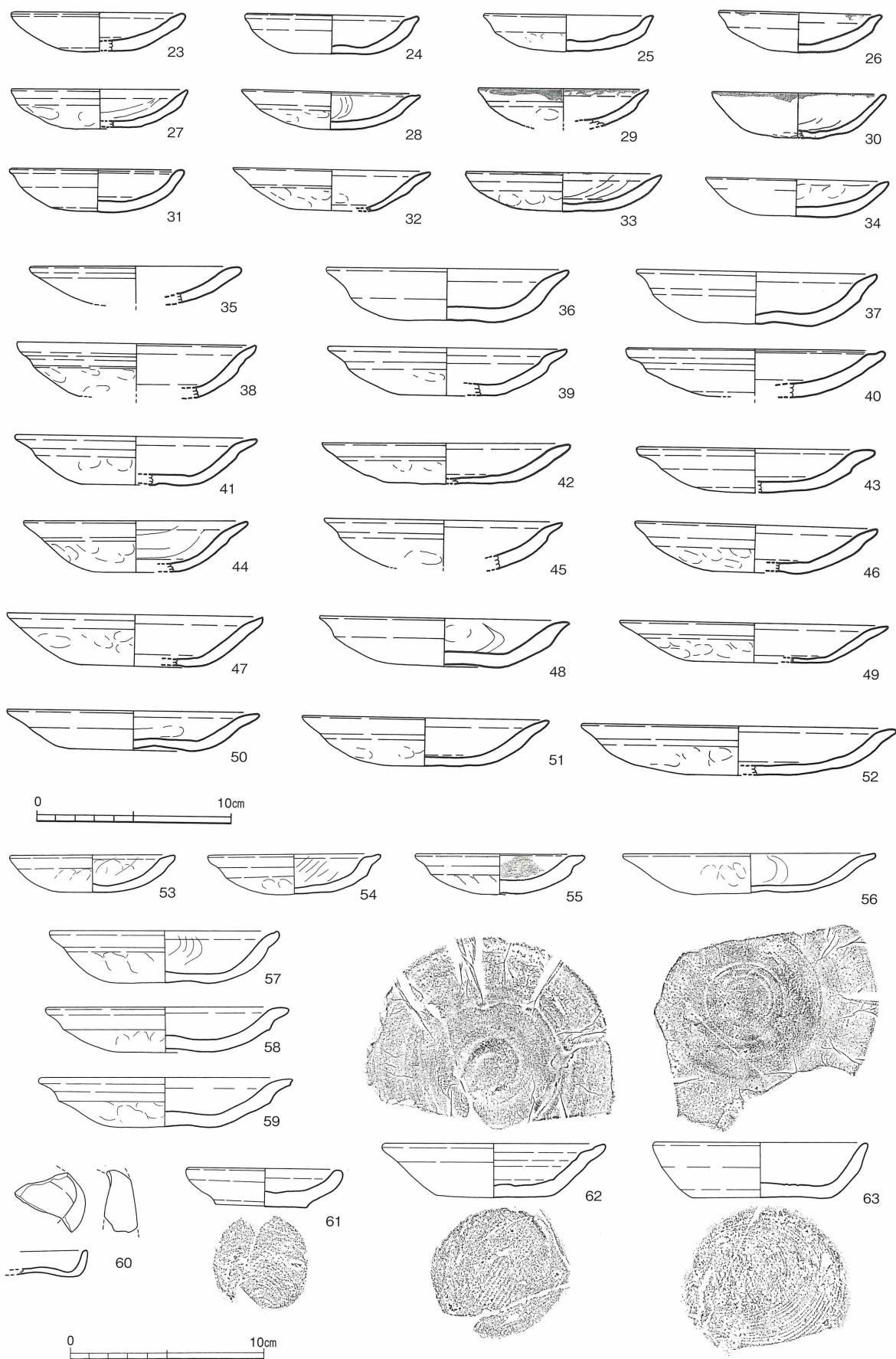


0 10cm

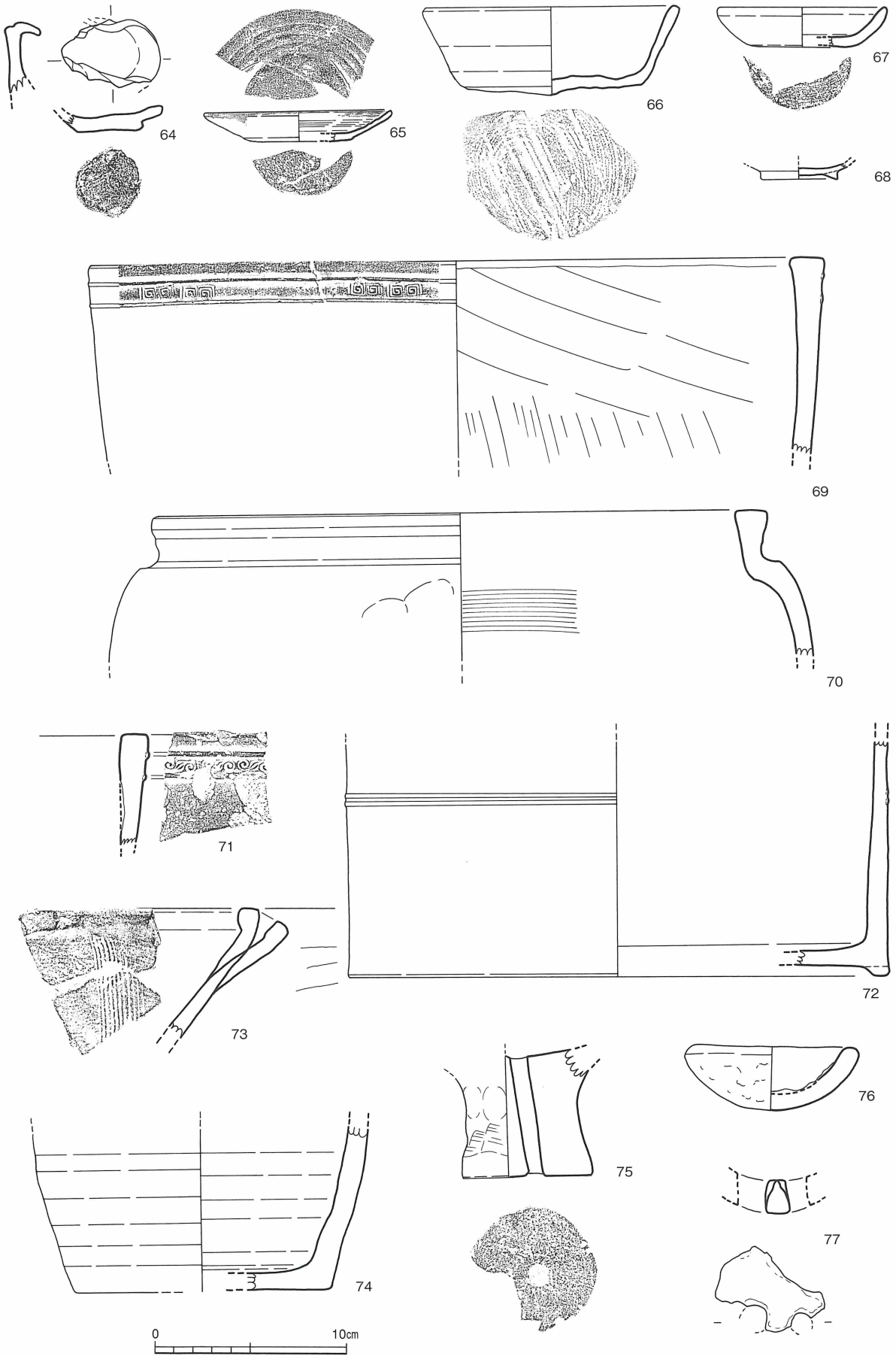
第36图 SF012出土遺物実測図① (1/3)



第37図 SF012出土遺物実測図② (1/3)



第38図 SF012出土遺物実測図③ (1/3)



第39図 SF012実測図④ (1/3)

SF447 「府内古図」には万寿寺北側沿いに第1南北街路と第2南北街路を繋ぐ東西街路が描かれる。発掘調査の結果では、万寿寺の北境の堀が埋め立られ、一部が街路化している。調査区内で検出された遺構はこの街路の西端で、薄い積土で、これをSF447とした。

白磁の皿 出土遺物は、第110図9に図示した白磁の皿が出土している。

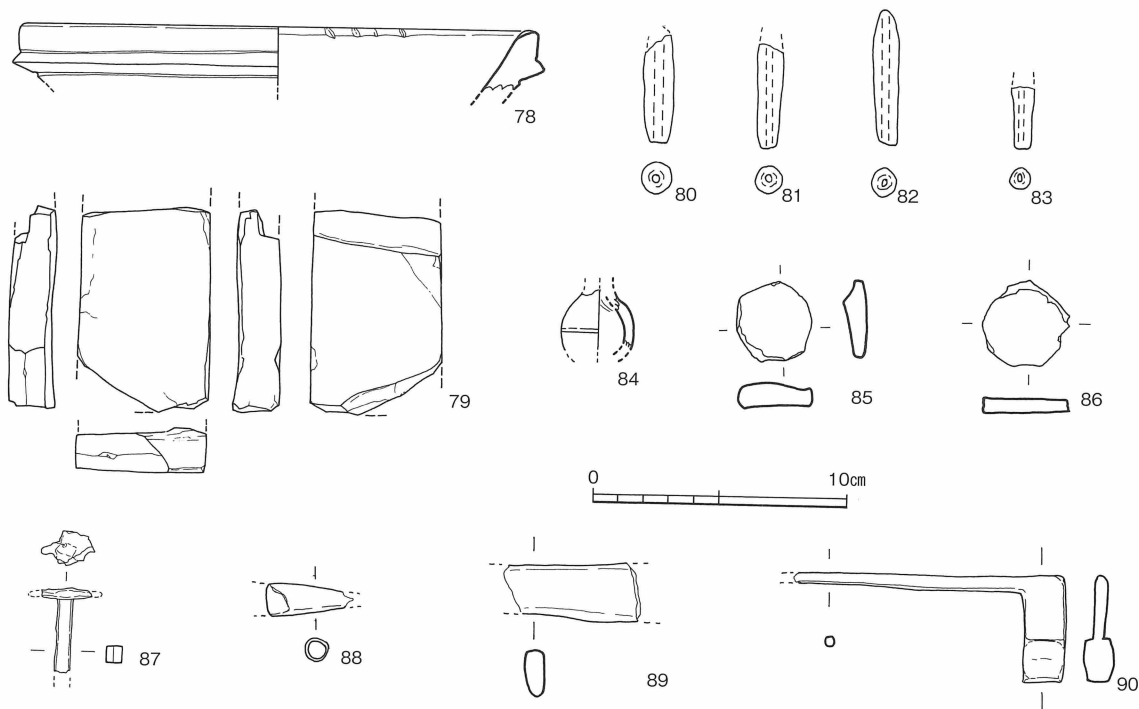
(2) 溝

SD014 SD014は桜ヶ丘雨水幹線の工事の関係で先行して調査したJ35区で検出された南北方向の溝である。その後周辺の調査が進み北側のJ34とJ36区方向に延びていることが判明した。さらに同じ方向の北側でその延長部分と想定できる溝がJ31区でも確認され、同じ遺構名とした。それらは付図1-2に図示したが、J35周辺(SD014A)の規模は全長約9mで幅は50~80cm、深さ20cm前後で、J31区(SD014B)は約9mが確認されている。

遺物は第112図3~5に図示した。いずれもJ31でSD014Bとした遺構からの出土したものであるが、在地系土師質土器の坏で時期は14世紀代である。J35周辺で検出したSD014Aの遺構も第2南北街路除去後に検出されたもので、同じ時期の可能性が高いが、前者の溝と方向が一致せず、付図3-4図に図示しているように別遺構の可能性が高い。

断面V字 SD060 SD060は北部地区の中央部で検出された断面V字の遺構であるが、同じ方向性を持つ溝として付図1-2図に図示したように南部地区の西側沿いで検出された。検出した遺構の全形と土層図は付図3-2~3-4に図示した。遺構の規模は、南北方向に約50m検出され、南端部で付図5-1に図示したSK533とした大型土坑と切り合い関係にあり、SK533が新しい。SD060の最南端は調査区の限界やSK533との切り合いから明瞭ではないが、床面を観察すると、西側に直角に曲がる可能性が高い。遺構の幅は約2.5mで、深さは1.8mである。断面形態はU字に近い逆台形をしている。

出土遺物は第42~48図1~142に図示した。1は碁笥底の皿で小野編年のC群にあたる。2も皿であるが、小野編年のF群にあたる。いずれも景德鎮窯系の青花で装飾されている。3は龍泉窯系の輪花皿である。4は焼締陶器で器壁が薄く朝鮮王朝産の可能性が高い。5は白磁の人形製品である。腕を前に出し、線香を挟む程度の空間が作られている。8は底径5.4cmの小型黒釉陶器の壺で、器壁も薄く、茶入れの可能性もある。



第40図 SF012出土遺物実測図⑤(1/3)・87~90(1/2)

備前焼

6・7・9～14は備前焼の各器種である。6・10は播鉢である。口縁外端部が尖る口縁帯部の外面には凹線が巡り、内面には乱雑に斜め播り目が加えられている。7・11は口縁部が内湾する鉢である。9は徳利である。12も徳利の底部の可能性が高い。12・13は大甕の破片である。12は胴部で、ヘラによる文字か文様が描かれている。第43図14は口径46.2cmの大甕で、外傾する口縁部外面は粘土貼り付けで肥厚している。15は薄く釉がかかる高台付きの皿で、瀬戸美濃産

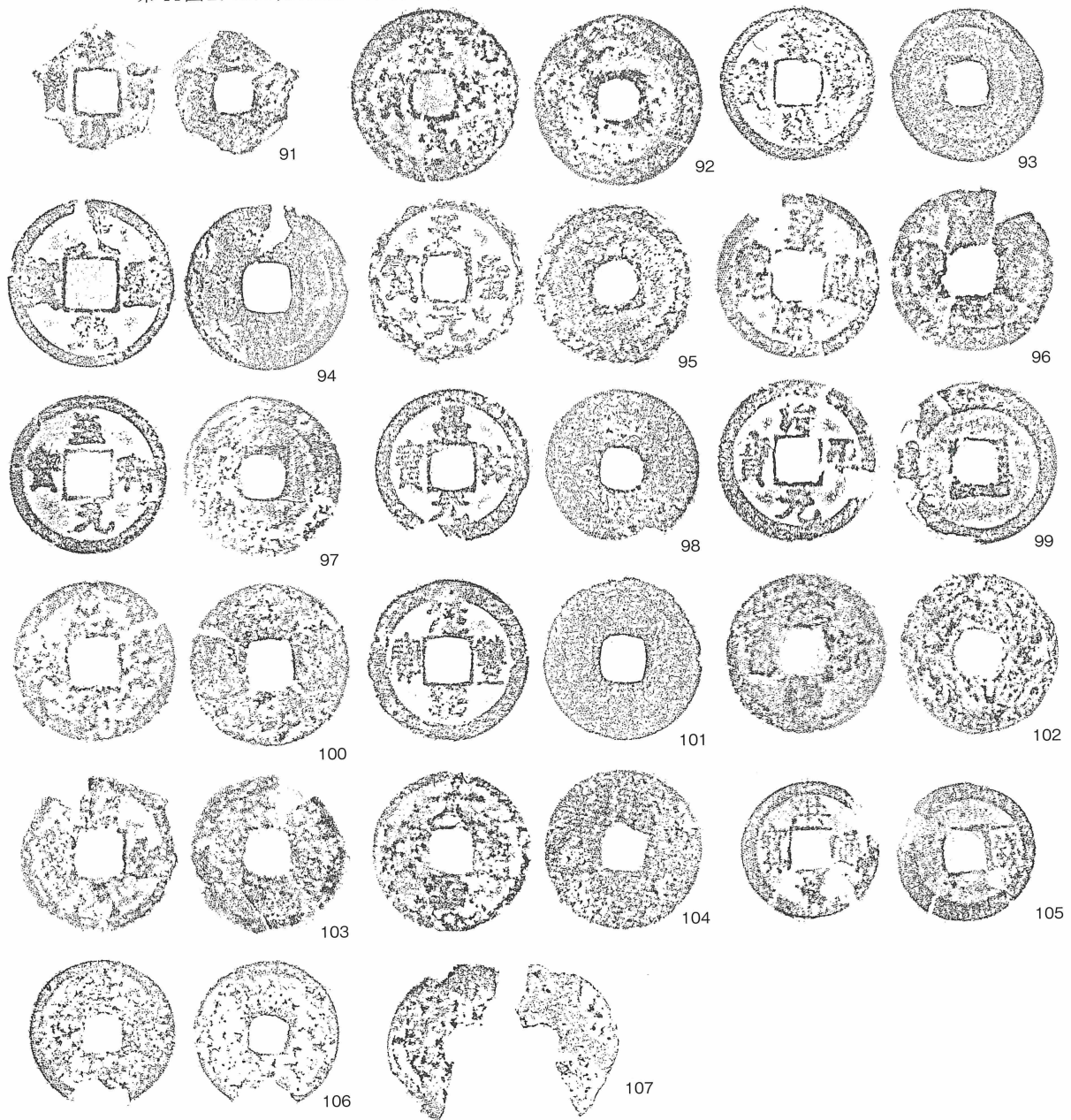
瀬戸美濃産

17～24は瓦質土器である。17～19は口径に差はあるが、口縁端部を外側に突き出るように肥厚させる特徴を持つ鉢である。内外面はヘラで磨かれている。20は口縁外端部を尖るように仕上げた鉢である。口縁部の内外面には小さな段が付き、外面にヘラによる文様がある。21は木製の棒を差込むための取っ手が付いた鉢である。22は口縁唇部の内面が肥厚する播鉢である。23は脚の付く皿である。24は断面三角形の高台の付く瓦器椀である。

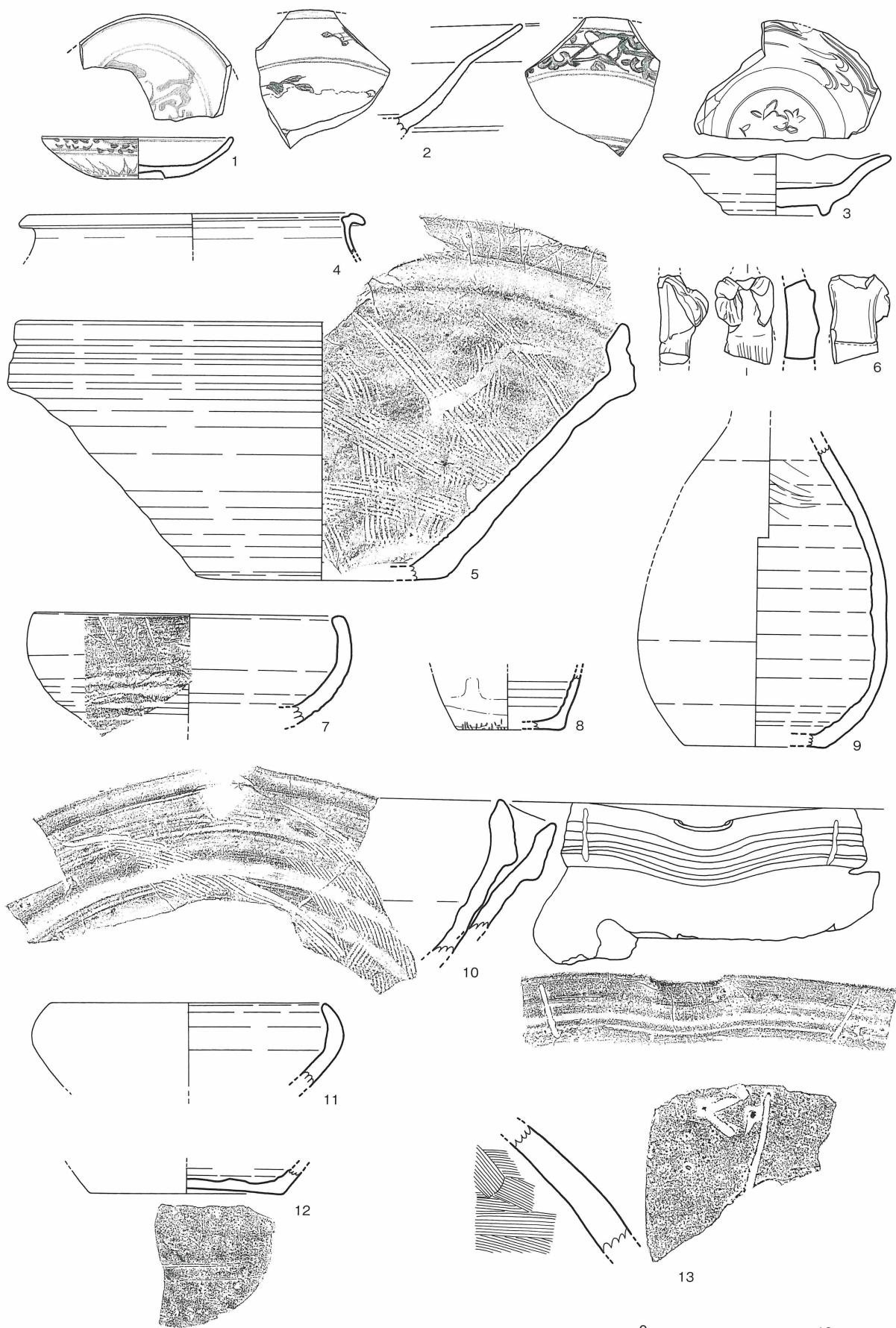
瓦器椀

25は複合口縁の壺形土器、26は甕形土器で弥生時代後期の土器である。

第44図27は口径3.6cmの糸切り底の皿であるが、28～108は京都系土師器である。28～33は口径

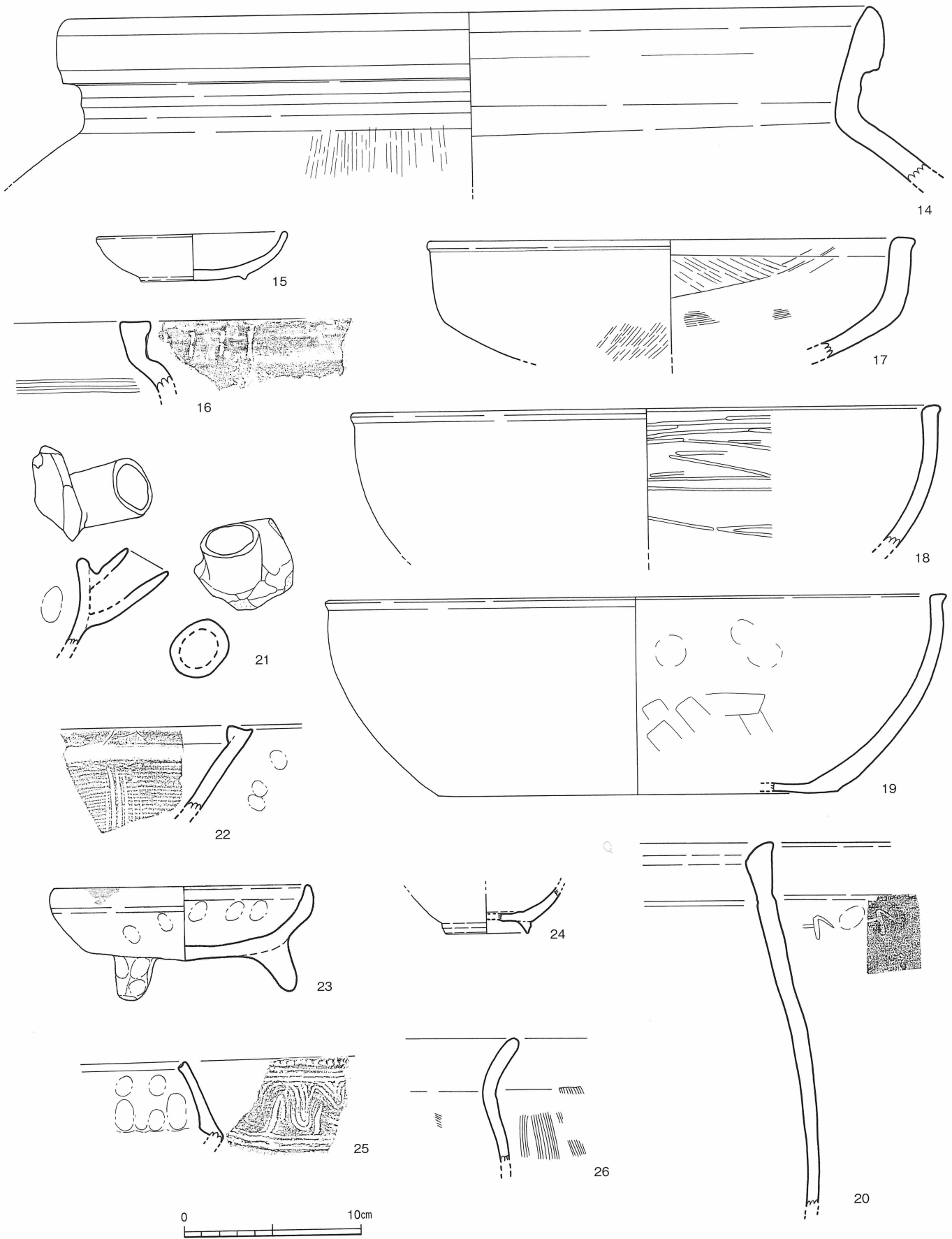


第41図 SF012出土銅銭実測図⑥ (1/1)

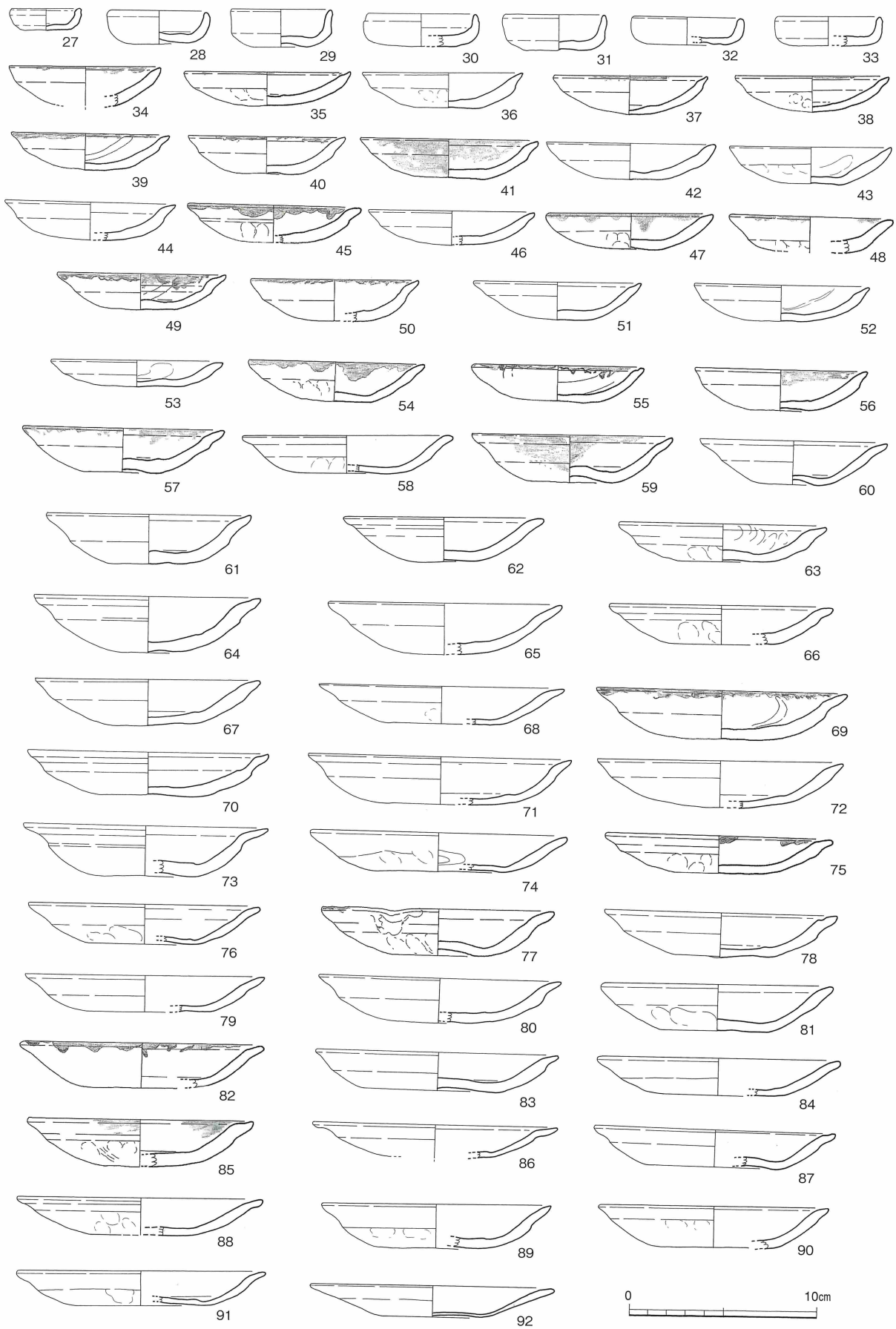


0 10cm

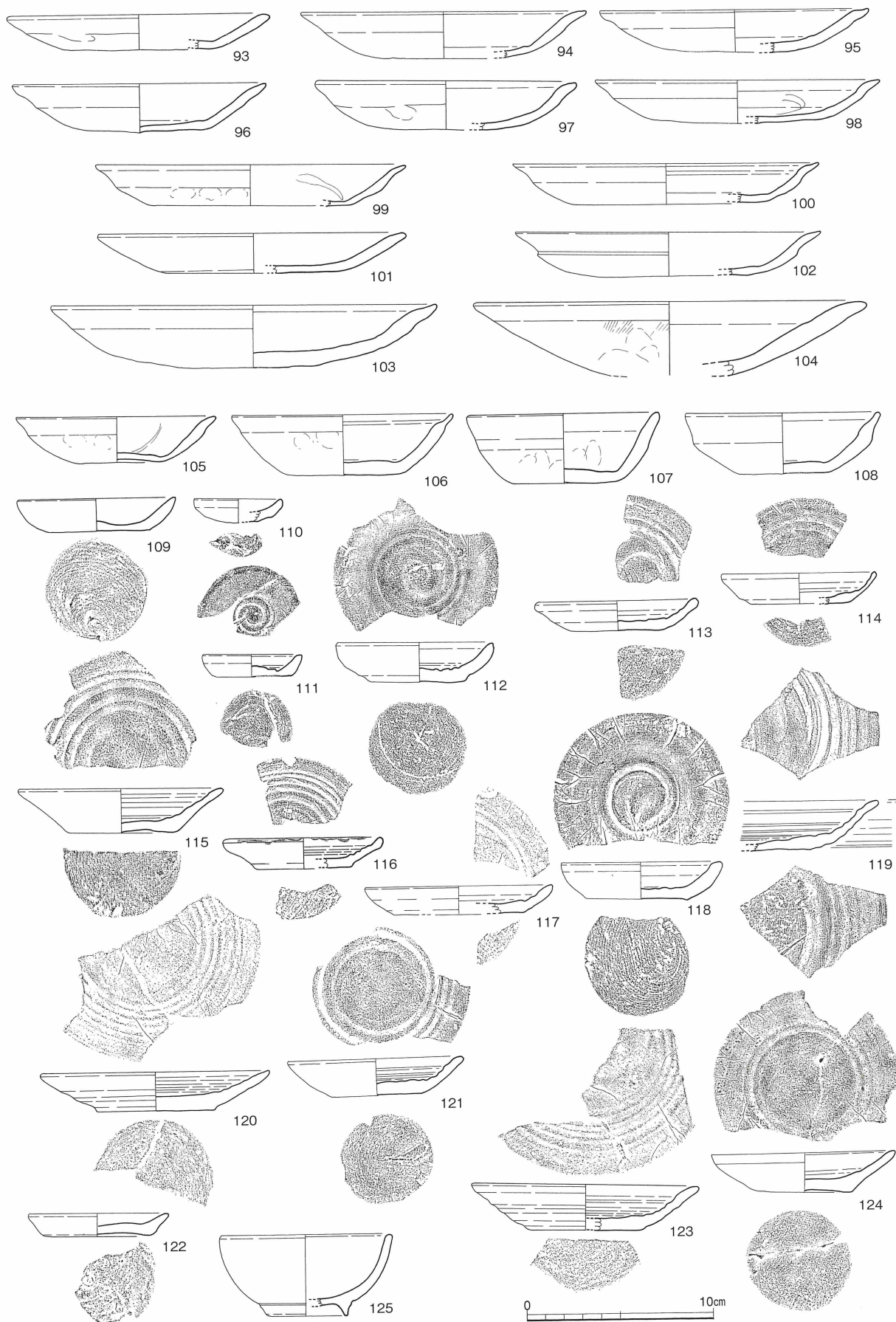
第42図 SD060出土遺物実測図① (1/3)



第43図 SD060実測図② (1/3)



第 44 図 SD060 出土遺物実測図③ (1/3)



第45図 SD060出土遺物実測図④ (1/3)

が5cm台で口縁部が直立する形態の皿であるが、焼塩壺の蓋の可能性もある。口径は34～56が9cm前後で、8cm台が多い。57～63は10cm台で、64～92は概ね12cm台である。さらに、第45図93～98は14～15cm台で、99～102は16cm台、103・104は20cm以上で、京都系土師器の中で例外的に大きい。105～108は在地化した京都系土師器で器高が高い坏形をしている。

109・110は糸切り底であるが、胎土は京都系土師器である。111～121・123・124は内面に螺旋状のロクロによる段が残るロクロ目土師器である。口径は111の5.2cmから120の12.3cmまであり法量の分化が認められる。122は在地系土師器の皿である。125は断面三角形の高台を持つ瓦器椀である。

燭台

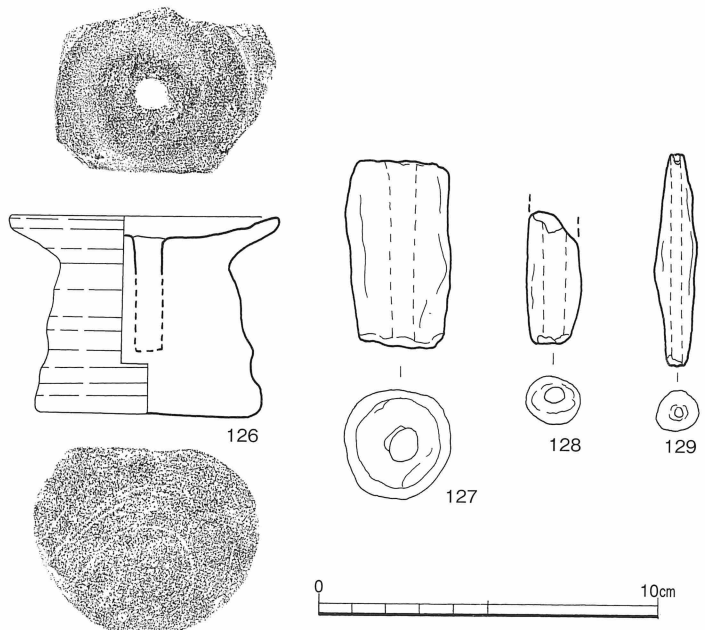
第46図の126は上面に貫通しない孔を持つ燭台である。127～129は土錘である。129は紡錘形であるが、他の2点は形態が異なる。

第47は凝灰岩製の石造品である。扁平な円形に仕上げた後、中央部に径8cm、深さ2cmの窪みを造っている。未製品の可能性もある。

箸

131～140は棒状の木製品である。140以外は、形状や断面形から箸と考える。131・132・135が完形品で24.0、22.5、21.0cmである。140は他に比較すると長く、断面形も異なる。141は下駄である。表面に花卉状の文様が刻まれている。下駄歯に年輪の中心部が残されていることから、木材の中心部が使用されている。

下駄



第46図 SD060出土遺物実測図⑤ (1/3)

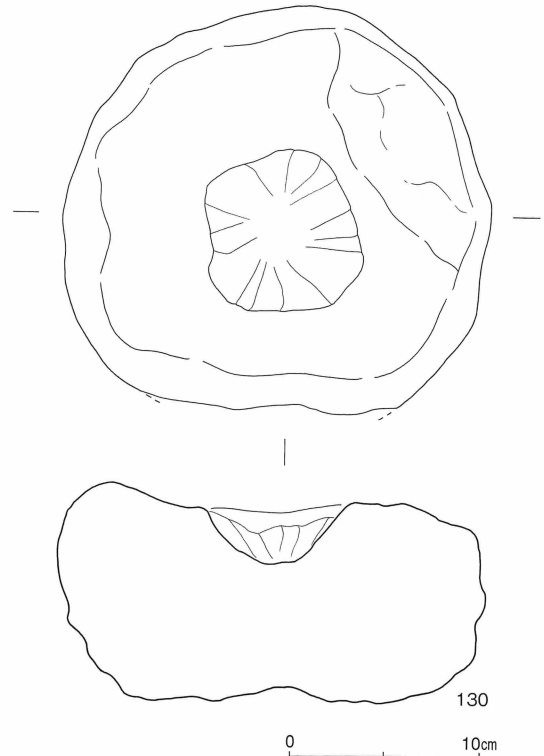
天草石

142は使い込まれた砥石の破片で、材質は天草石と思われる。

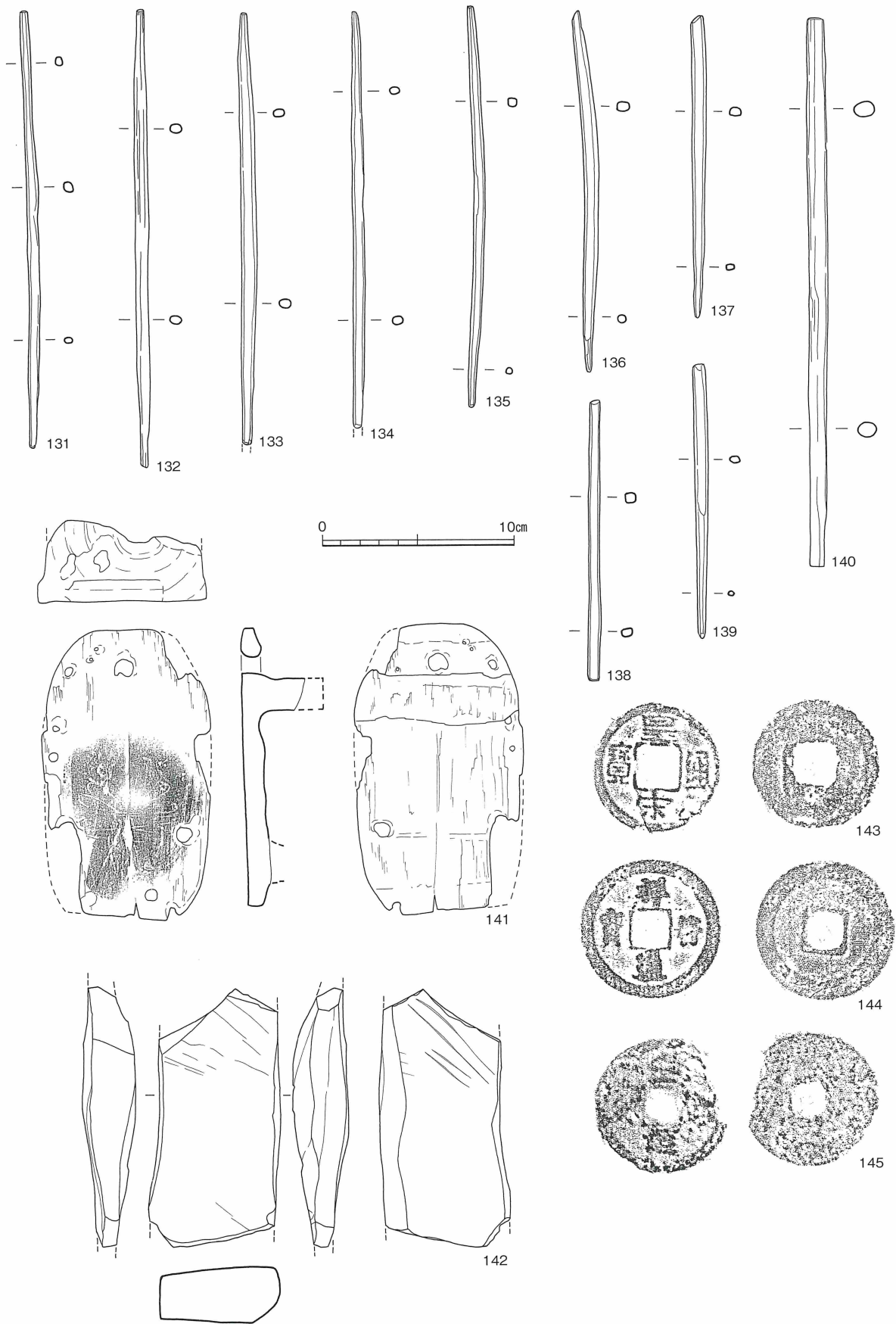
143～145は銅銭で、143は1038年初鑄の真書体による「皇宋通寶」である。144の銭貨名は「元豊通寶」で、1009年初鑄の北宋銭である。145の銭貨名は不明である。

備前焼

SD060の時期は、第42図2の小野編年F群の青花皿、6・10の斜め播り目の備前焼播鉢、第45図の105～108の在地化した京都系土師器の坏が出土していることから16世紀後葉まで機能していたことが理解できる。その埋設時期は、付図3-2～3-4図で見ると、SF012である第2南北街路の整備時期に埋め立てられたことが判る。この土層断面図では、街路整備化にあたり、街路部分に掘り込まれた土坑を含め、SD060をある程度埋め立てた後に、街路整備のための土砂を版築状に積み重ねている。そして土坑や溝の部分が沈下するためか、土層が厚くなっており、街路から続く土層がSD060の溝の東側を覆っている。



第47図 SD060出土遺物実測図⑥ (1/5)



第48図 SD060出土遺物実測図⑦ (1/3) 143～145(1/1)

SD200 SD200は付図1-2図に図示したように、調査区の東南部で検出された。この溝は、豊後府内最大の寺院である万寿寺の周囲を囲むもので、平成14年に第20次調査として北側、平成15年に第34次調査、平成16年に第43次調査として西側を確認していた。府内町跡第51次調査で検出したSD200は北側と西側を結ぶ北西角を確認したことになる。

遺構は、付図2-1図に図示したが、北西隅から、南に約45mの長さを調査したが途中5m部分は未調査区を残した。調査によって明らかにされた規模は幅7~8m、深さ約2.6mで断面形態は逆台形をしている。付図2-2の土層断面図を見ると、万寿寺側の掘り込み角度は急傾斜であるが、西の街路側は緩やかである。さらに平面図と合わせて見ると、整備する以前の街路下に掘り込まれた土坑の東側が掘削されていることが判る。また、埋め立てられたSD200の上面には天正14年(1586)の島津氏侵攻に起因すると想定する焼土層が覆っている。こうした事実を遺構の切り合い順に見ると次のとおりになる。

- ①街路部分に土坑が掘り込まれる。
- ②万寿寺の掘りSD200が西側に拡張され①の街路部分に掘り込まれた土坑の東側が掘削される。このため、堀の西側の傾斜が緩やかになっている。
- ③堀が埋め立てられ、町屋化すると同時に土砂を版築状に積み上げ、第2南北街路の整備を行なう。
- ④天正14年12月、島津氏の侵攻を受ける。

SD200からは多量の遺物が出土している。それらは、第51~91図1~751に図示している。第51

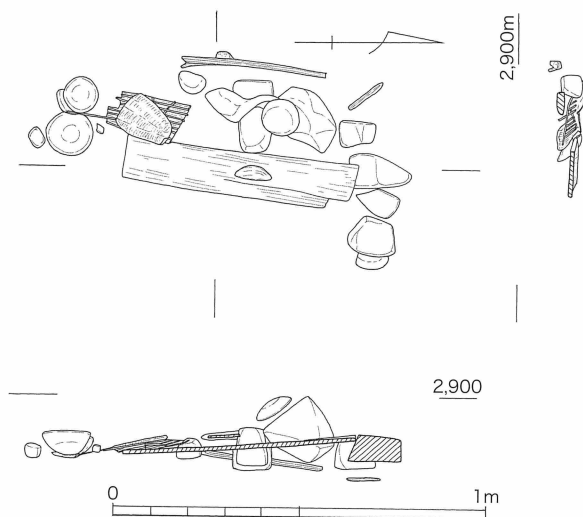
~56図は貿易陶磁器である。1~42は青花であるが、1・2は口縁部が外反する薄手で精緻な碗である。景德鎮窯系で小野編年のB群にあたる。3~5も景德鎮窯系の碗である。6~8は復元によりほぼ完形品の碗で、14を含め小野編年のE群にあたる。9は漳州窯系の碗である。10は見込み部に文様がある底部である。11・12は口縁部と底部に経線のみ文様性に乏しい碗である。13は見込み部が蛇目釉剥ぎの大型碗で漳州窯系と考える。

第52図15~26は皿で、15・16は碁笥底で小野編年の染付皿C群である。17は口径に比較すると高台径が小さく、器高

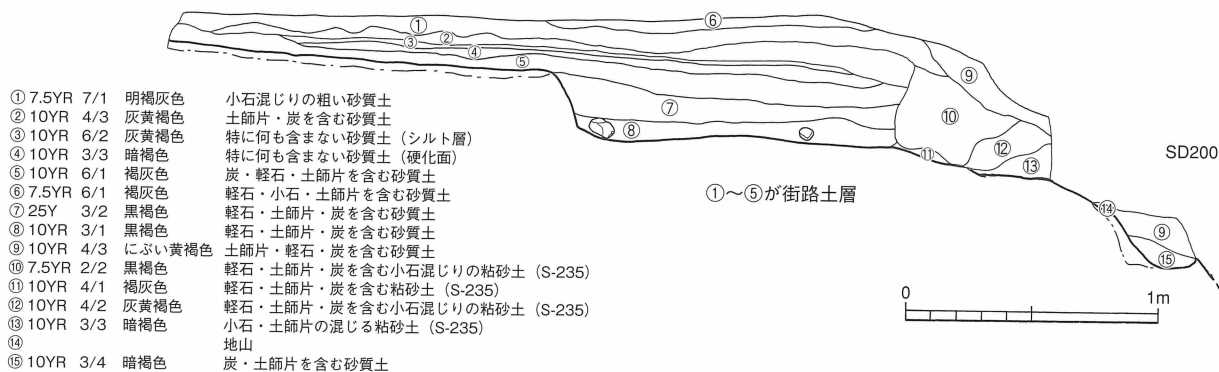
景德鎮窯系

漳州窯系

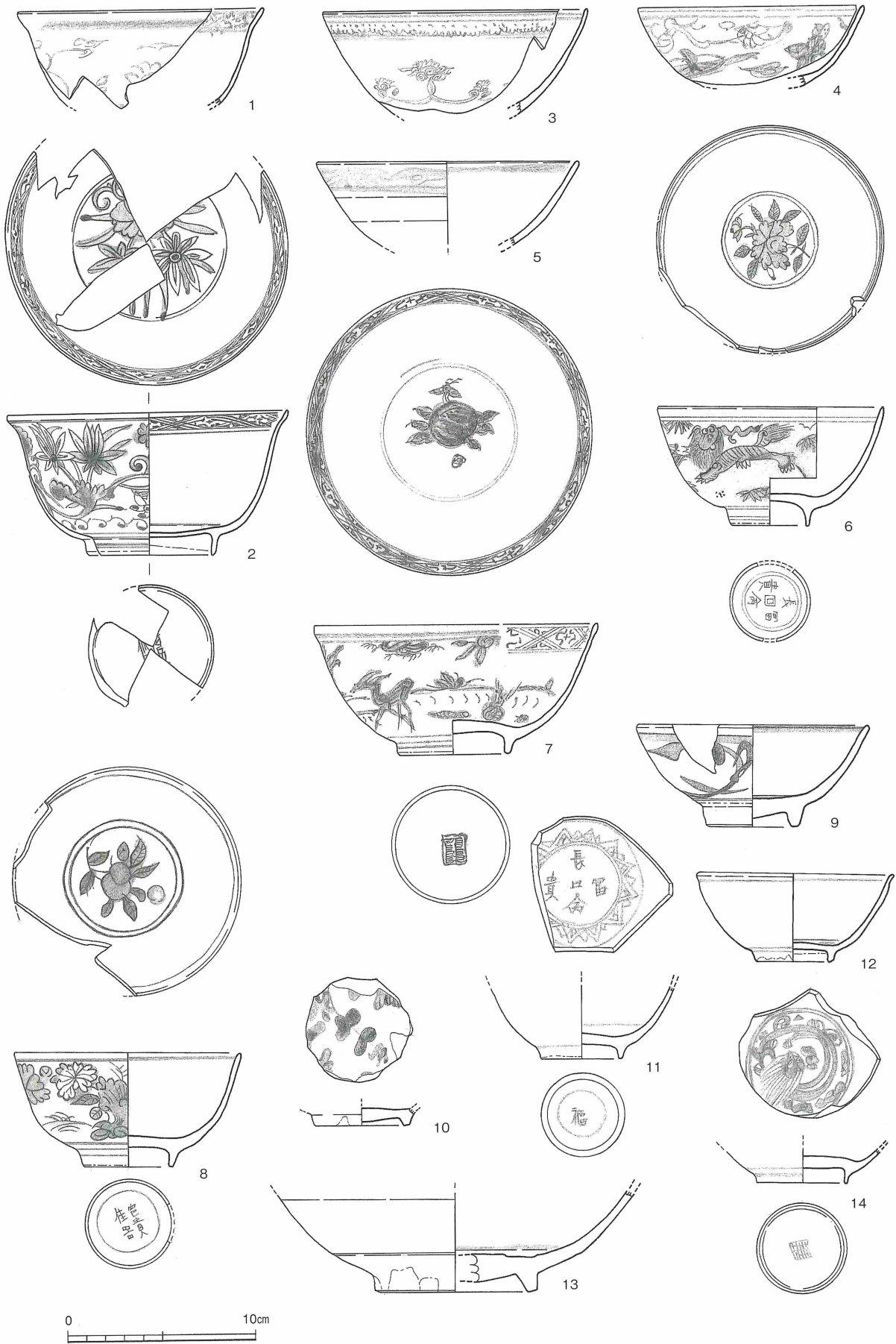
蛇目釉剥ぎ



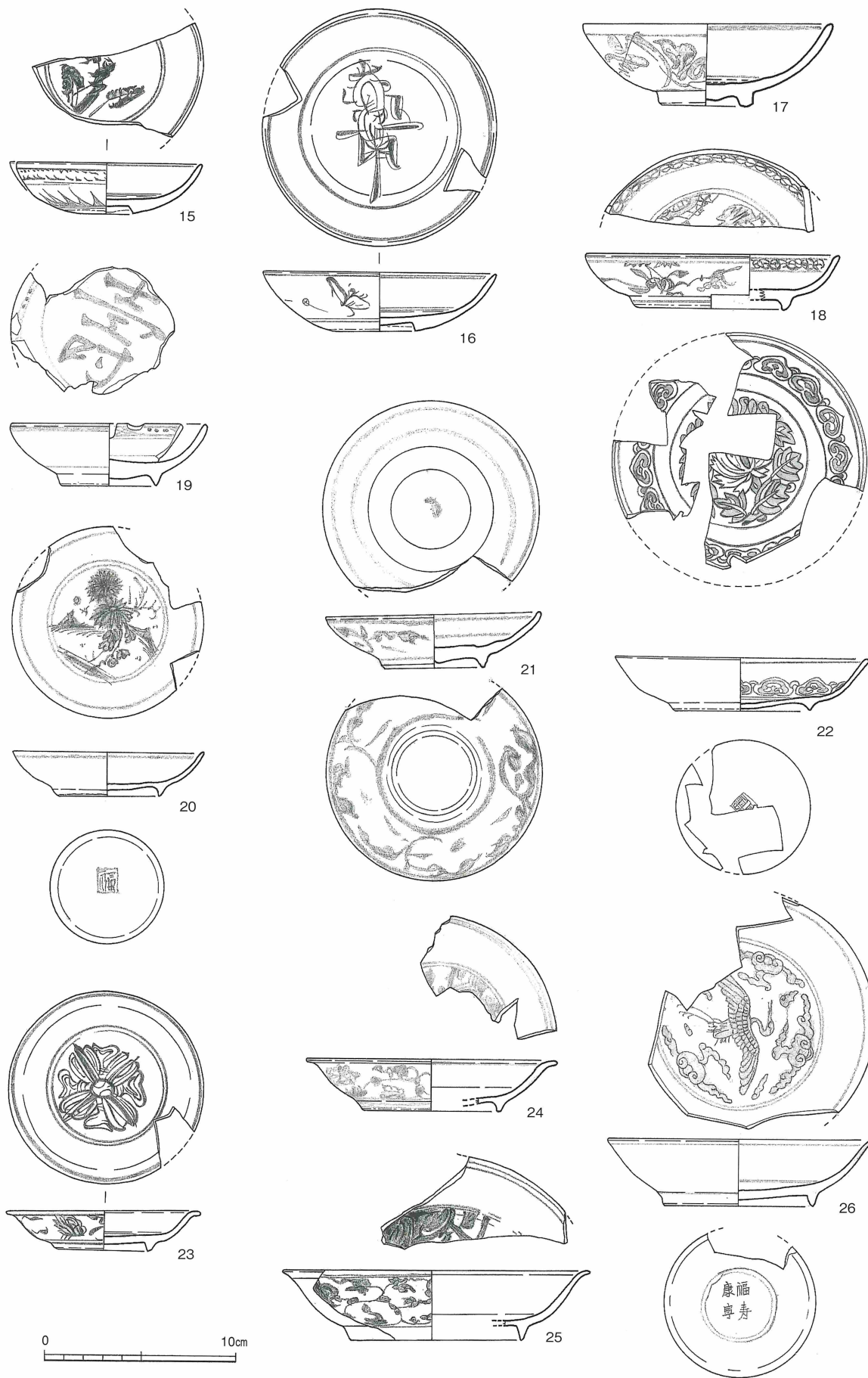
第49図 SD200遺物出土状態(1/20)



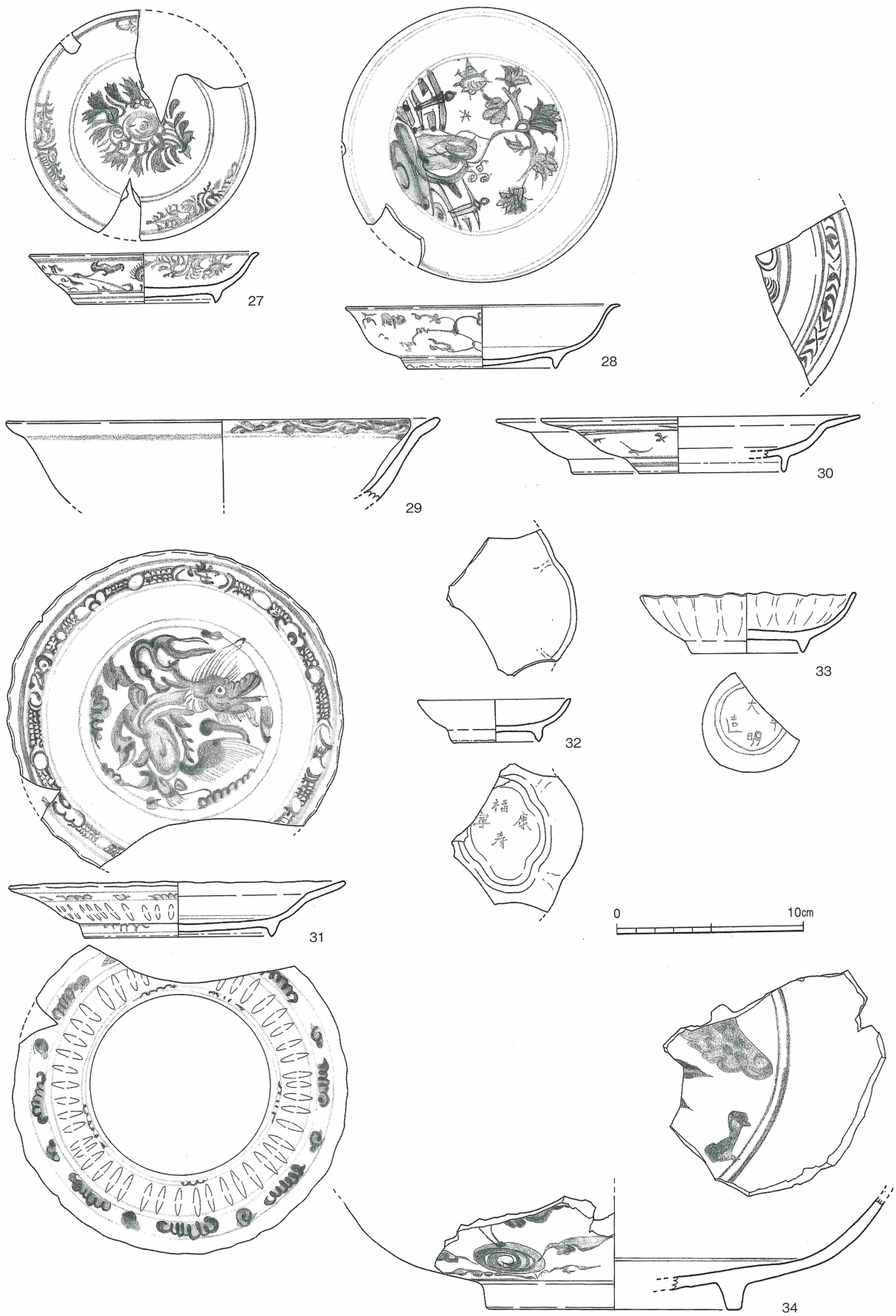
第50図 I-40東西方向断面図(土坑と万寿寺の堀と街路を示す) 1/30



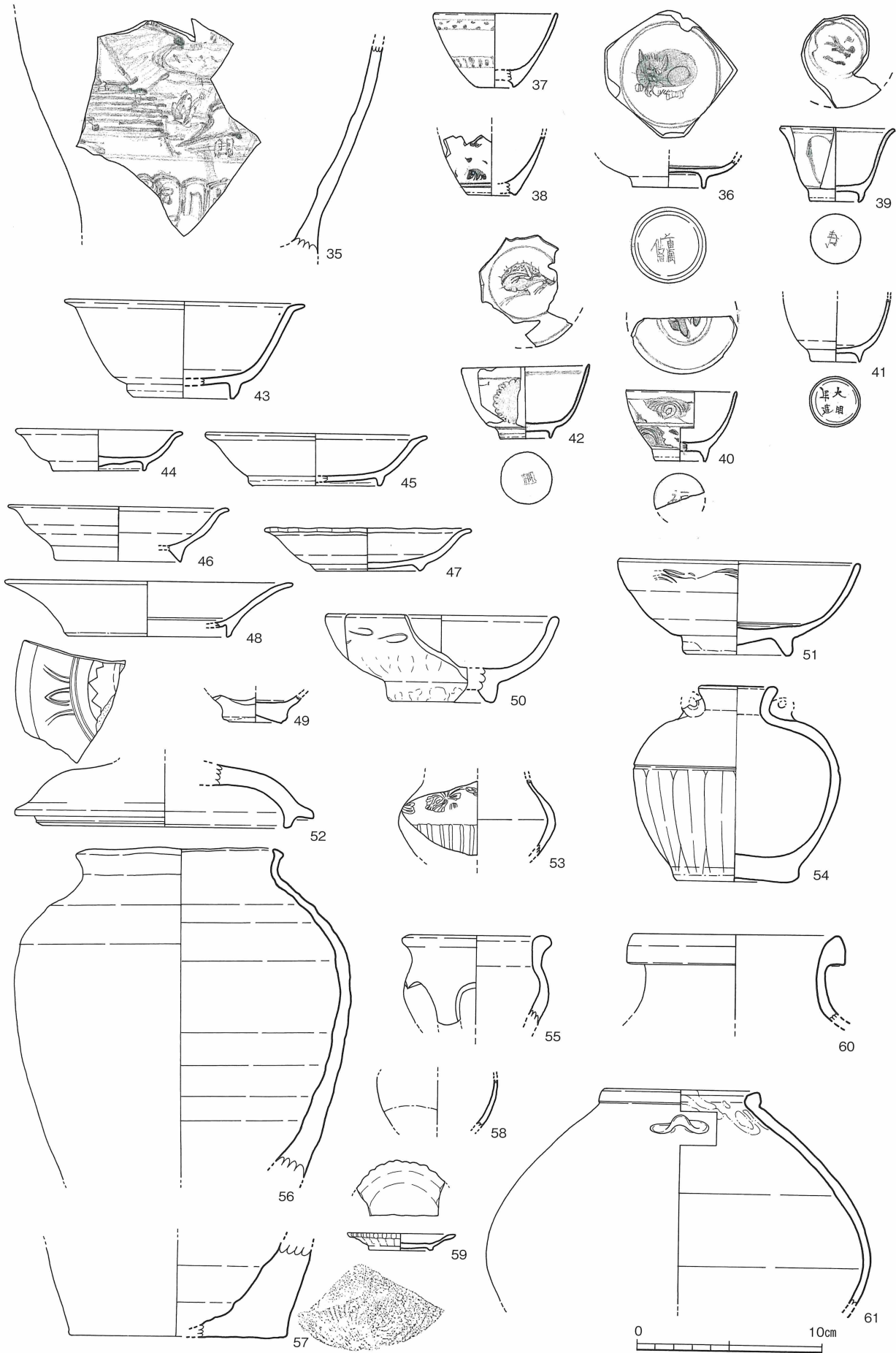
第51図 SD200出土遺物実測図① (1/3)



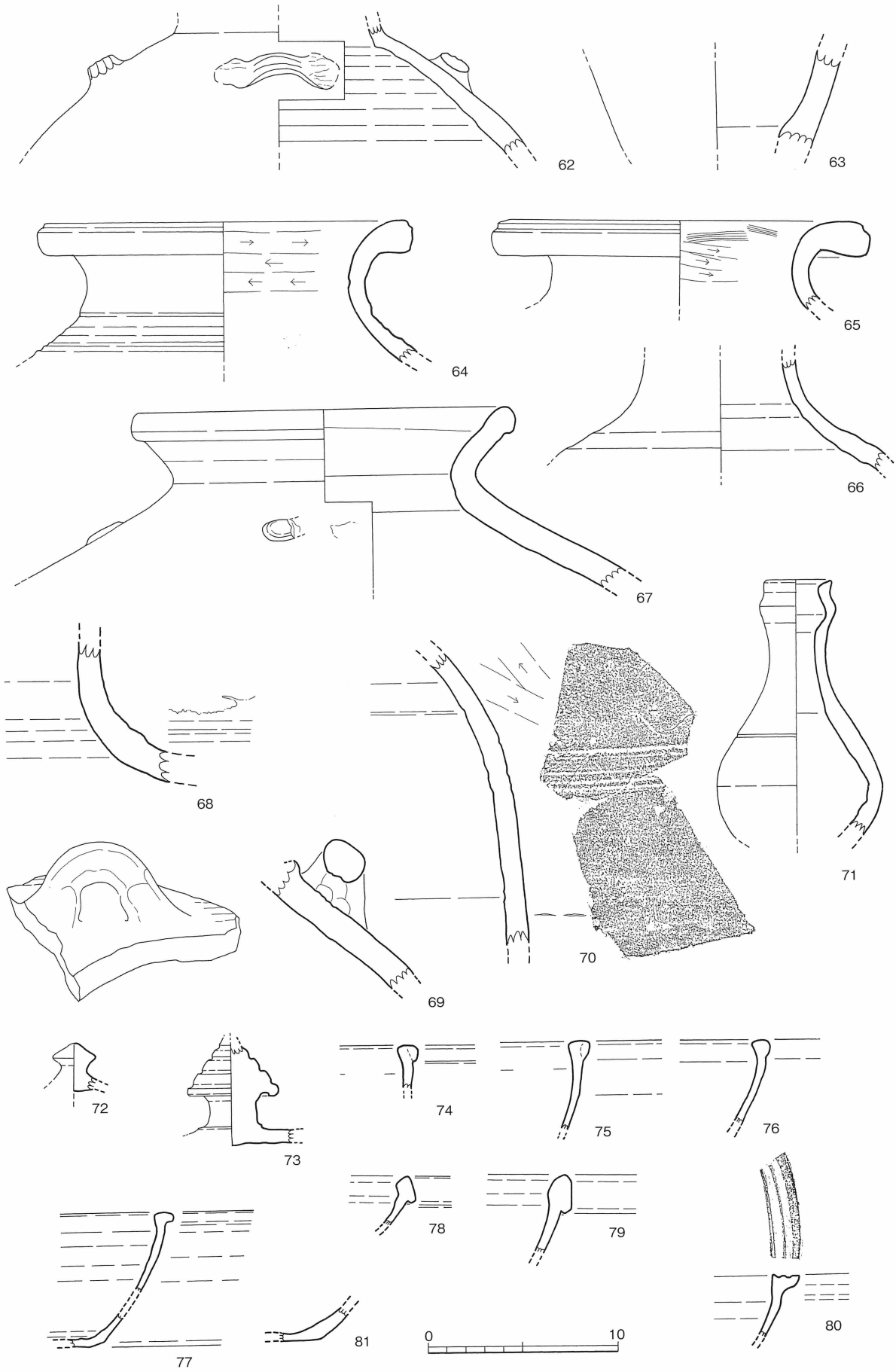
第52図 SD200出土遺物実測図② (1/3)



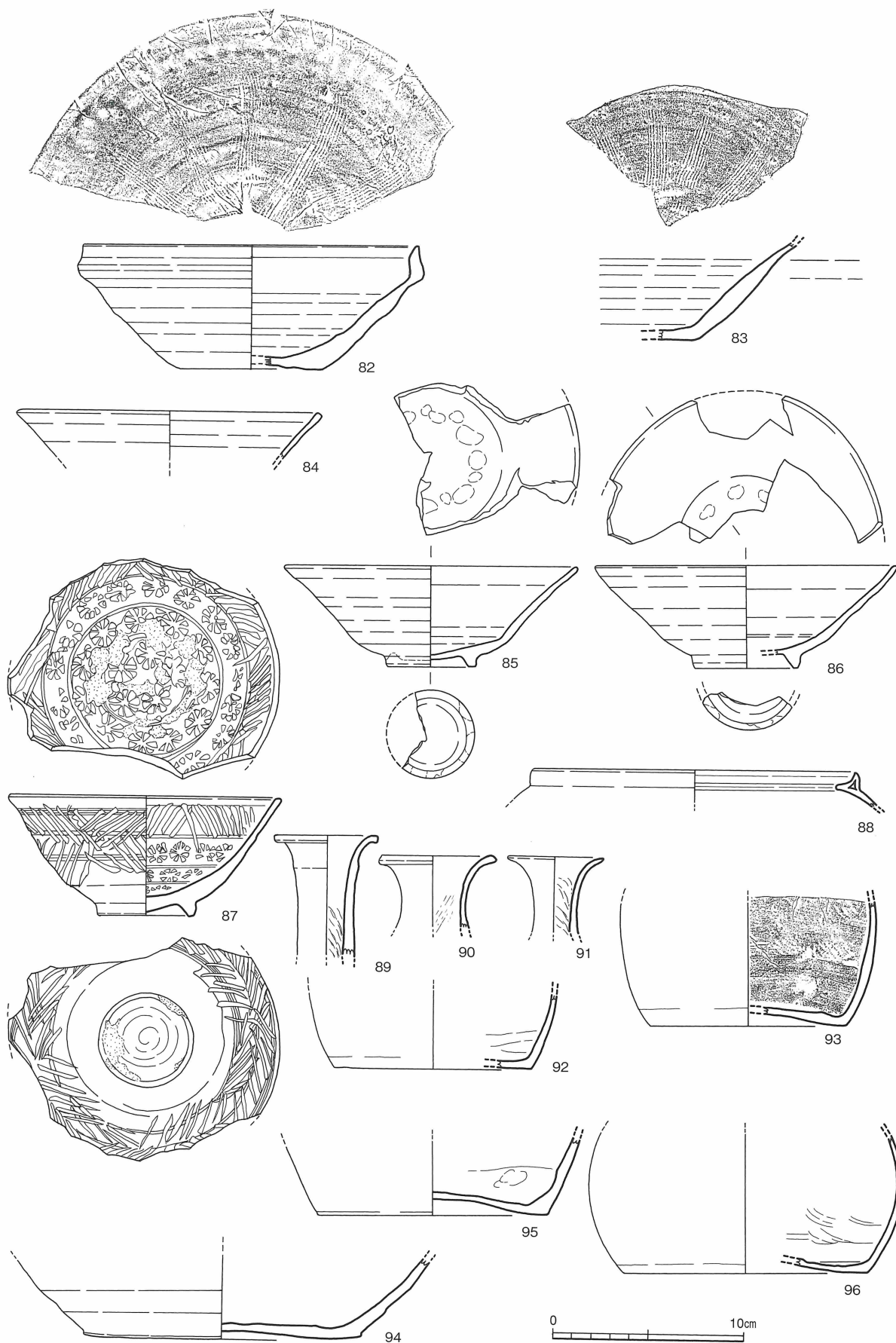
第53図 SD200出土遺物実測図③ (1/3)



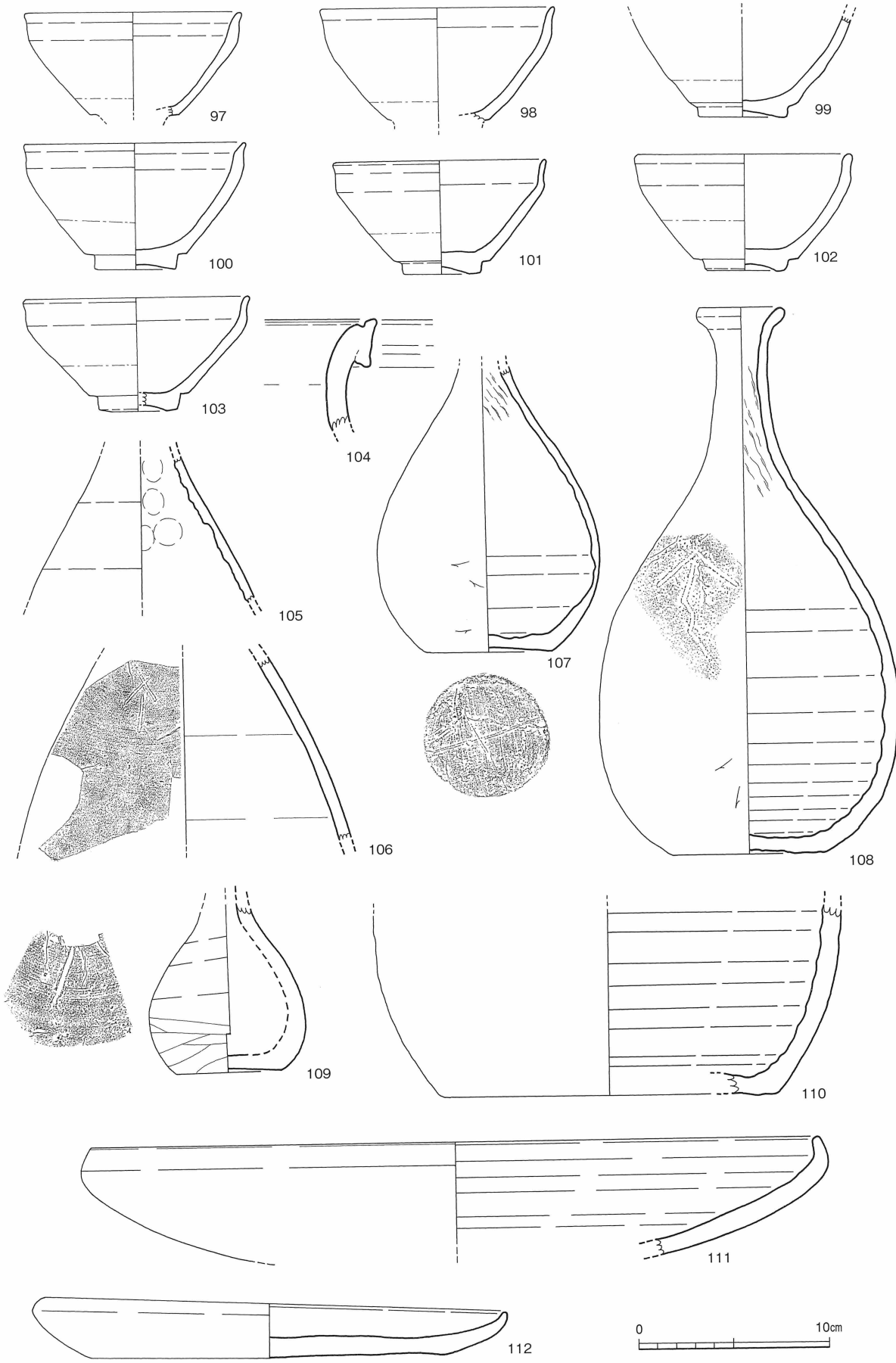
第54図 SD200出土遺物実測図④ (1/3)



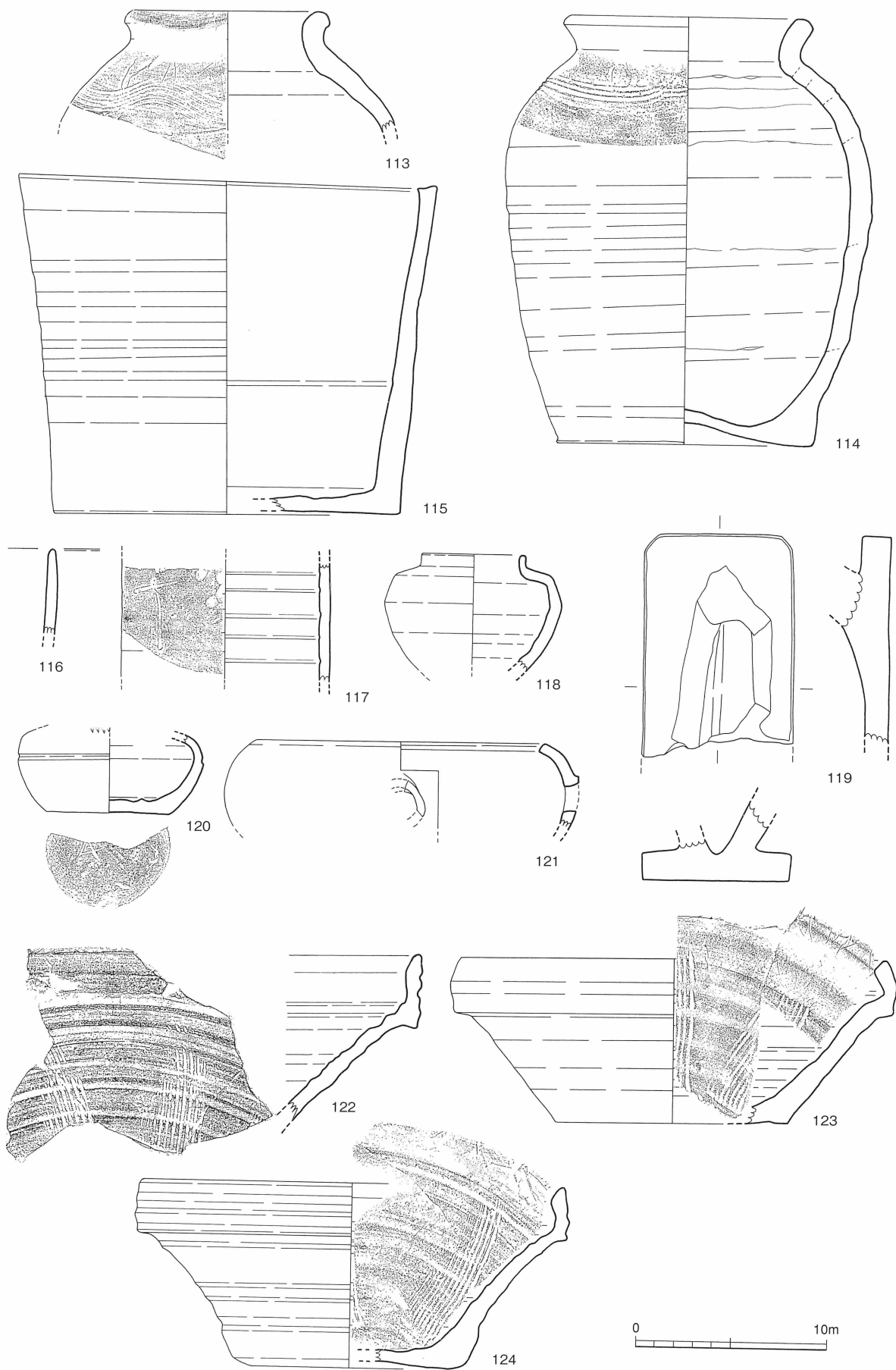
第55図 SD200出土遺物実測図⑤ (1/3)



第56図 SD200出土遺物実測図⑥ (1/3)



第57図 SD200出土遺物実測図⑦ (1/3)



第58図 SD200出土遺物実測図⑧ (1/3)

の低い碗と考える。18～22・26は染付皿E群、23～25・第53図27・28は染付皿B2群である。21は漳州窯系であるが、他は景德鎮窯系である。

景德鎮窯系

第53図29～31は口縁部が屈曲する染付F群の皿である。景德鎮窯系と考える。32は木瓜皿で、高台内に「福寿康寧」、33は白磁の輪花皿で高台内に「大明年造」の銘記がある。34は底径13.4cmの青花の大皿で漳州窯系である。第54図35は青花の壺である。36は見込みに猫が描かれている小碗である。37～42は小坏である。42は赤絵である。43～48は白磁である。43は碗でそれ以外は皿である。49の底部は蛇目釉剥ぎの青花碗で漳州窯系と考える。50～55は龍泉窯系の青磁で、50・51は碗、52は蓋、53・54は小壺で、55は香炉である。56・57は類似した個体の黒褐色釉の壺である。58は外面の底部付近以外釉のかかる褐釉陶器で、茶入れの可能性ある。59は翡翠釉の皿である。60は褐釉陶器の壺で、61は黒褐色の釉のかかる四耳壺である。

漳州窯系

赤絵

茶入れ

四耳壺

タイ産四耳壺

クンディ

朝鮮王朝産

彫三島

船徳利

常滑焼

備前焼

水指

薬研

「二石」

第55図62は青磁の四耳壺である。63は褐釉陶器である。64～70は焼締陶器で、タイ産四耳壺のそれぞれの部位である。71も焼締陶器で、口縁部が袋状になり、クンディの可能性ある。72～80も焼締陶器で、72・73は蓋のつまみであろう。74～80は口縁部が様々な形態に肥厚する鉢である。第56図82・83の小型の播鉢は備前焼と考える。84～94は朝鮮王朝産の陶器である。85～87の内面には胎土目が残る。87の彫三島の茶碗は、巻頭カラー4にも出土状態を報告しているが天正14年起因の焼土層下約1mのSD200の中位からの出土である。88は蓋受けのある鉢である。89～93・95・96は船徳利であるが、94は鉢と考える。

第57図97～103は瀬戸美濃産の天目茶碗である。104は常滑焼の壺である。105～第67図187は備前焼の各器種である。105～110は大小の徳利で、ヘラによる記号がある。111・112は皿である。113・114は壺で肩部に櫛描き文様がある。115は口縁部が直口する鉢で、水指と考える。116・117は円筒形の容器で掛花入れ、118は大海型の茶入れと考える、119は薬研である。120は小壺、121は口縁部が内湾する鉢で、胴部に孔が開く。122～147は播鉢である。内面は斜め播目の播鉢が一定量を占める。148～170は大甕である。胴部には「二石」や「ひねりつち」を思わせる文字の一部や、幾何学的なヘラ描きが認められる。116は復元された完形品で1/6で図示している。第67図171～180は口縁部が内湾する皿や鉢である。181～185は口縁部が直立する壺で、183・184の肩には耳が付く。186は水屋甕である。187の底部の器種は不明である。

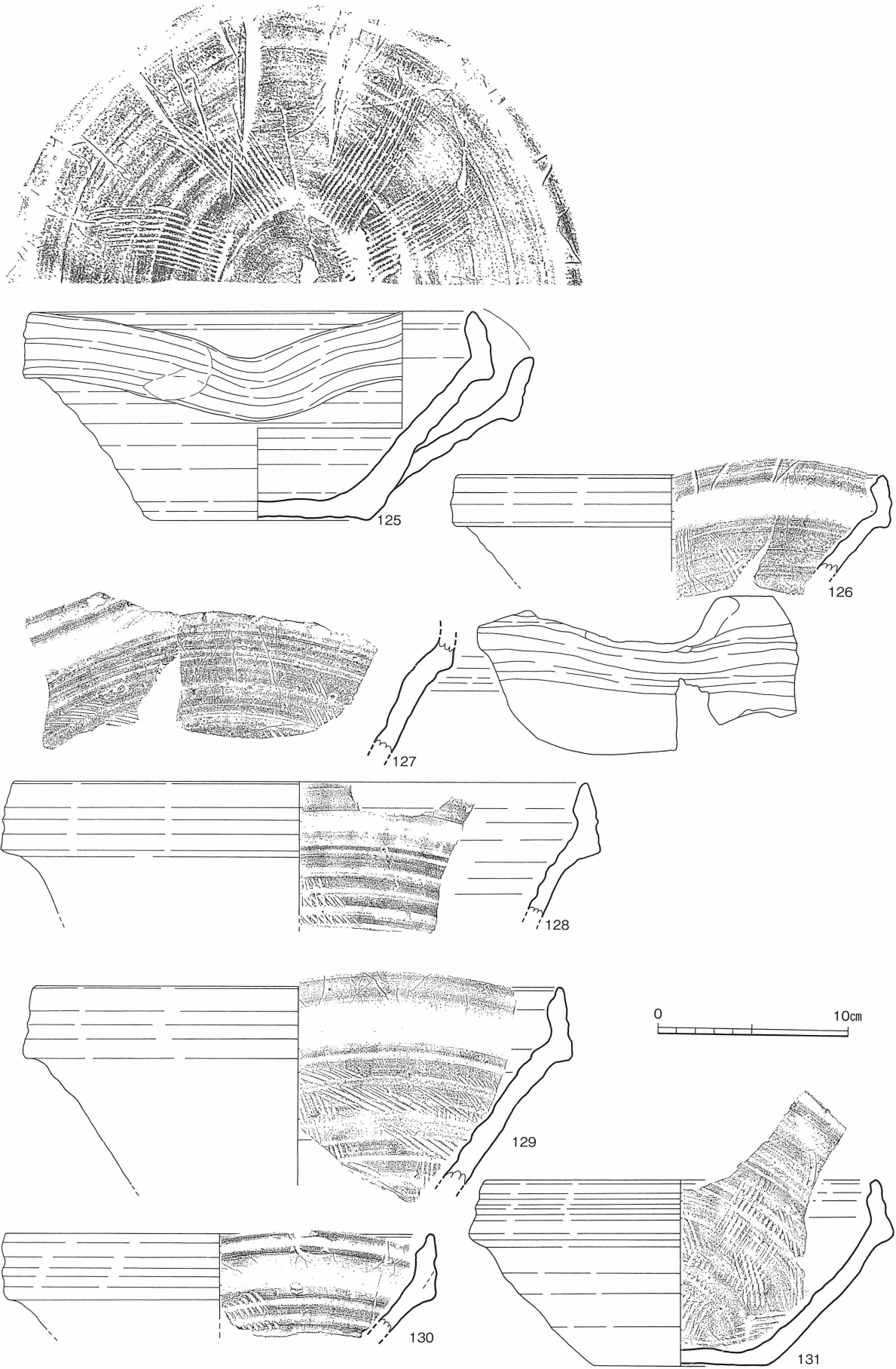
第68図188・189は東播系鉢である。190～第71図213は瓦質土器の各器種である。190は断面三角形の高台の付く瓦器碗である。191は小破片であるが鉢と考える。192～194は播鉢で、内面に放射状、見込み部に波状の播り目がある。195は内面にヘラ磨き痕の残る鉢である。196は三足の香炉、197は口縁部が肥厚する鉢である。198は短い円筒形の脚を持つ風炉で、丁寧に仕上げられている。第69図199～203は各種の鉢である。204は片口の鉢で、内面に放射状に線が刻まれている。105は壺の底部である。206・207は同じ器形の脚付の鉢である。第70図208も同じ器形になると考える。209は短い脚が3ヶ所に付く甕である。内面には刷毛目がある。210は大甕で、内面には刷毛目、外面は刷毛目と格子状の叩き痕が残る。211・212は同一個体の可能性のある角火鉢である。213は底部近くに双頭蕨手文スタンプがある三脚の火鉢である。

三足の香炉

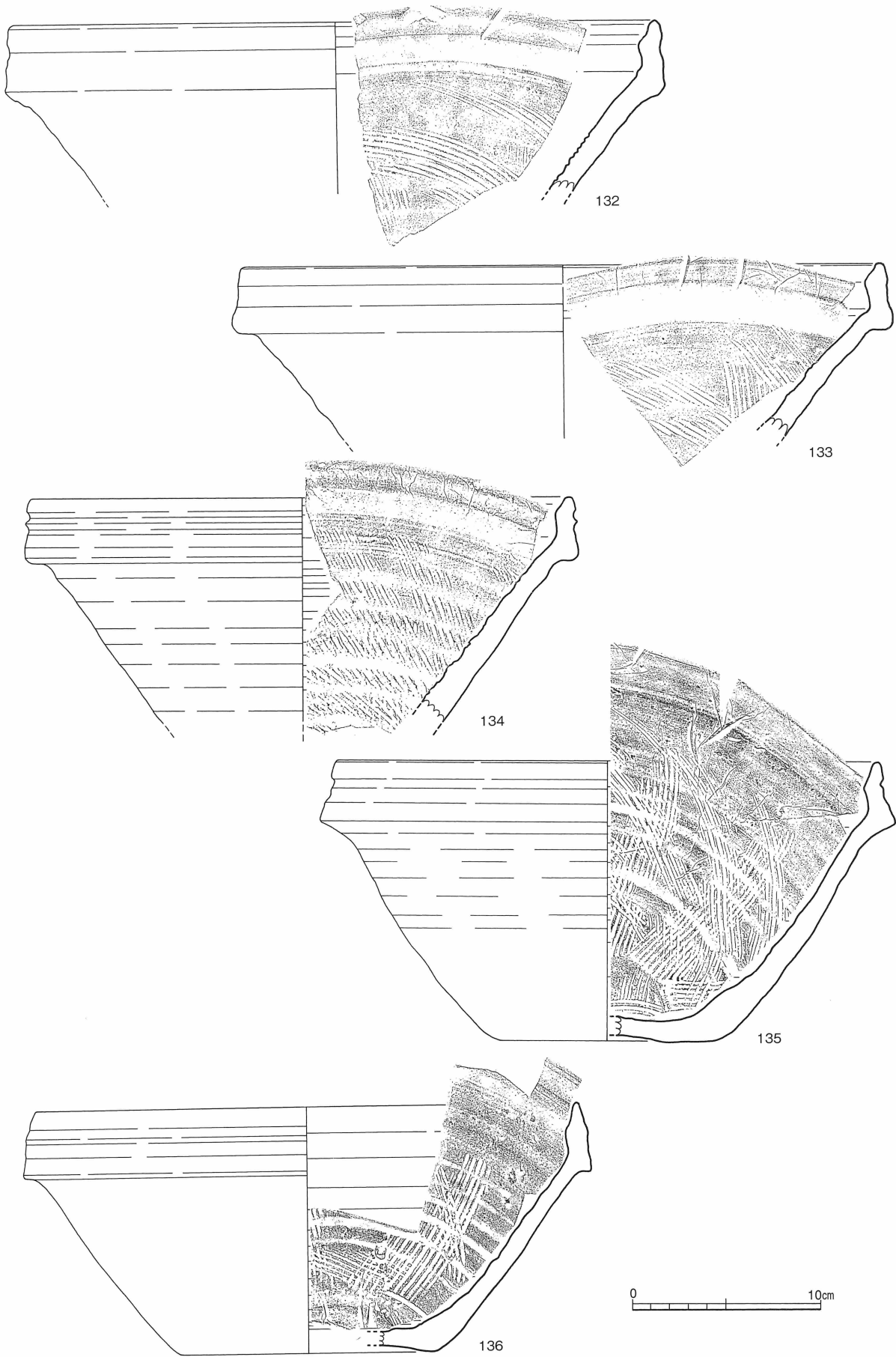
風炉

京都系土師器

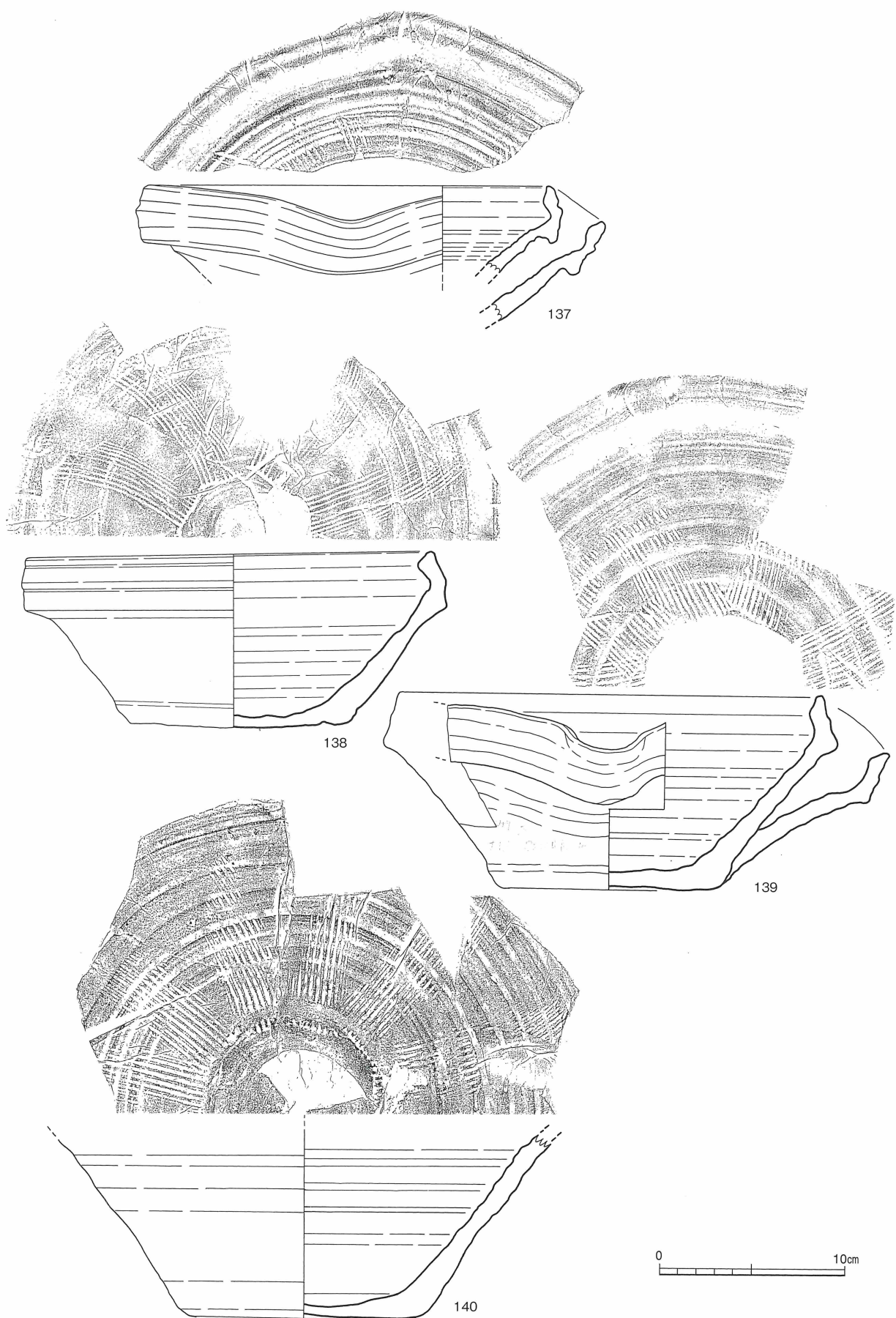
第72図～75図の214～484は京都系土師器、即ち非ロクロ系土師器である。第72図と第73図31～345に図示した京都系土師器は、口径が概ね8cm台である。灯明皿として再利用されるものが多く、第72図216・222・223の口縁部周辺に墨書と思われる部分がある。第73図346～368は口径が11cm前後、である。また第73図369～第74図438の概ね口径は12cm台で、439～443は15～16cmである。以上の器形は皿形であるが、第75図444～477は、口径に比較するとき器高が高く、坏形をしている。444・445は小型であるが、それ以外は、口径11cm前後であるが、器高は3cmを越えるものが主体を占める。これらは、在地化し、新しい器種を創出したものである。478～481は口径5cm台で口縁部



第59図 SD200出土遺物実測図⑨ (1/3)

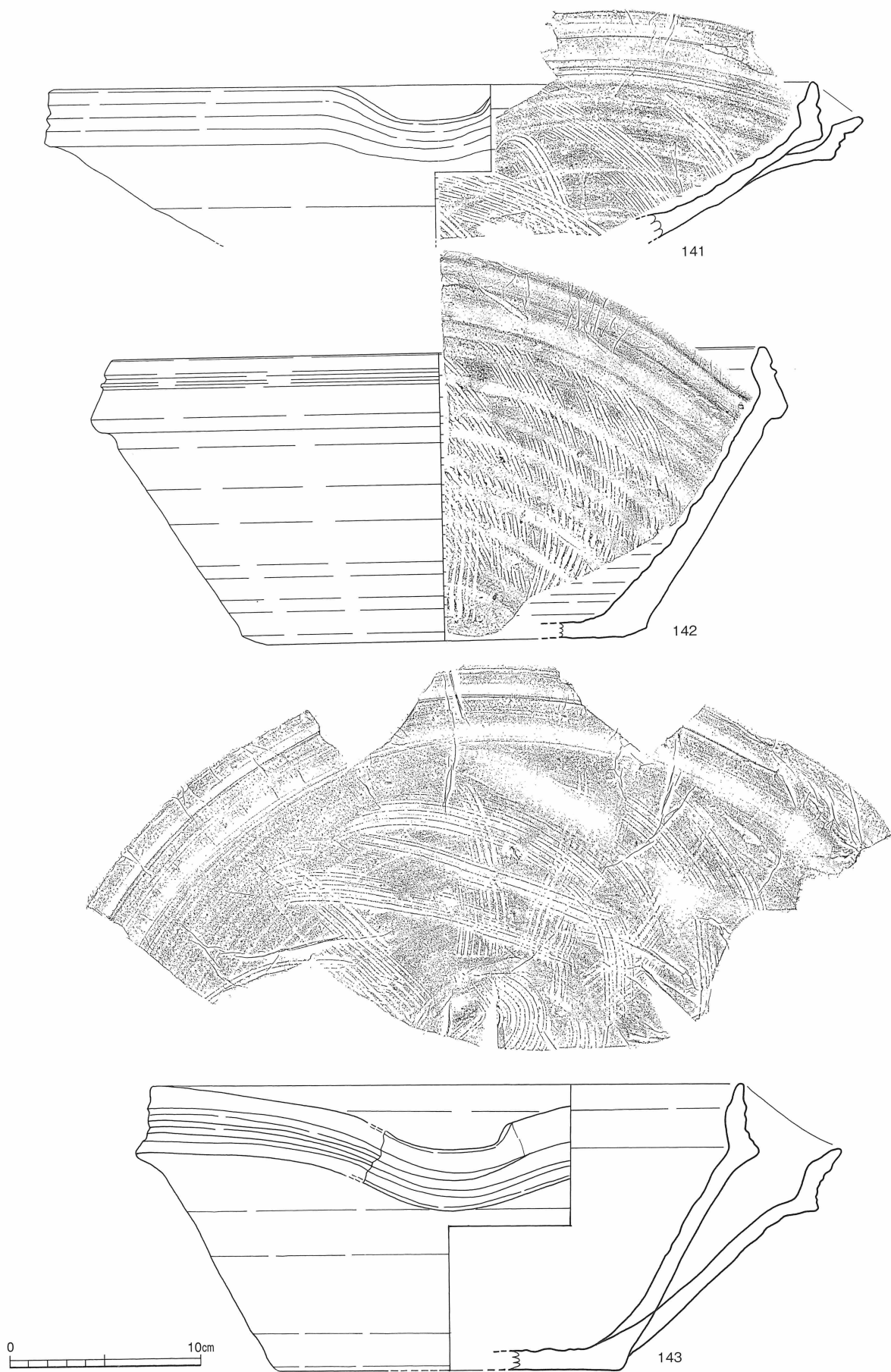


第60図 SD200出土遺物実測図⑩ (1/3)

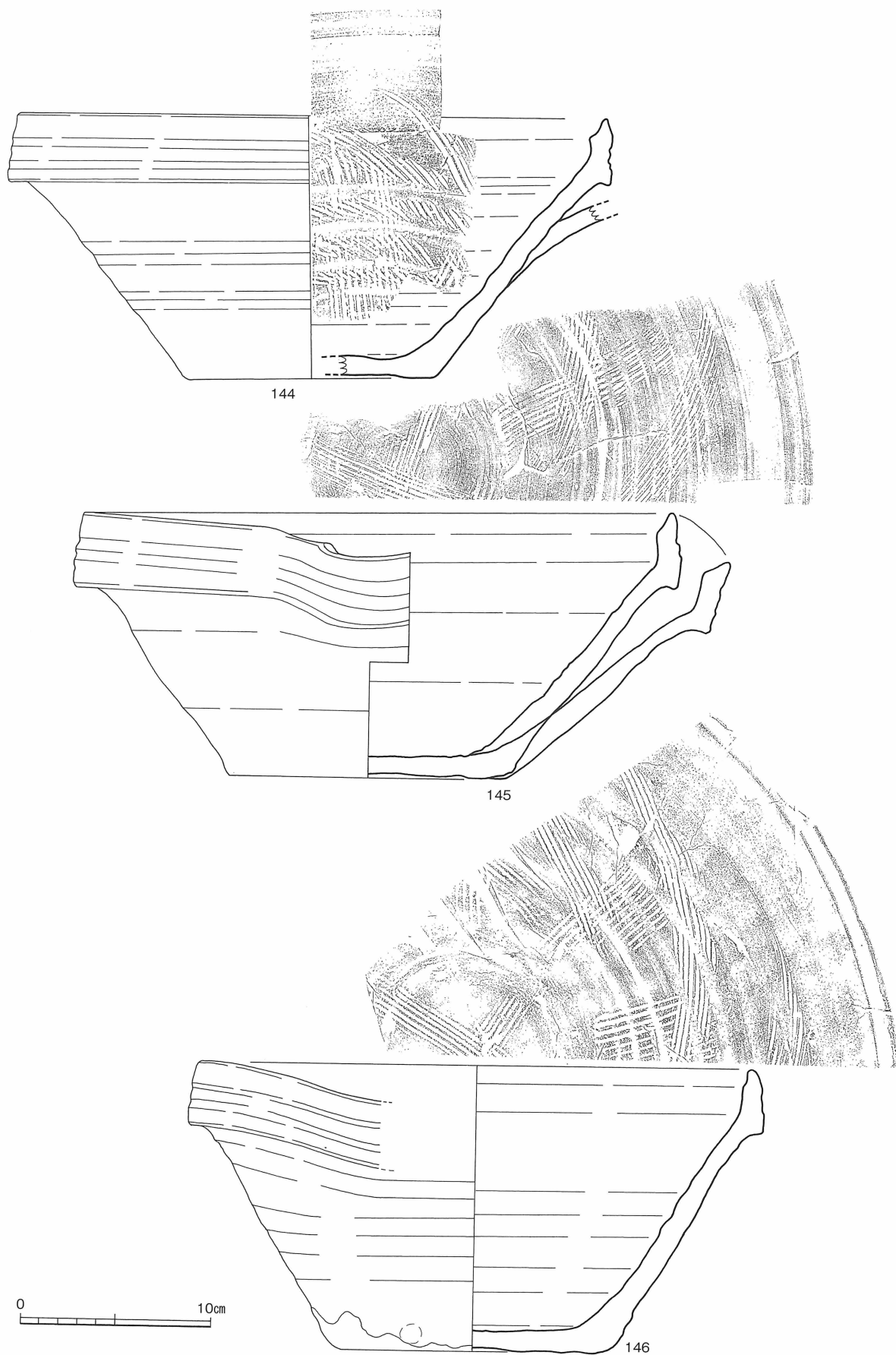


0 10cm

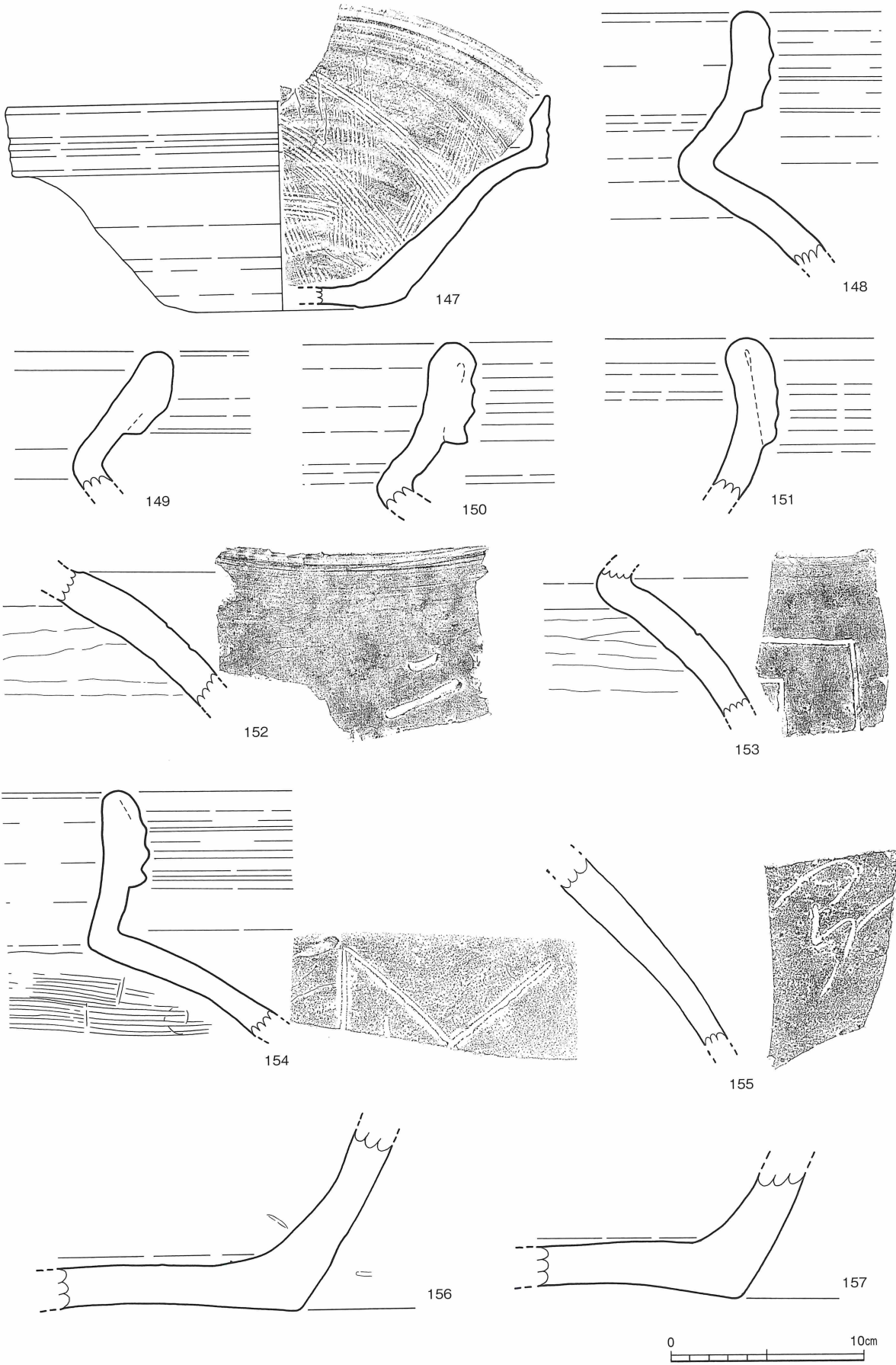
第61図 SD200出土遺物実測図① (1/3)



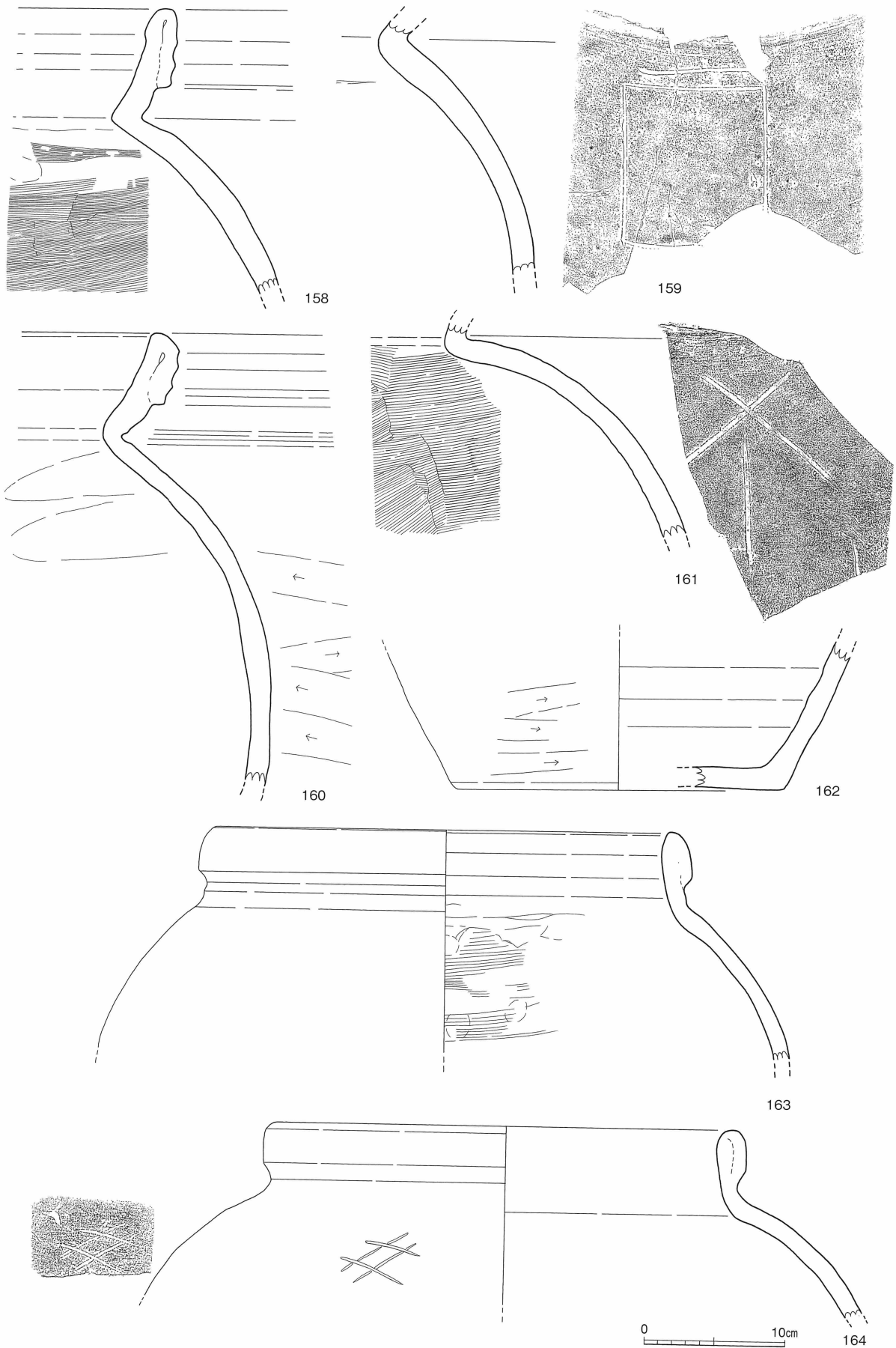
第62図 SD200出土遺物実測図⑫ (1/3)



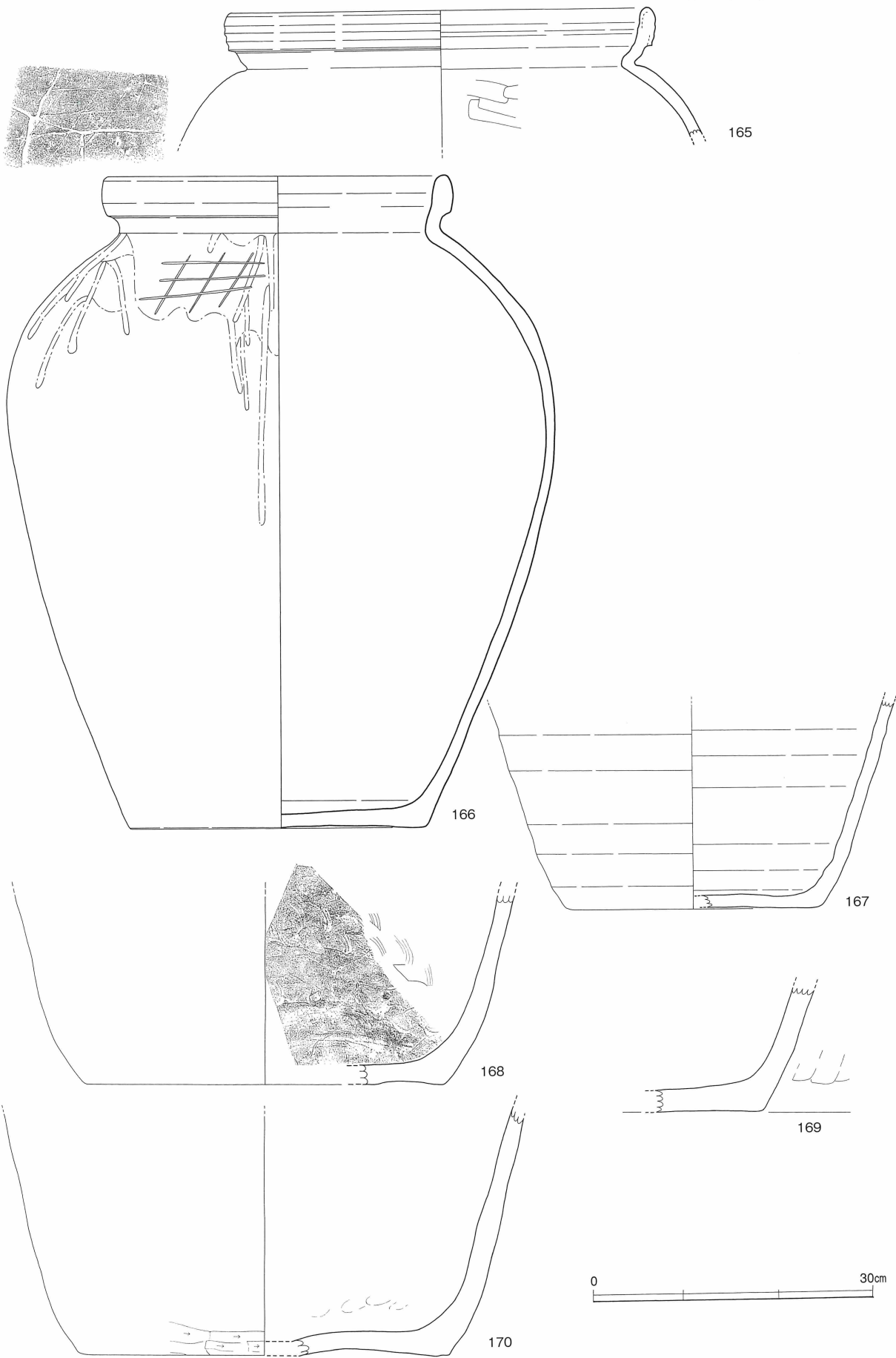
第63図 SD200出土遺物実測図⑬ (1/3)



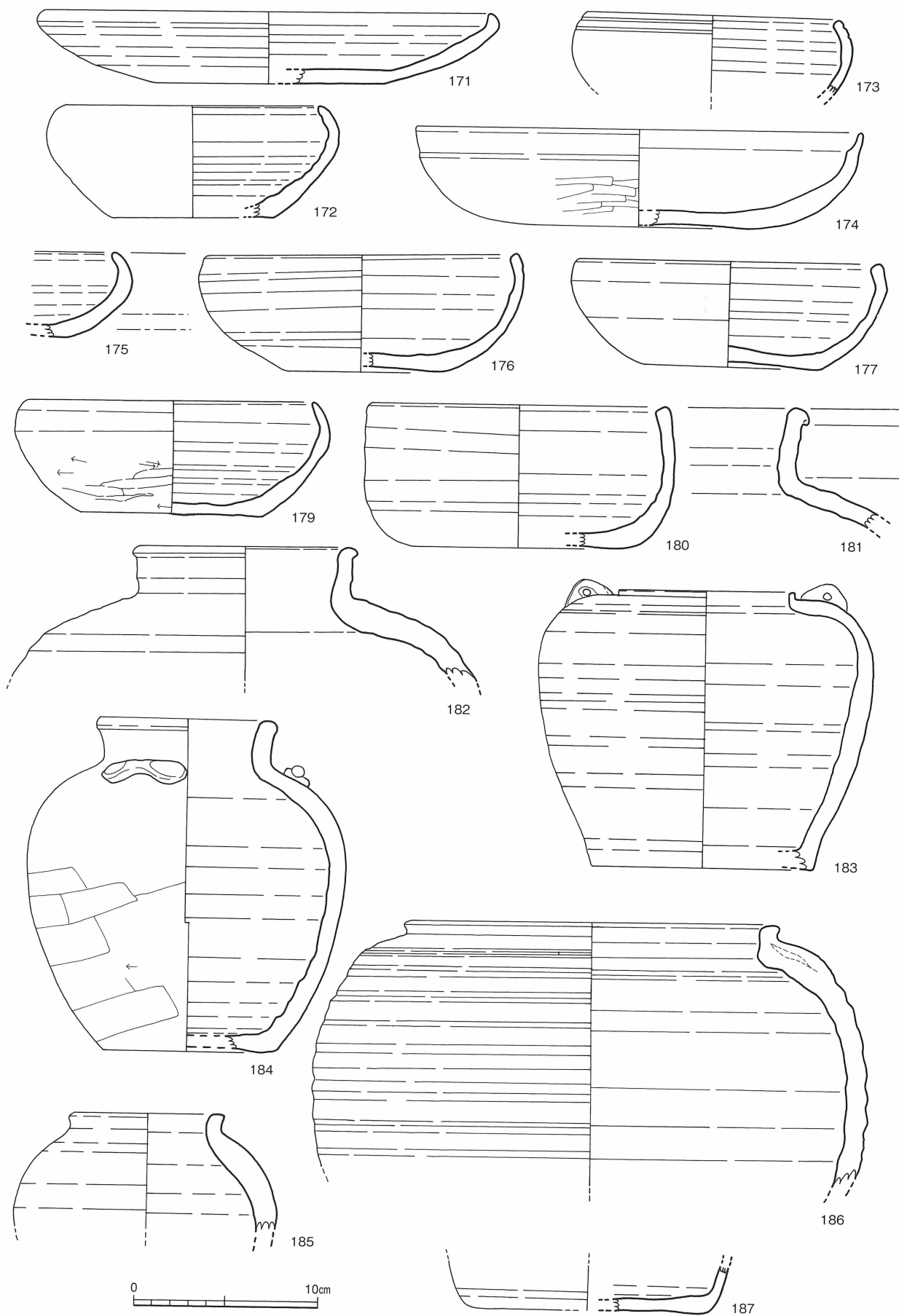
第64図 SD200出土遺物実測図⑭ (1/3)



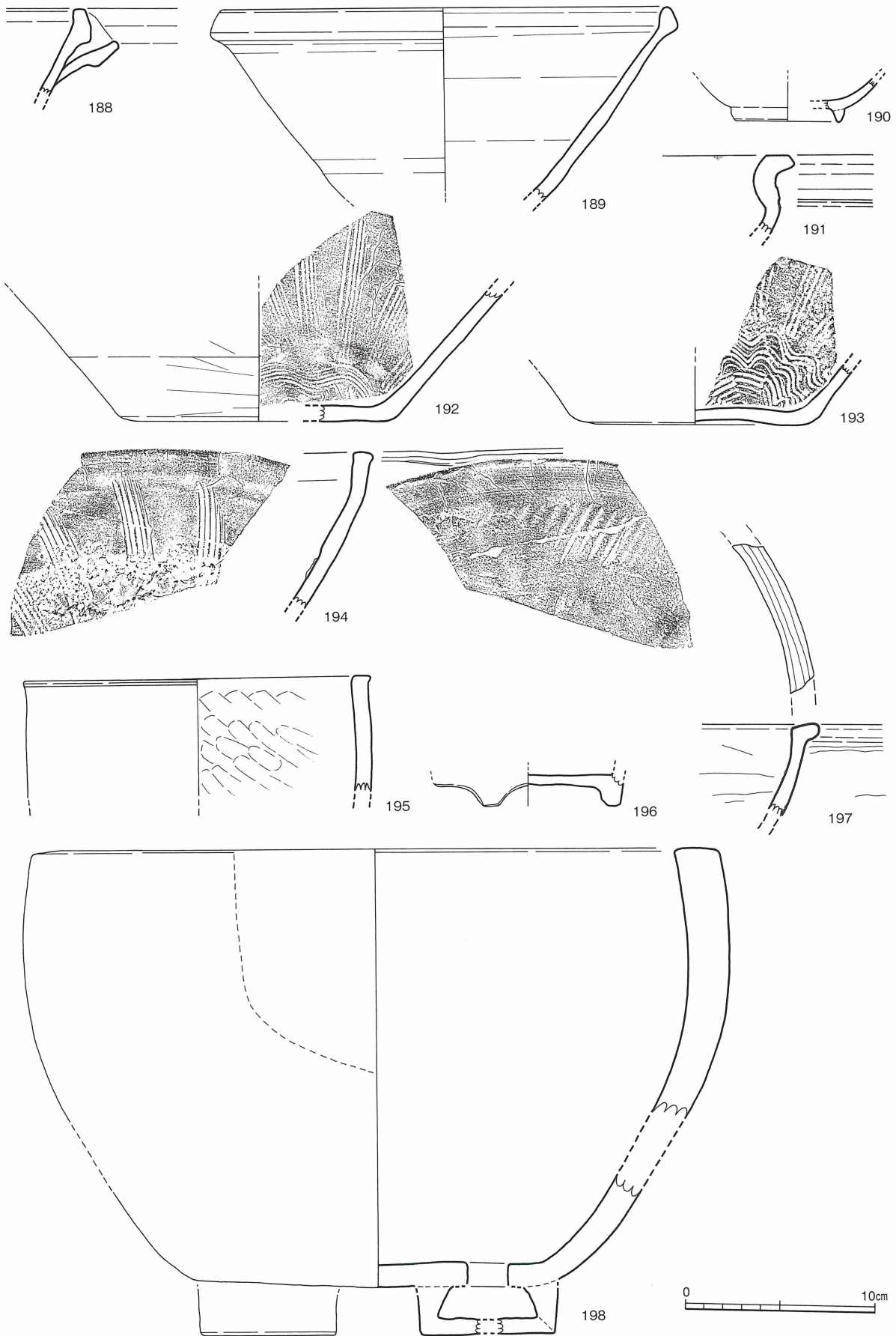
第65図 SD200出土遺物実測図⑮ (1/4)



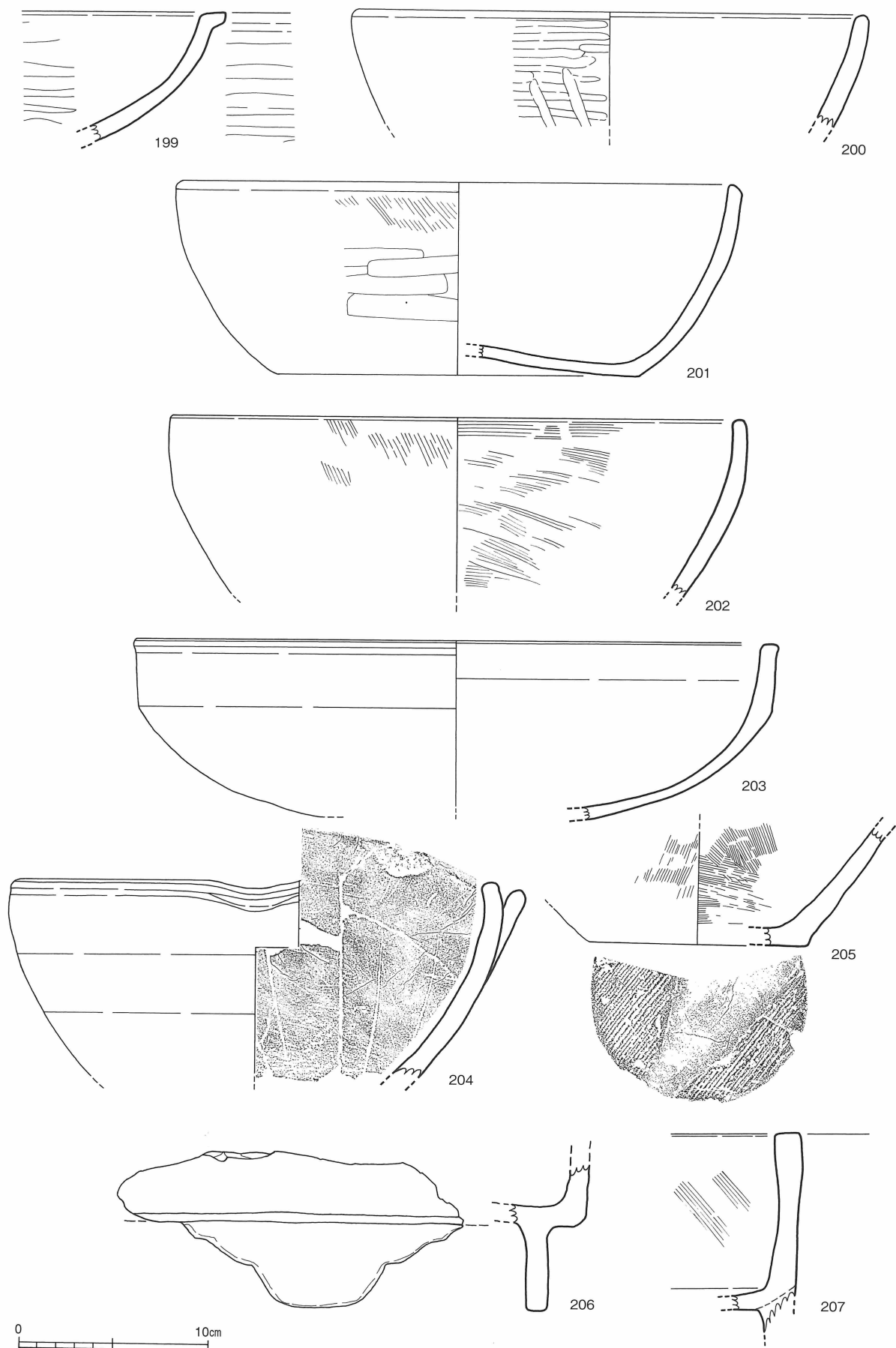
第66図 SD200出土遺物実測図⑩ (1/6)



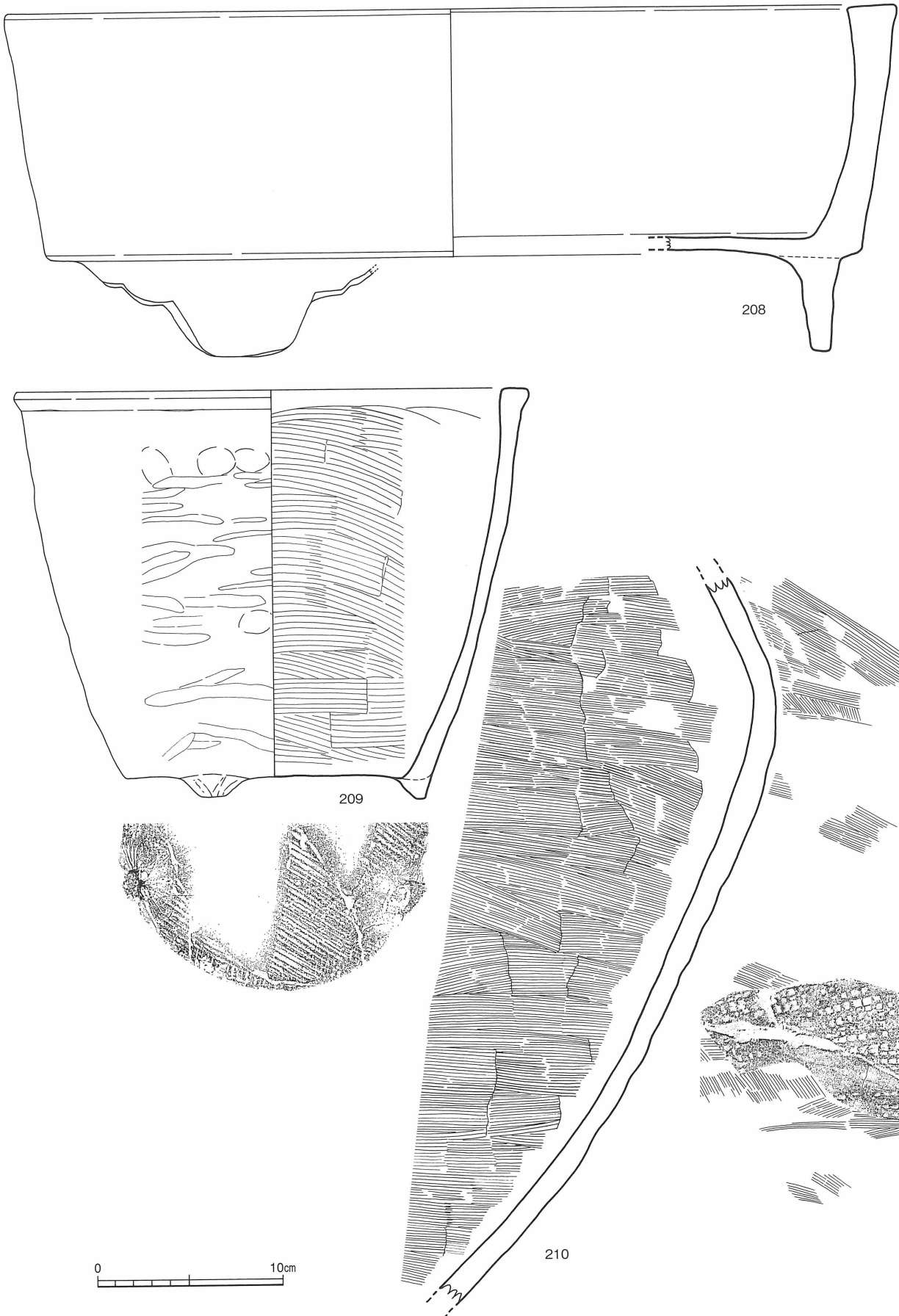
第67図 SD200出土遺物実測図⑰ (1/3)



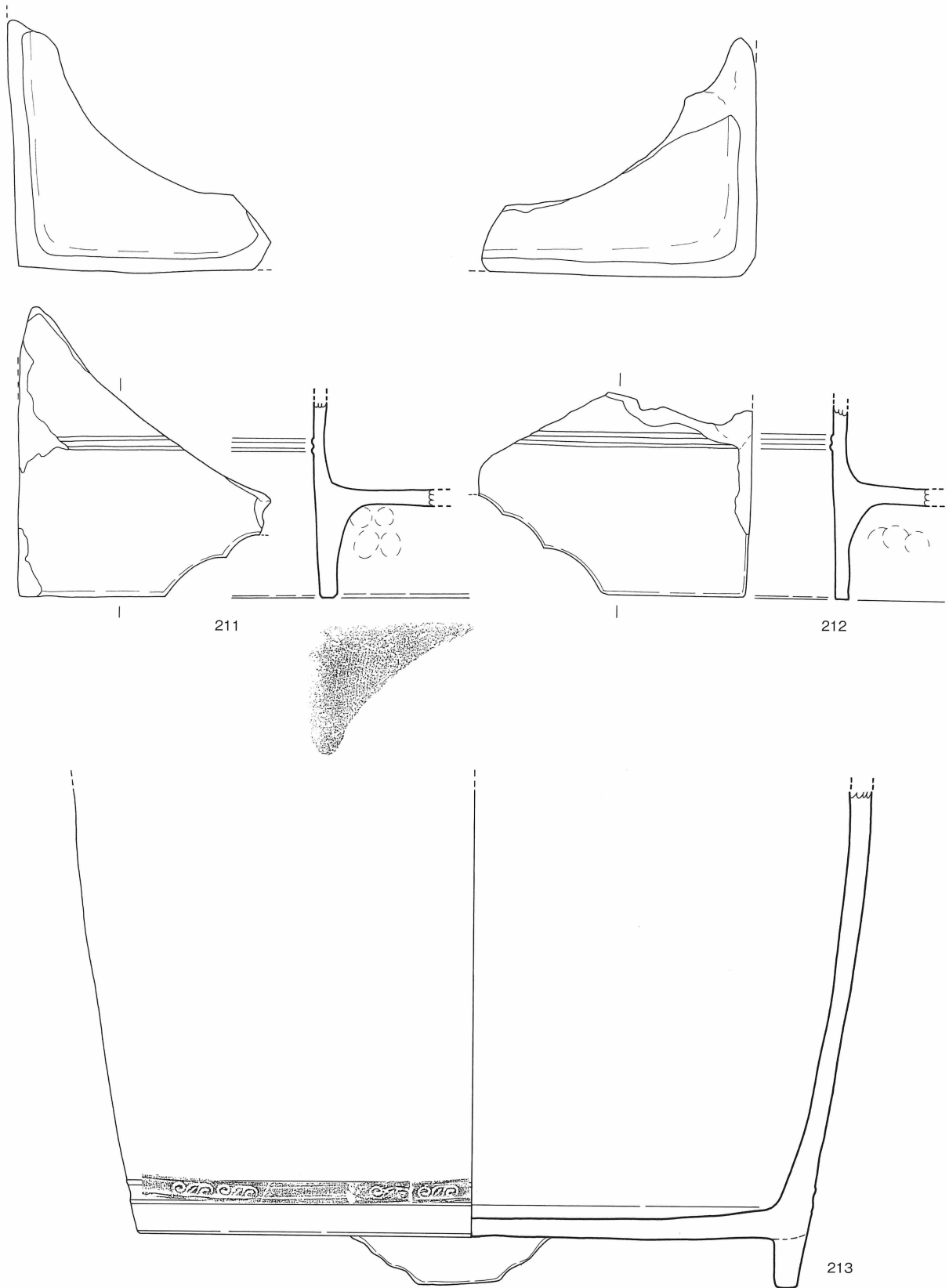
第68図 SD200出土遺物実測図[®] (1/3)



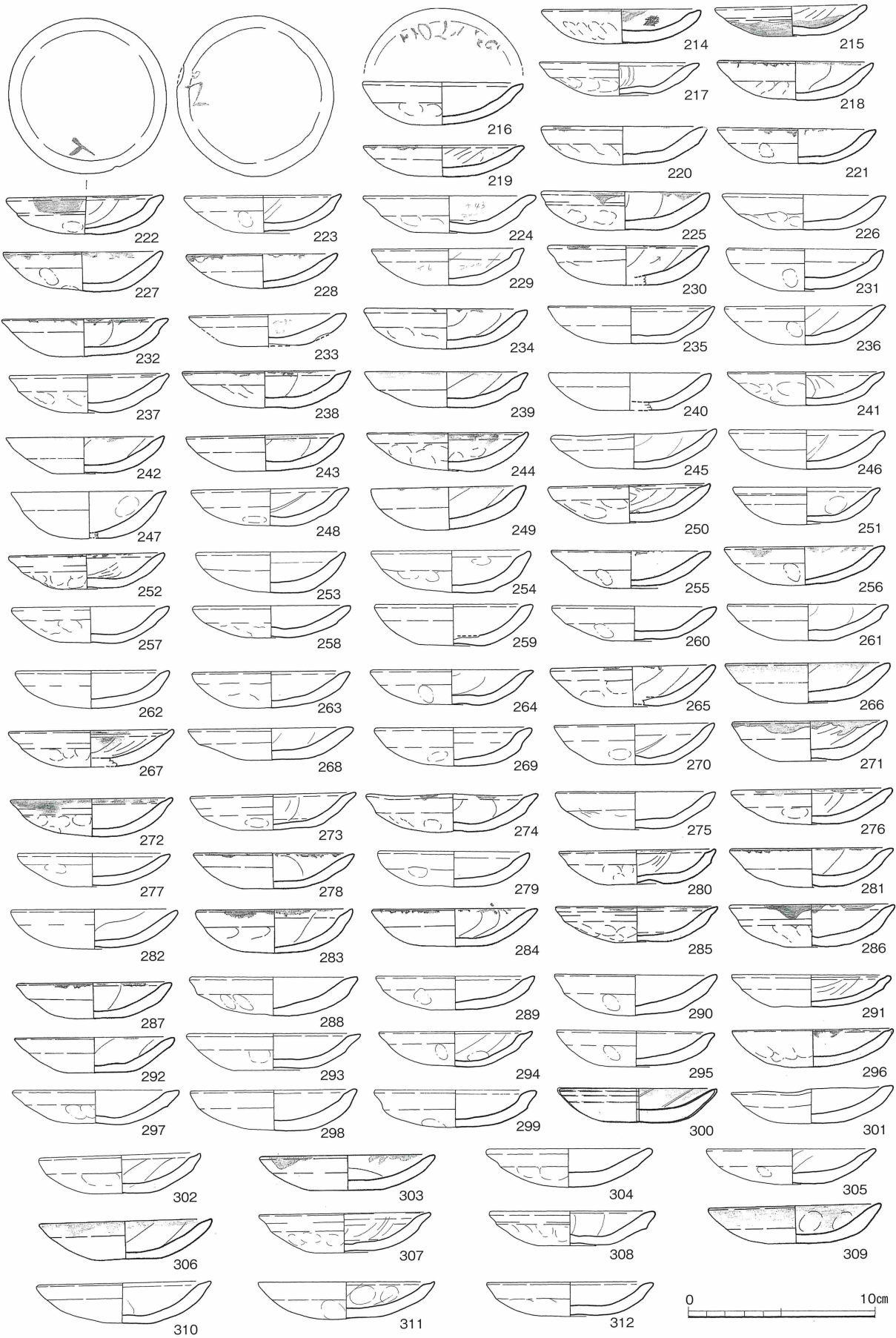
第69図 SD200出土遺物実測図⑩ (1/3)



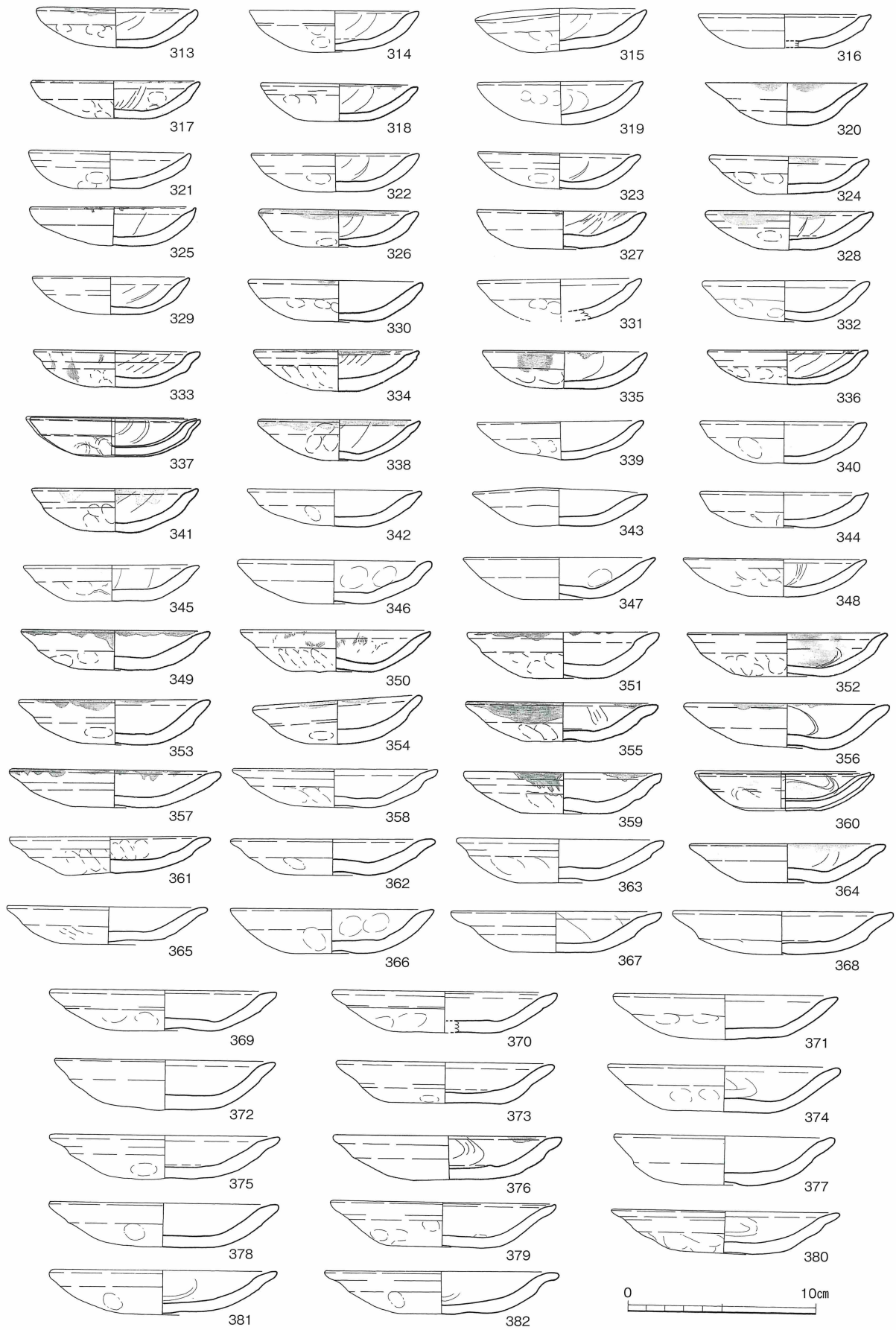
第70図 SD200出土遺物実測図② (1/3)



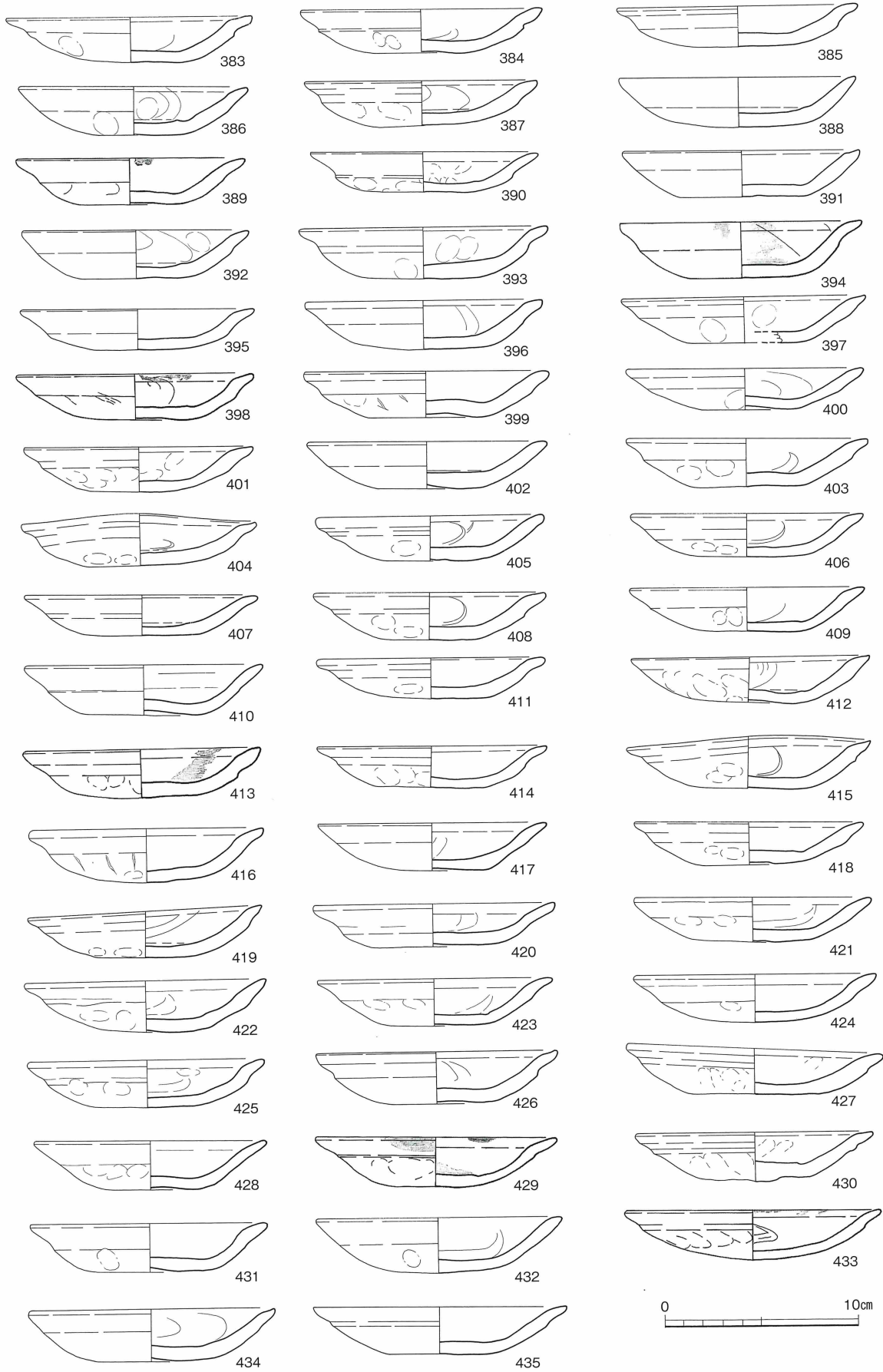
第71図 SD200出土遺物実測図② (1/3)



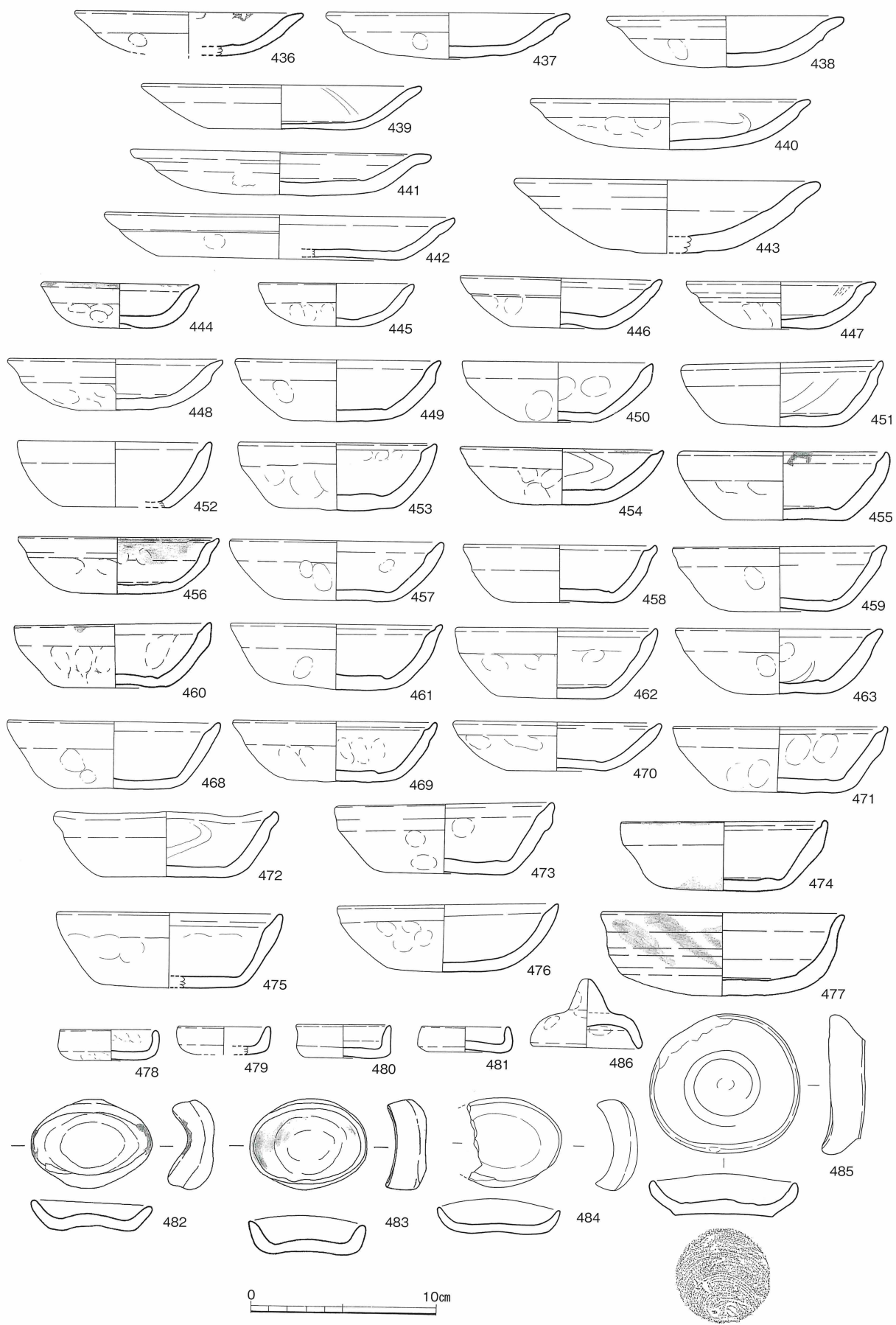
第72図 SD200出土遺物実測図㉔ (1/3)



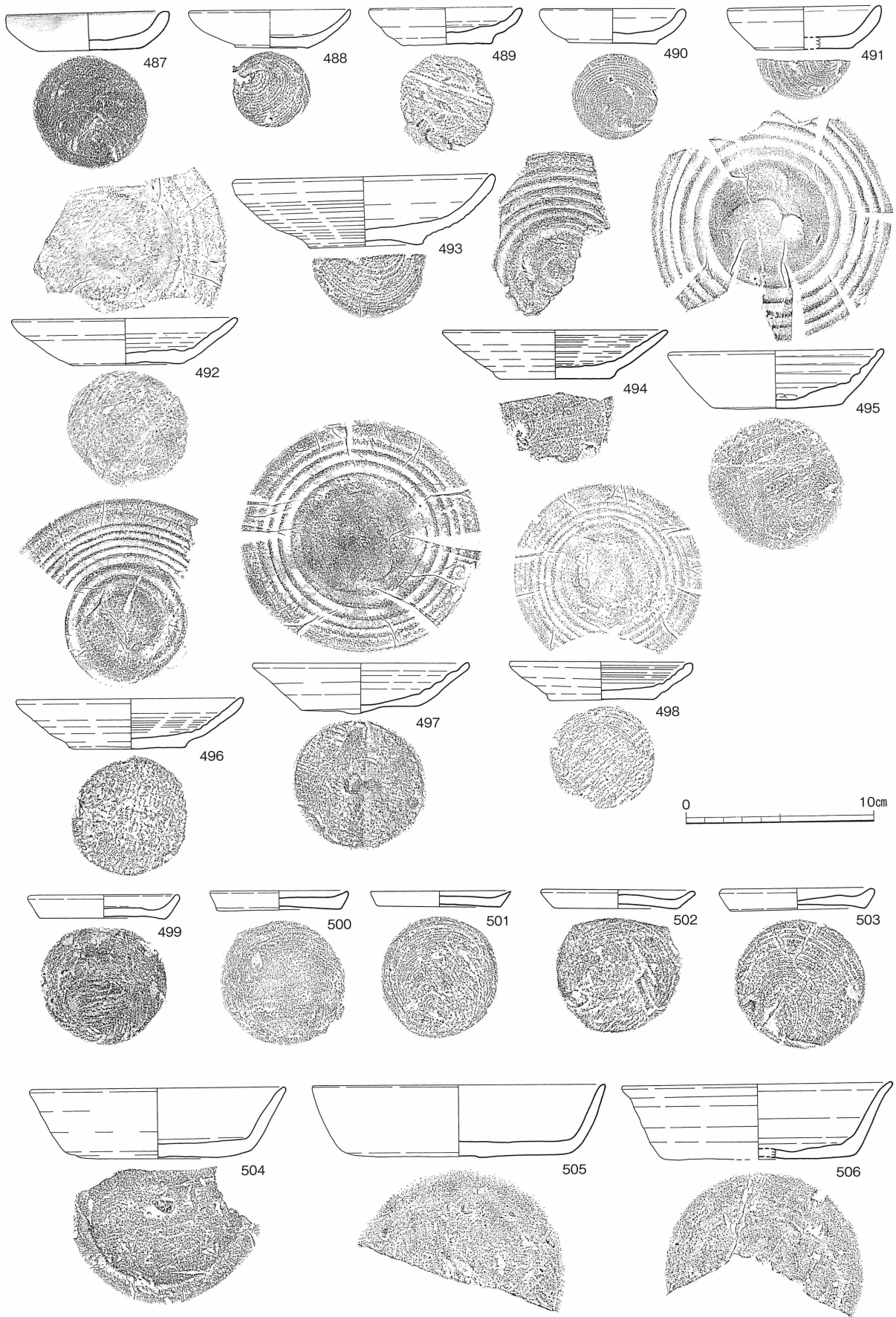
第73図 SD200出土遺物実測図㉓ (1/3)



第74図 SD200出土遺物実測図② (1/3)



第75図 SD200出土遺物実測図㉔ (1/3)



第76図 SD200出土遺物実測図② (1/3)

第2節 中世大友府内町跡第51次調査

焼塩壺の蓋 耳皿 燭台 焼塩壺 赤間石の硯 和泉砂岩 滑石製石鍋 火箸 鉄 風招・メダイ 鉄鍋

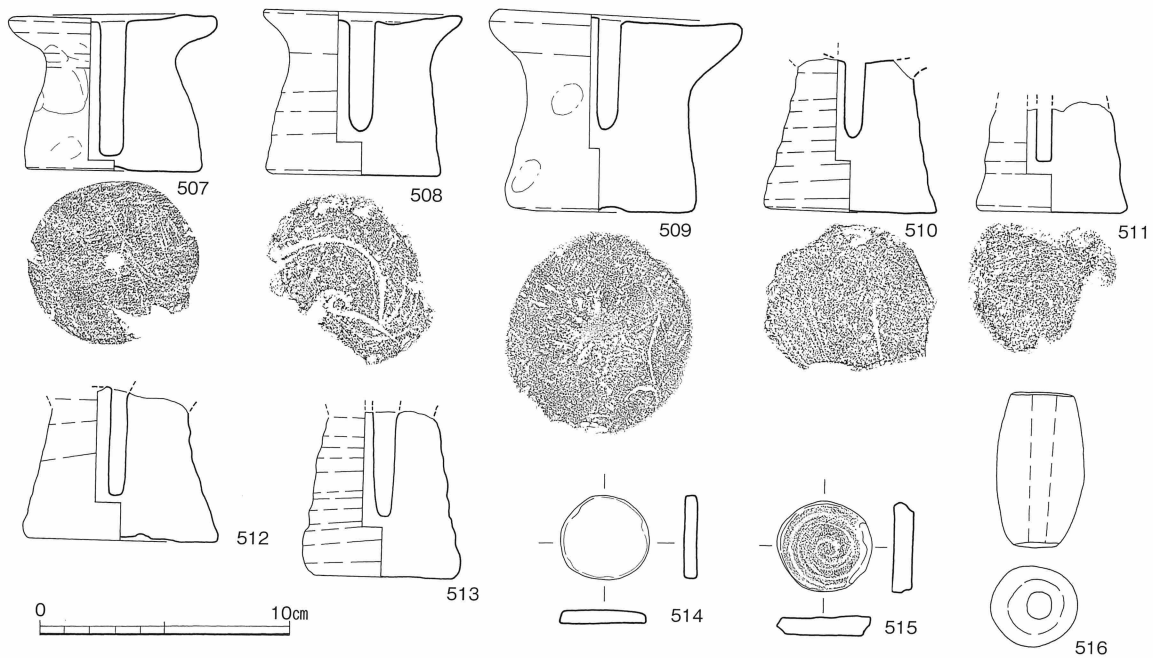
が直立する器形である。焼塩壺の蓋の可能性もある。このタイプの皿の両側から力を加えたのが482～484の耳皿である。485も耳皿であるが、糸切り底である。486は摘みが付く蓋と考える。

第76図は糸切り底の土師質土器である。487・488は胎土が京都系土師器と同じである。489～498は内面に螺旋状のロクロ目の窪みを残す土師器である。また、499～503は在地系土師器の皿で、504～506は同じ時期の坏である。第76図に図示したSD200出土の遺物は、混入品と考える。

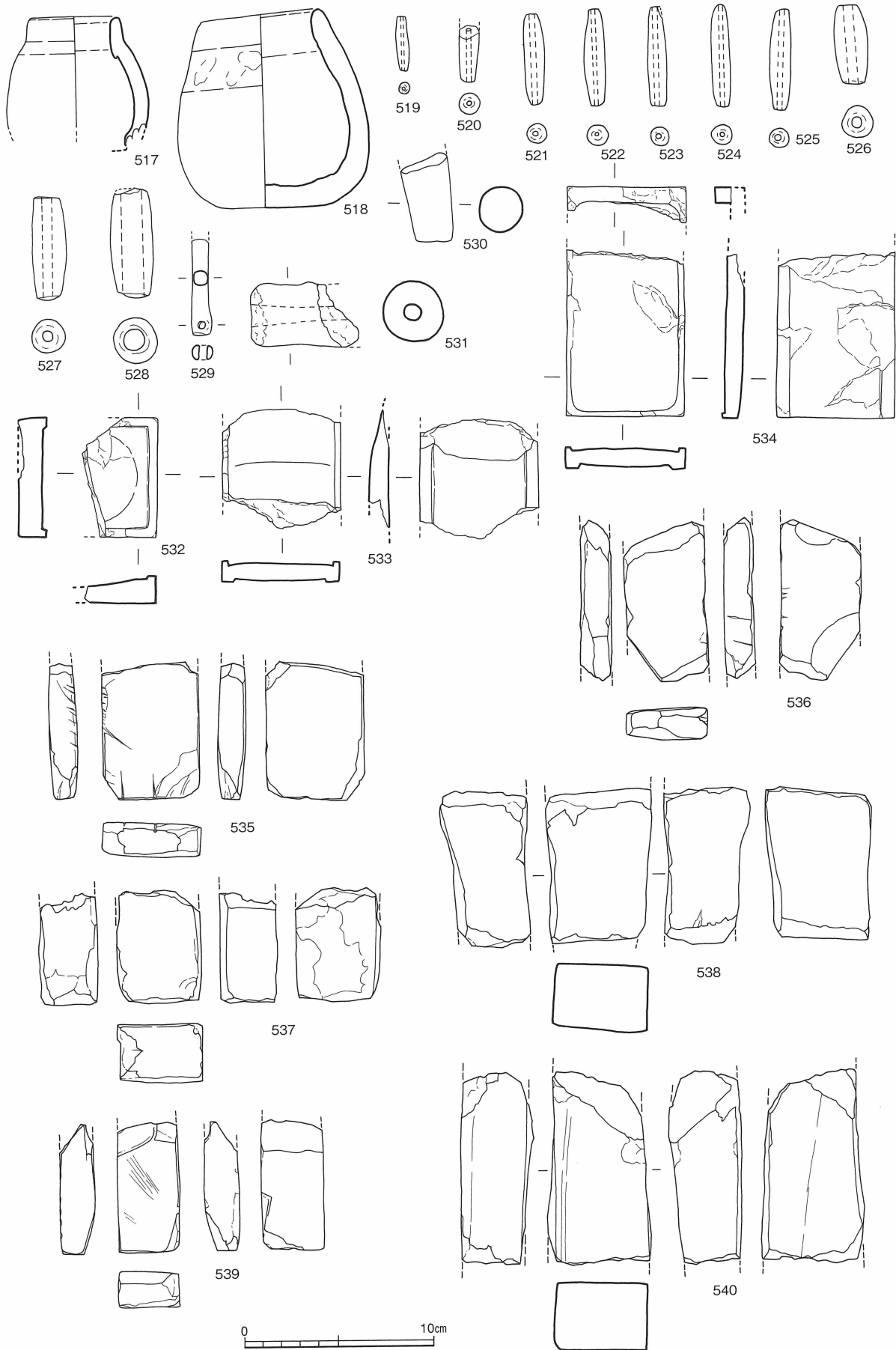
第77図507～513は上面を皿状に窪ませ、中央部に穿孔した円柱状の遺物である。中央部の穿孔部に棒を差し込み、蠟燭を立てる燭台と豊後府内では考えられており、他の地域ではあまり類例が見られない。514・515は土師質土器片を再加工した遺物である。515はロクロ系土師器である。516は大型の紡錘形の土錘で、68.6gある。土錘は第78図519～529に図示した。519～528は紡錘形をしているが、529は粘土棒の両端を穿孔した土錘である。517・518は、焼塩壺である。530は土鍋の脚と考える。531はファイゴの羽口である。

第78図532～534は硯の破片である。素材はアズキ色をした赤間石である。535～540・第79図541は砥石である。358以外は黄灰色をしており、天草石の可能性が高い。542は唐草文のある軒平瓦である。543～第80図546は軟質の石製品である。器面にはノミ痕があり、粘板岩製で、ほぼ同じ規格のレンガ状に仕上げている。第80図547～第81図556は挽臼である。547～552は播り面が密であり茶臼と考える。548は下臼の受け部であるが、547～550は上臼である。石材は547が硬質の凝灰岩であるが、547～552は和泉砂岩と考える。553～556は大型の挽き臼である。553・554は上臼で、555は下臼である。石材は553が硬質の凝灰岩であるが、554・556は安山岩である。第82図560・561は滑石製の石鍋である。562は安山岩を加工した石製の容器の底部である。

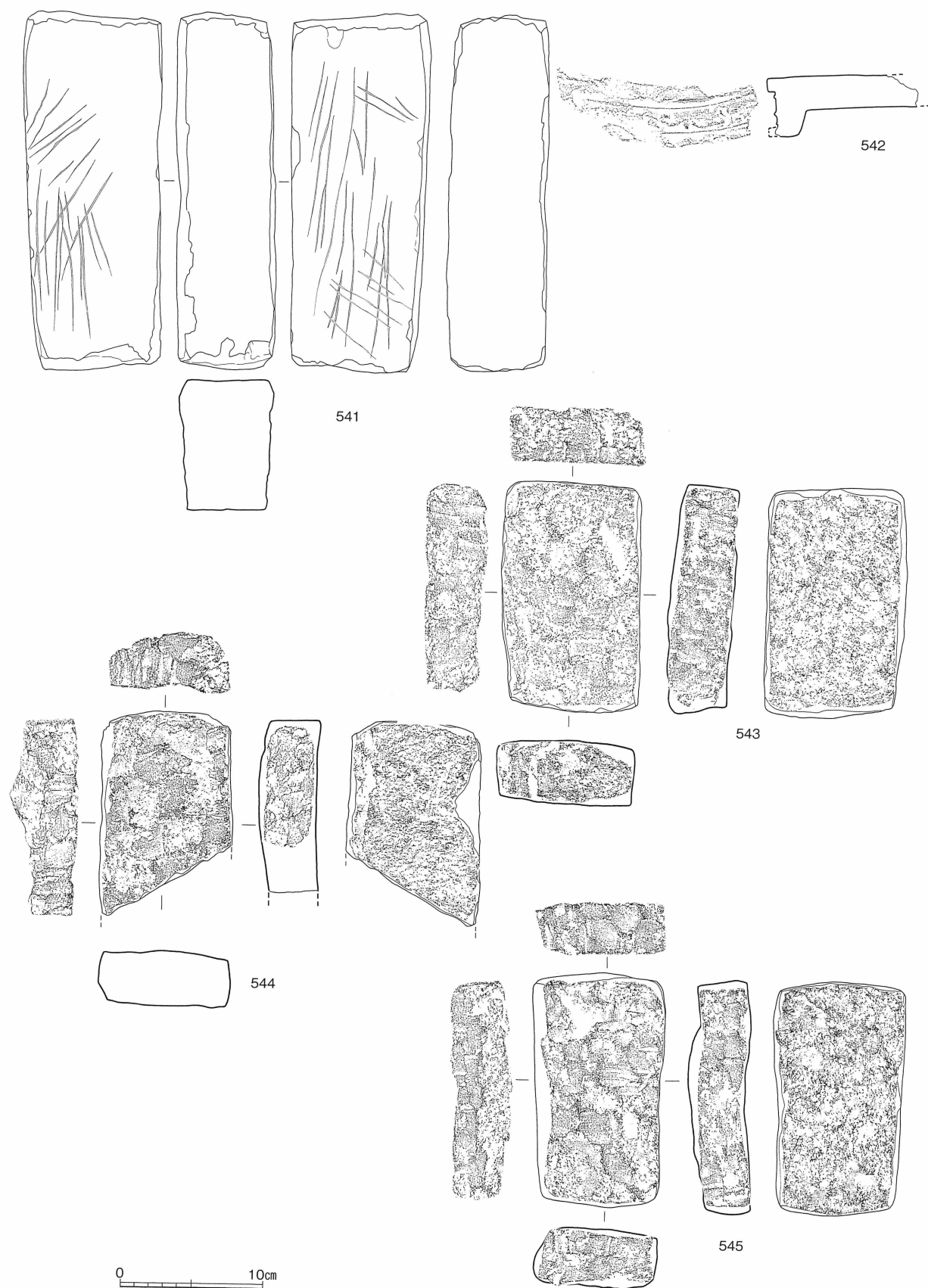
第81図557・559、第82図563～567は金属製品である。557は断面方形の棒状の鉄製品で、火箸と考える。559は青銅製品で、鋏であろうか。563～565は青銅製品で、563は飾り金具と考える。564は吊り下げのための孔があり、風鐸内の風招であろう。565はキリシタンが所持したメダイと考える。566は直径1.3cmの鉛の鉄砲玉である。567はSD200の中で伏せられた状態で出土した鉄鍋である。内部に藁・萱状の物が認められた。片口で半円形の取手が付くが、実測図のように直線的に変形している。



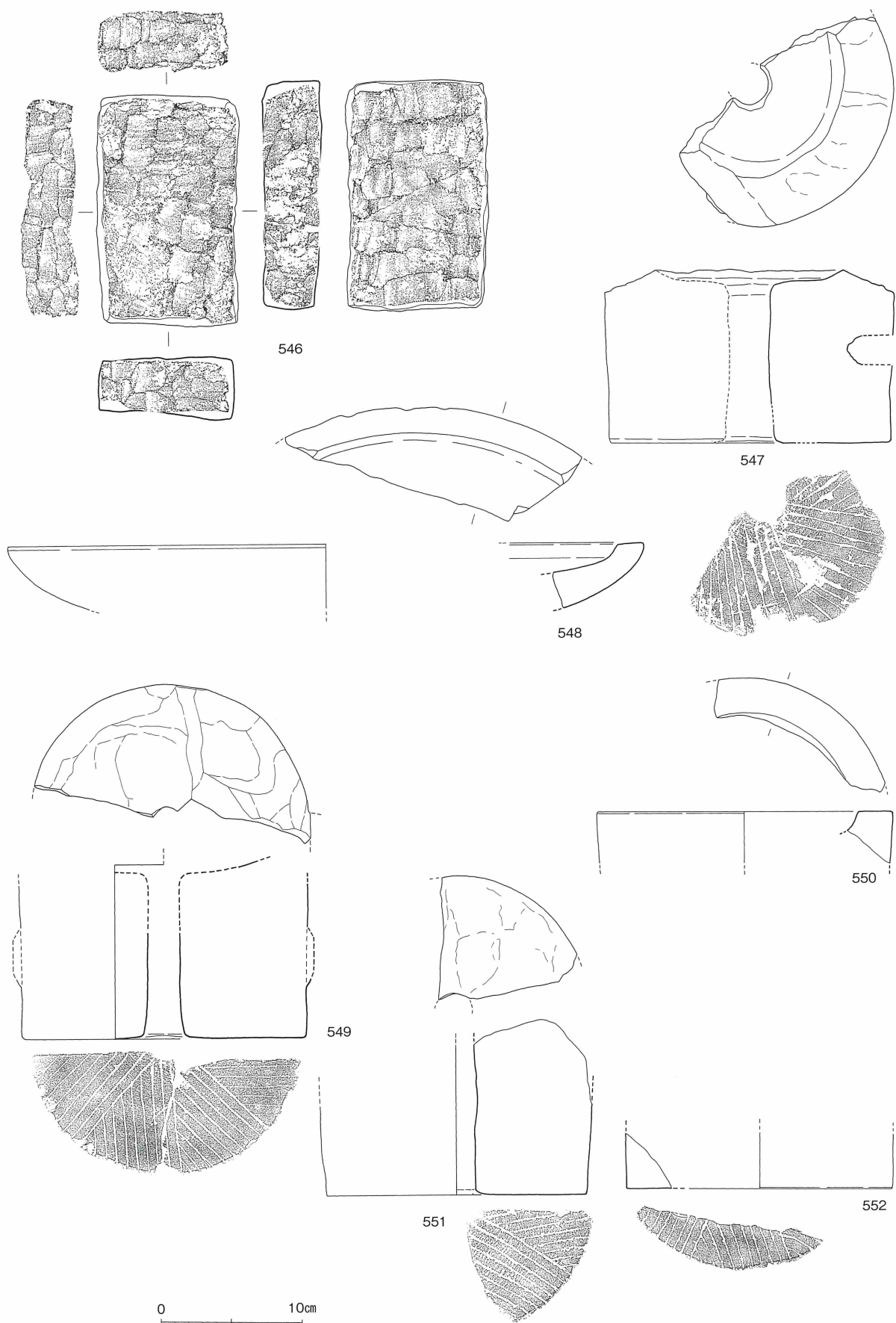
第77図 SD200出土遺物実測図㉗ (1/3)



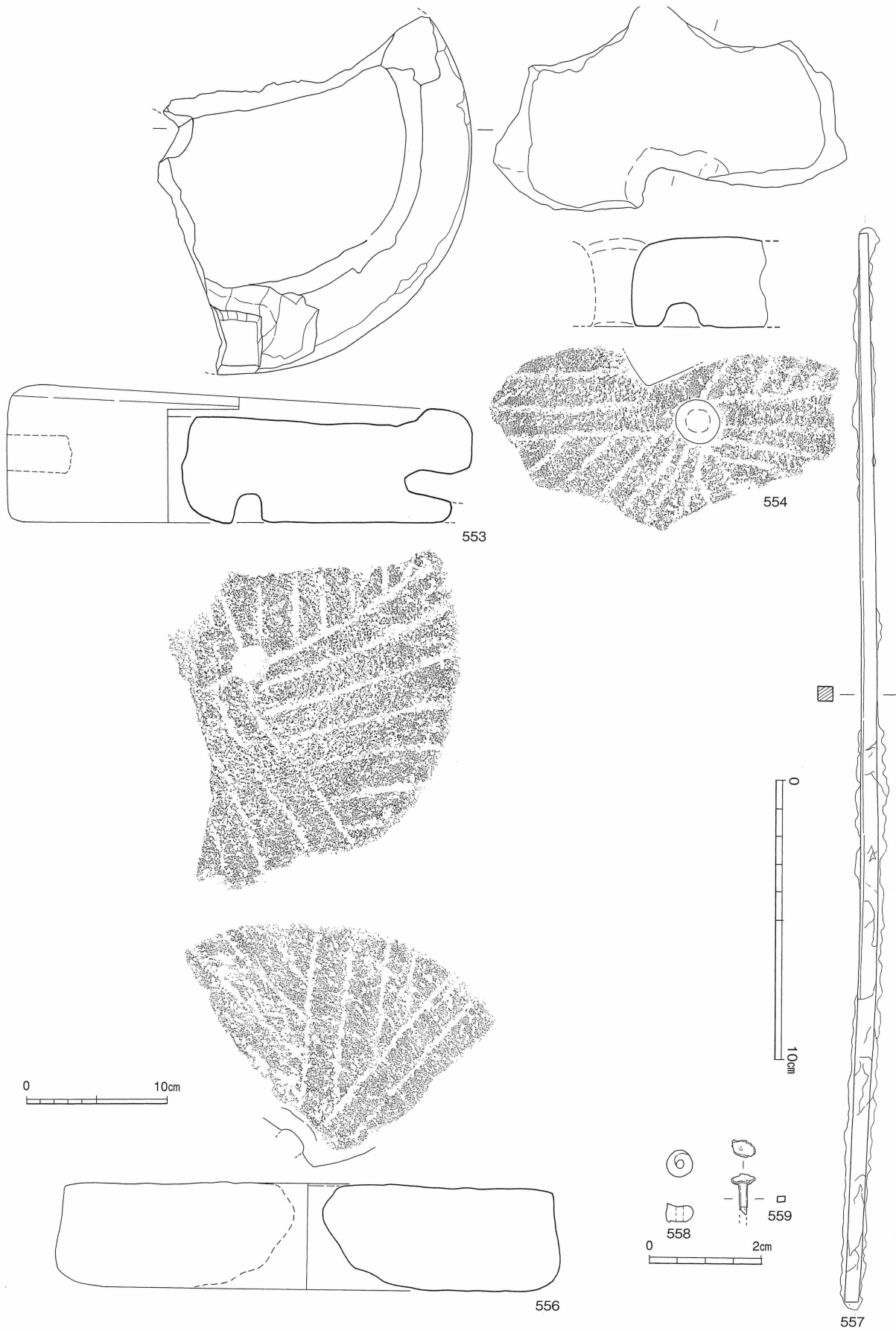
第78図 SD200出土遺物実測図㉔ (1/3)



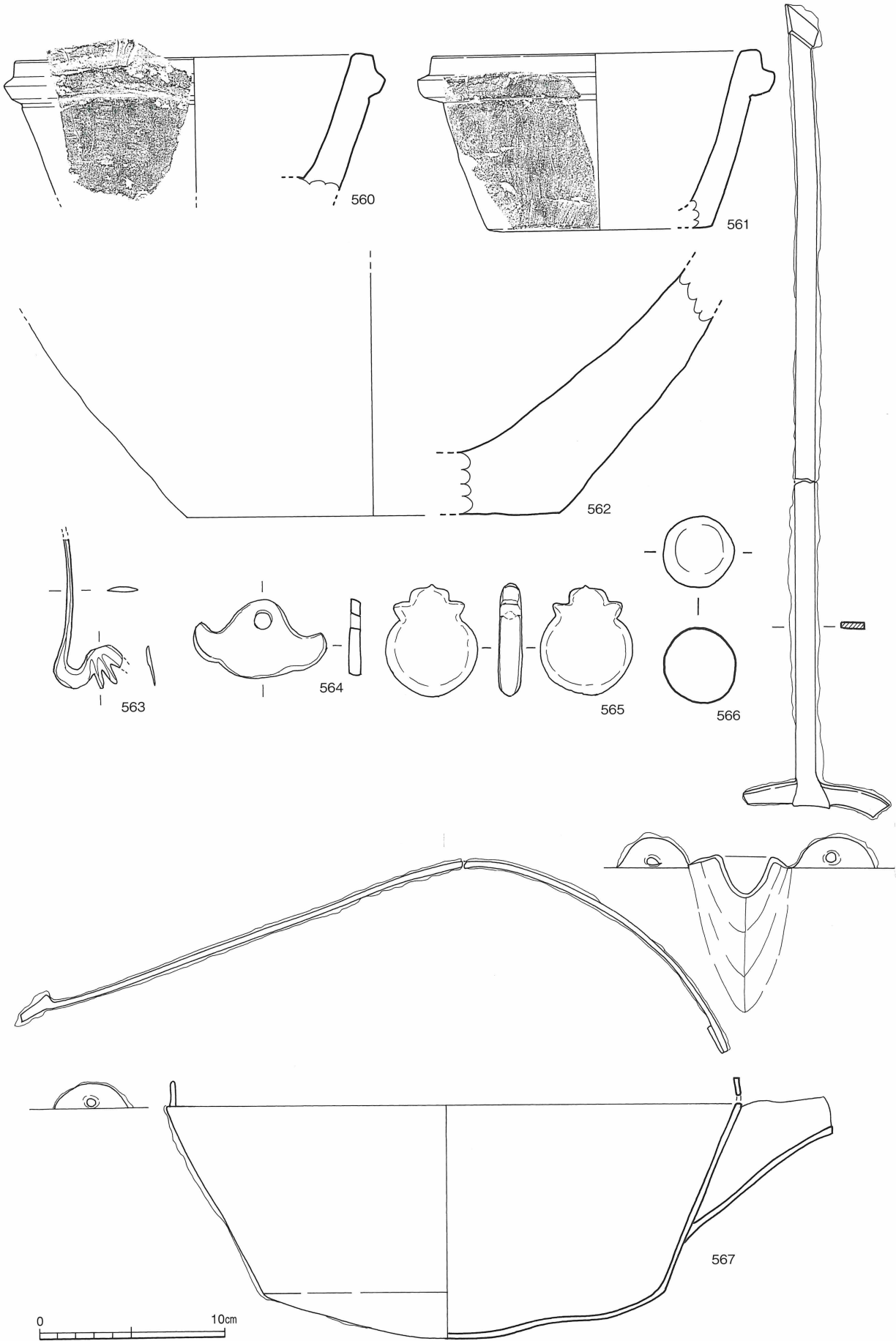
第79図 SD200出土遺物実測図⑳ (1/3)



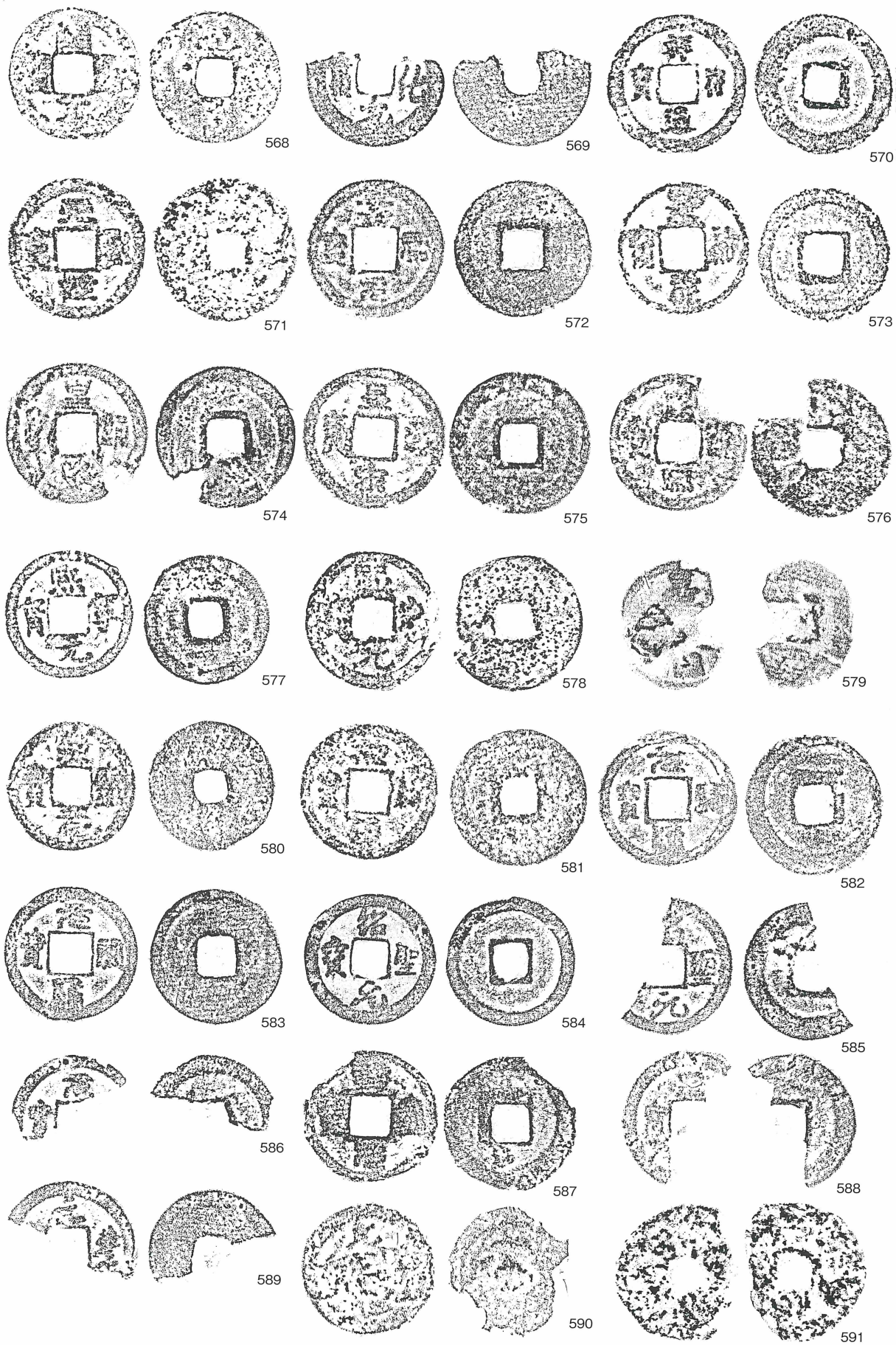
第80図 SD200出土遺物実測図㊸ (1/3)



第81図 SD200 出土遺物実測図③(1/3) 557(1/2) 558～559(1/1)



第82図 SD200 出土遺物実測図② 563～566(1/1)

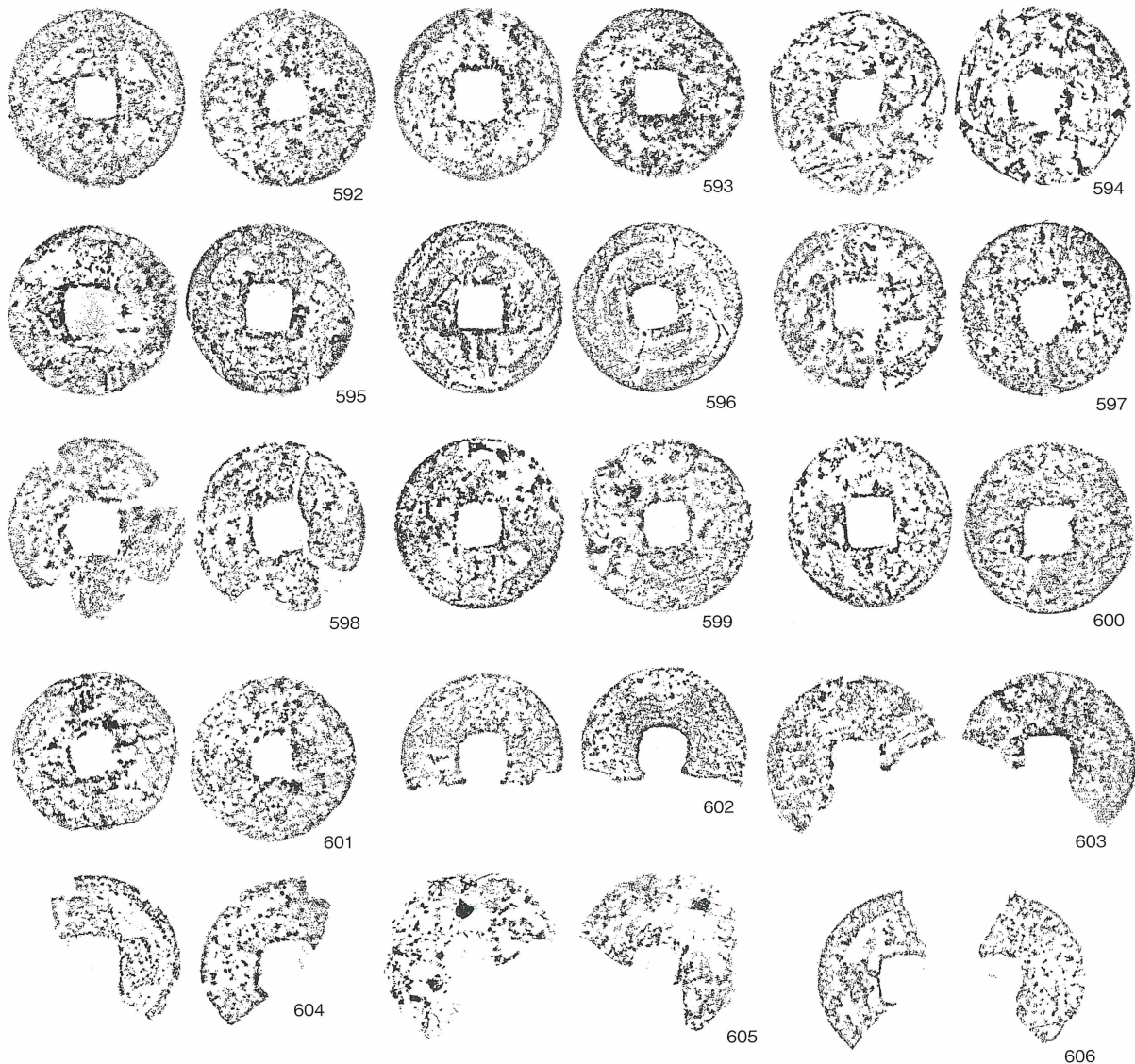


第83図 SD200出土遺物実測図③ (1/1)

第83・84図は出土した銅銭である。銭種は568が621年初鑄の「開元通寶」、569が990年初鑄の「淳化元寶」、570は1009年初鑄の「祥符通寶」、571は1023年初鑄の「天聖元寶」、572・573は1034年初鑄の「景祐元寶」、574～576は1038年初鑄の「皇宋通寶」、577・578・580は1068年初鑄の「熙寧元寶」、579は1056年初鑄の「嘉祐通寶」、581～583は1086年初鑄の「元祐通寶」、584・585は1094年初鑄の「紹聖元寶」である。しかし、判読不明の銅銭も多い。

ガラスの小玉 第81図558と第85図607～683に図示したのはガラスの小玉である。特に、後者はSD200の上面で約10cmの範囲でまとまって出土した77点は、本来は孔に細い紐を通した一連のものであったと想定できる。色調は暗青色、白色がある。また、684は青色をしたボタン状のガラス製品である。

漆碗 第86～91図に図示した遺物は、木製又は植物性の遺物である。万寿寺を囲む堀であるSD200は、下位約3分の1は低湿地状態になっており、植物性の遺物や動物遺体が良好な状態で残されていた。第86の685は漆碗である。赤漆の地に黒漆で見込みと同じ文様を外面に描いている。686は曲物に木製の柄を着けた杓子である。687～689は木材に切り込みや穿孔して加工、表面を平滑に仕上げた製品で、何らかの製品の部品であろう。690は基筒の蓋と考えられる。また694は正目板を円形に加工し、孔を開け、その部分に別の円形の木製品で蓋をしている。697は板目板を円形に加工し、紡錘車状に



第84図 SD200出土遺物実測図③ (1/1)

仕上げている。

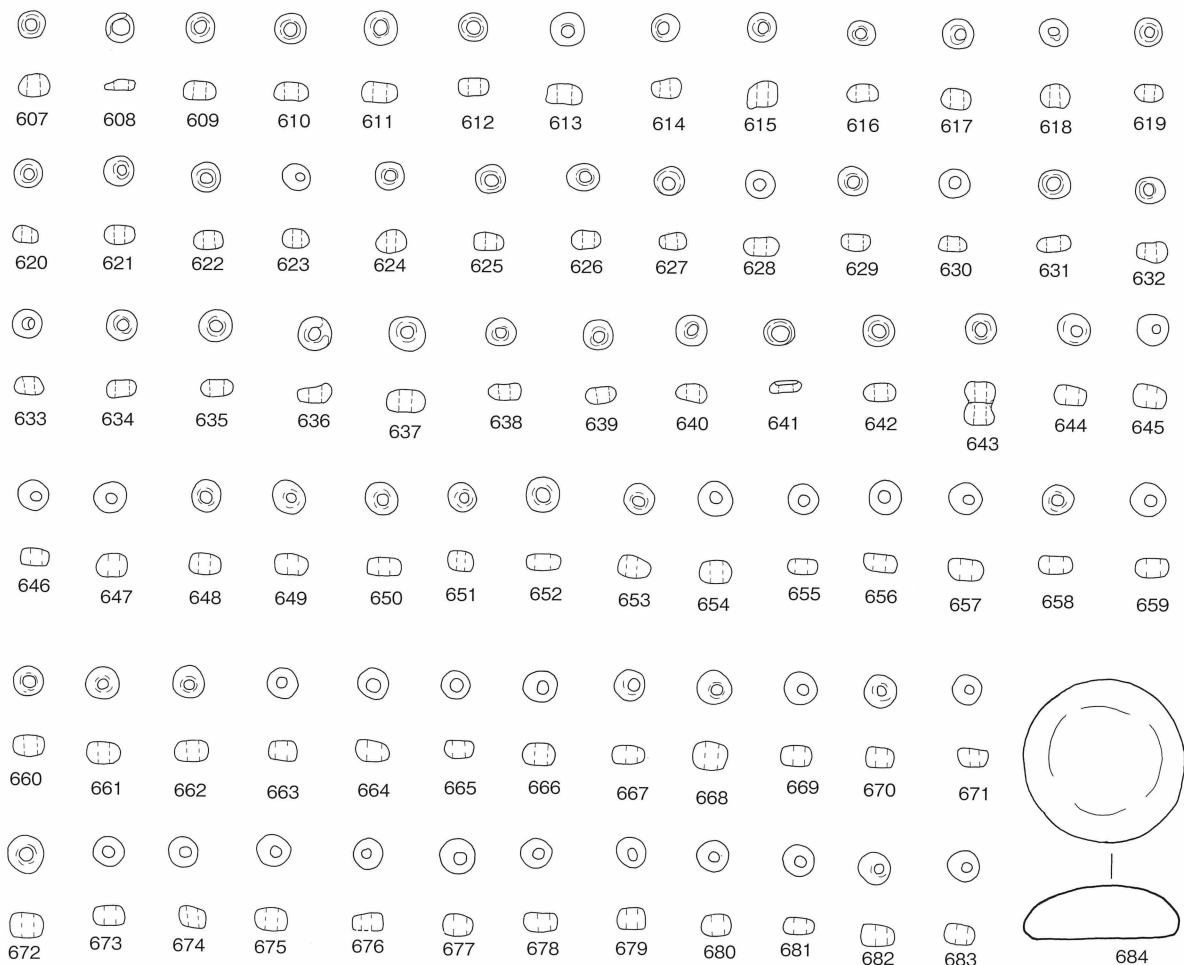
折敷 第87図と第89図733～735・737はは単体や組み合わせで円形に仕上げた木製品で、曲物の底や結桶の蓋や底板と考えられる。699・700・702～705・707・709・710は正目板を素材にしている。704は方形板の角を落とした形状で、小型の折敷とであろうか。711・712は板目板を素材にしており、孔があげられている。側面に板を接合するための繋ぎ棒がある。713・714は同じ製品と考えられ、両者を繋ぐため、棒を挿入する細長い孔が確認できる。733～735は437頁の写真図版3に掲載しているが復元すると直径42cmで、板目板を素材とし、7枚で構成されると推測できる。板の間は繋ぎ部材を差し込むため、細い孔が刻まれている。737も同じで、直径23cmの大きさで、側面には同じく板を繋ぐ部材を差し込む細い孔がある。第89図736は断面円形に仕上げられた棒状の部材である。

毬杖の珠 第88図は板状・棒状に加工された木製品と球形の毬杖の球である。715～717は正目板を素材にしており、他は板目板である。716・718・725には小孔又は釘孔があげられている。721・726の側面には隣の板と繋ぐための孔がある。毬杖の球は完全なものはないが、大小様々がある。

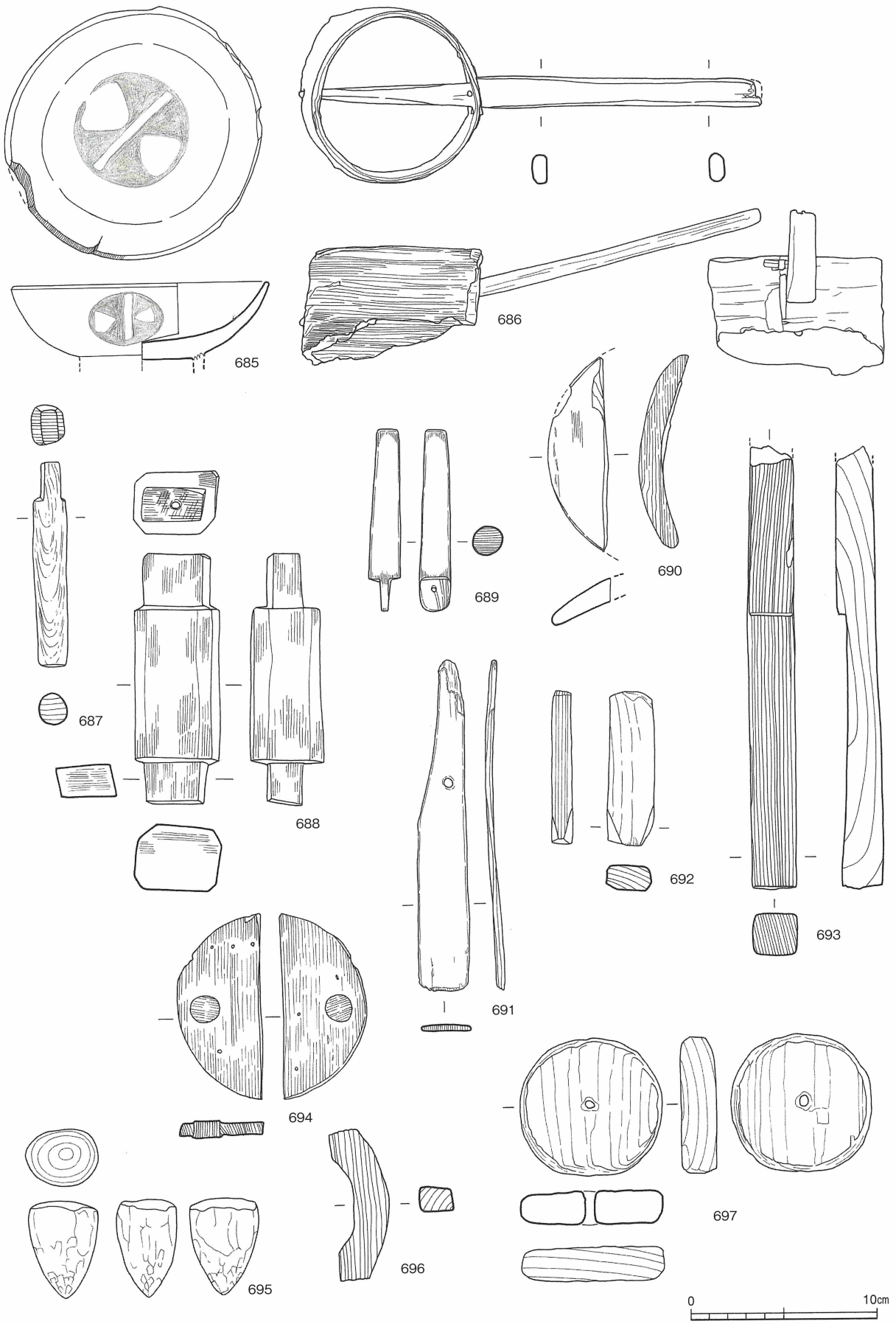
第90図378・379は竹製品である。同じ技法で製作されており、その技法は2本の横方向の竹ヒゴを基本に編んでいる。740～745は同じ規格・形態の板材で、内面が曲面であることや、外面にタガが巡っていた痕跡が上下2ヶ所確認できることから、高さ17.4cmの桶の側板と考える。

連齒下駄 露卯下駄 第91図は下駄の資料である。746～750は年輪の観察から推測すると、木材の中心部分を素材にし、一木造りの連齒下駄である。751は厚手の板材を断面三角形に削り、差し歯を組むためにホゾ穴と溝を刻んだ露卯下駄である。

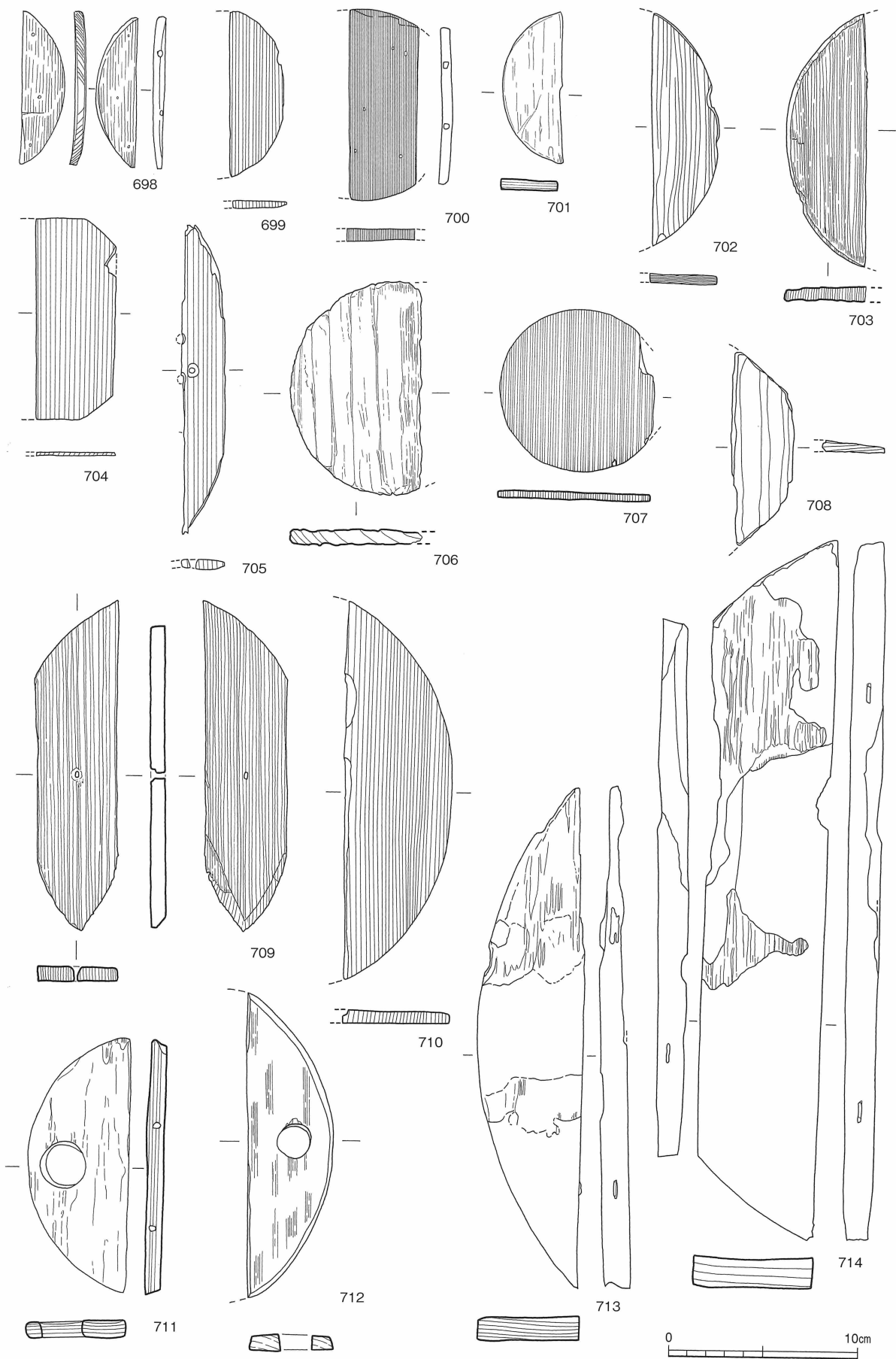
SD200は出土した貿易陶磁・備前焼の編年的な位置づけから16世紀後葉に埋められたと考える。



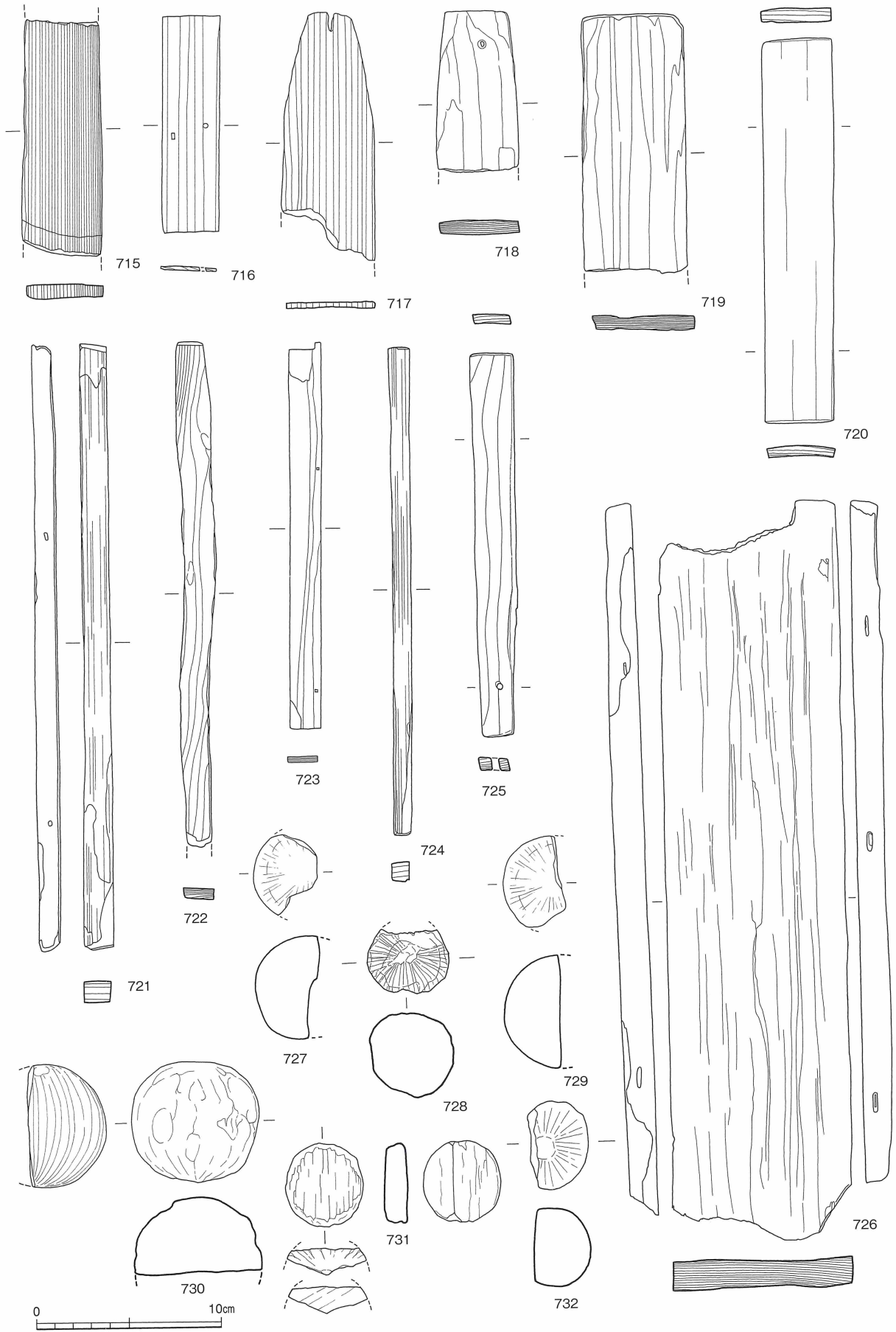
第85図 SD200出土遺物実測図③ (1/1)



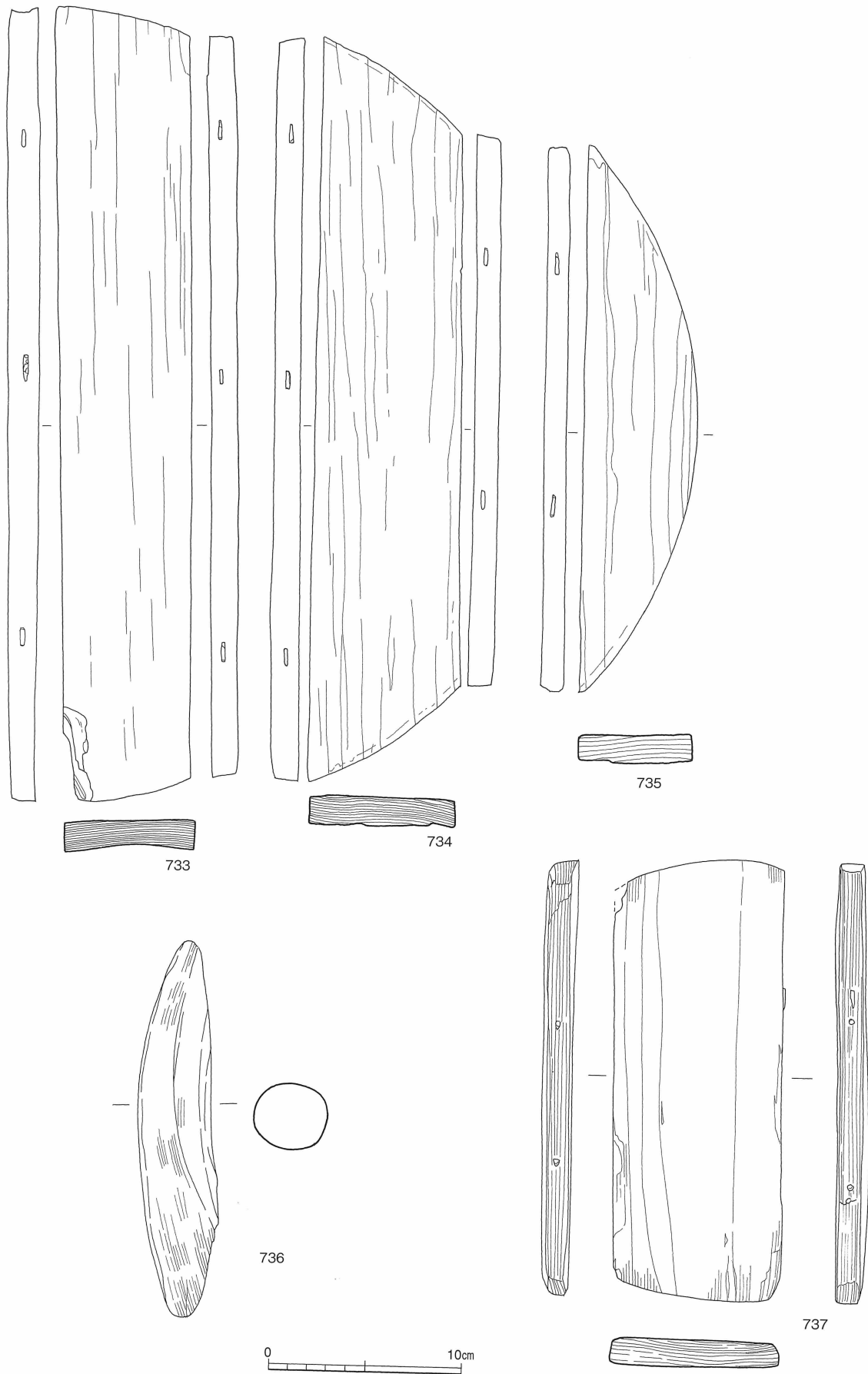
第86図 SD200 出土遺物実測図③⑥ (1/3)



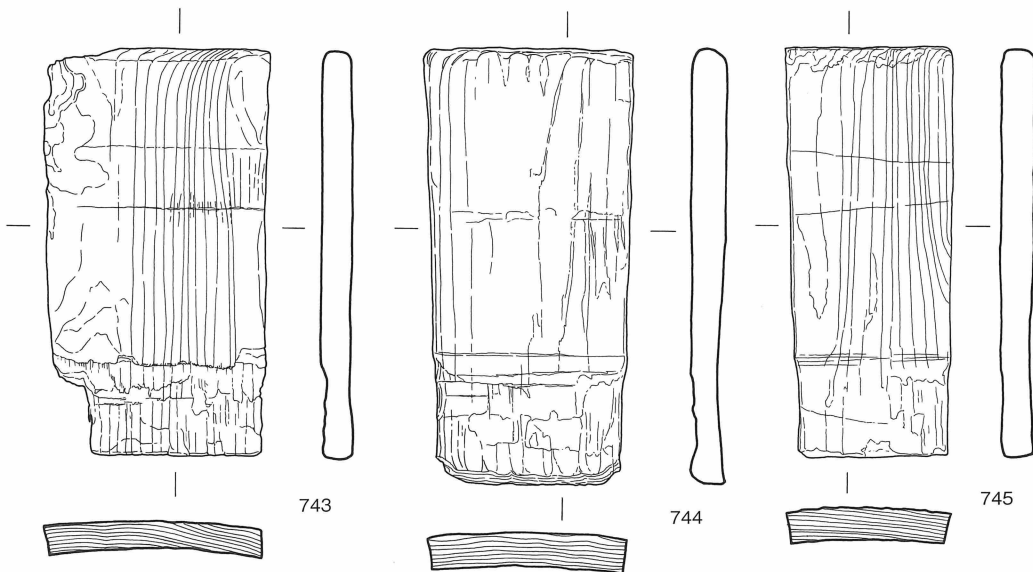
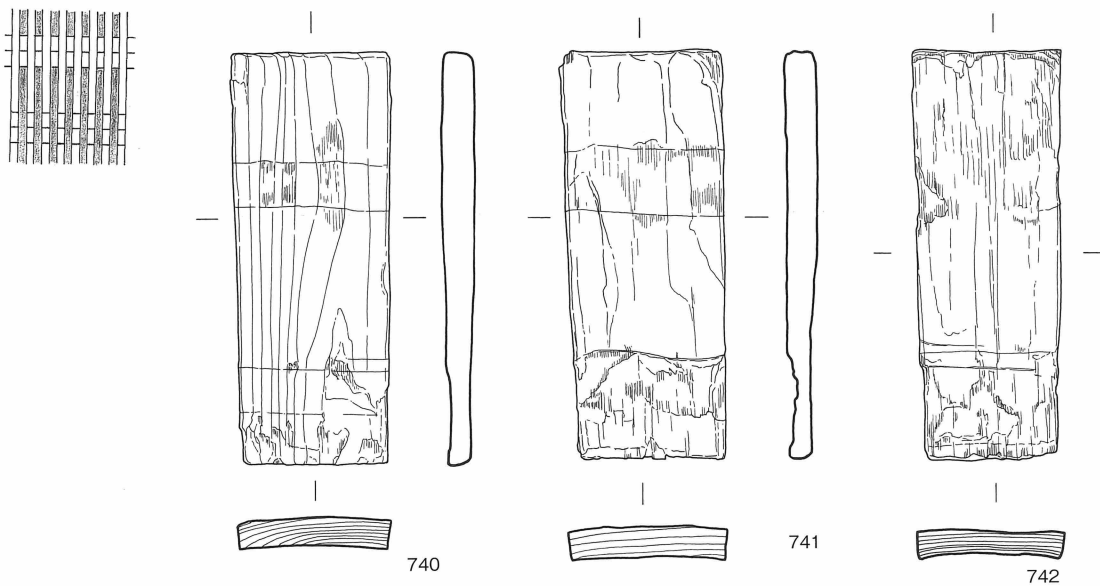
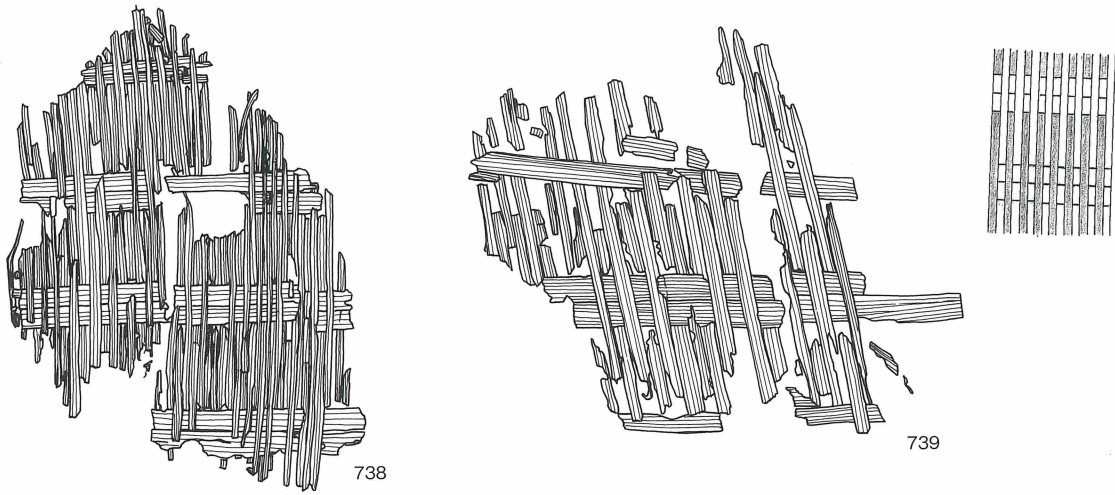
第87図 SD200 出土遺物実測図③ (1/3)



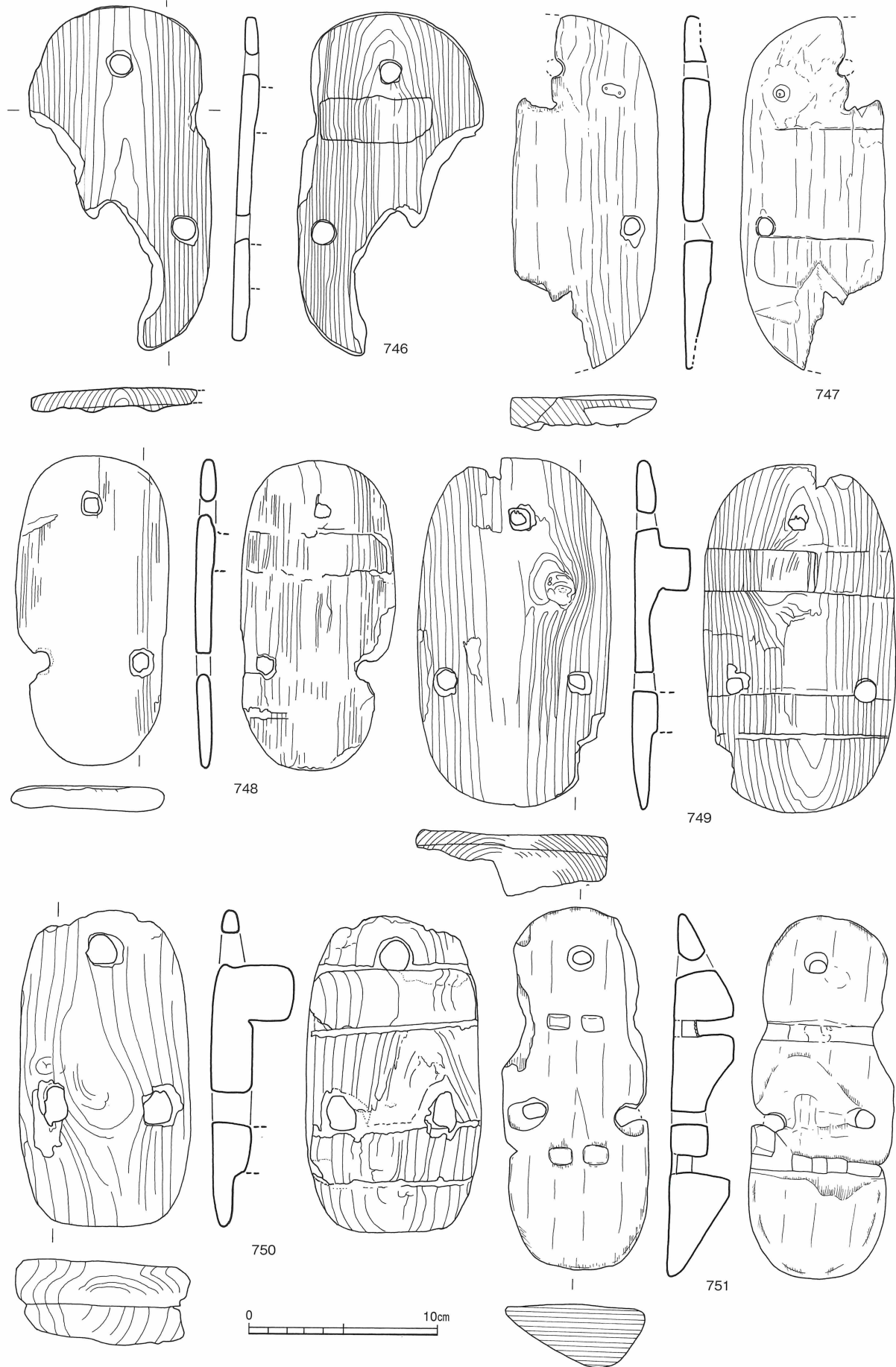
第88図 SD200 出土遺物実測図^㉞ (1/3)



第89図 SD200 出土遺物実測図㊸ (1/3)



第90図 SD200出土遺物実測図④ (1/3)



第91図 SD200出土遺物実測図④ (1/3)

博

SD232 J39のSD200の上面で南北に約8mの長さで細長く遺物が出土する状況が確認された。この遺物の出土状態から、輪郭は明確でないが溝遺構の存在を想定しSD232とした。出土遺物は第93図1～5に図示した。1は京都系土師器で、2は内面に挿り目のある瓦質土器の挿鉢である。3は一辺22.7cmの埴である。4・5は安山岩製の挽臼である。2点とも上臼である。

SD275 SD275・276は第92図に図示したが、SD200に隣接する西側、J39で検出された並行して南北に延びる溝遺構である。SD275は東側の南北方向の溝である。他の遺構と切り合うため、長さ4mを確認したのみであるが、北のJK38で約10m検出した溝遺構と同じ方向であり同一の可能性が高い。遺構の規模は、幅約70cm、深さ20cmで、断面は逆台形である。

遺物の出土はわずかであるが、京都系土師器の小破片が出土している。

SD276 SD276は、SD275の西側で検出した溝遺構である。長さは約6m確認され、SD275と同様、規模は幅約70cm、深さ20cmで、断面は逆台形である。

出土遺物は第93図6に図示した鉛と思われる粒が出土しているが、これ以外京都系土師器の小さな破片がわずかに出土している。

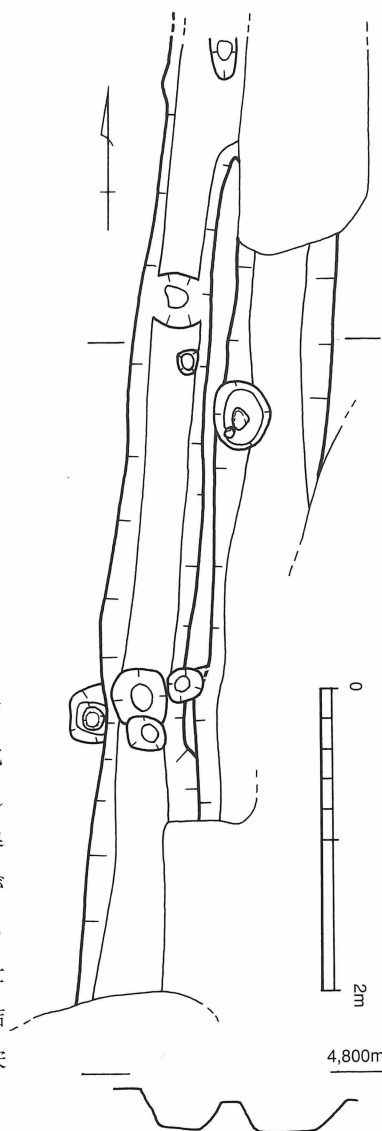
SD275・276の前後関係は判らなかつたが、同じ性格の遺構で、設置し直されたと考える。北側のJK38で確認された遺構の位置や、検出された場所から、万寿寺の西北角から南側の第2南北街路の側溝と考える。

SD304 SD304は調査区の中央部で長さ約53mにわたり検出された溝状遺構である。その全体は付図1-1図に図示した。幅は一部広がる部分もあるが、概ね幅50～70cmで、深さは約10cmである。溝に伴う施設として、J31・32・33では側縁に第95図に図示したように大きさの揃った石が列状に検出された。溝の形状を保護するための縁石やそれが動いたものと理解する。

また、溝の幅が広がった第94図にも縁石が確認され、遺物が集中的に出土した。ここから出土した遺物は備前焼の大甕が主体を占めた。第93図7～9はその主要遺物である。7は主体を占めた大甕で、胴部に「二」の文字があり、「二石入り」の一部である。8は扁平な砥石である。石材は天草石と考える。9の銅銭は欠けているが、「○宋元○」が判読でき、「聖宋元寶」の可能性が高い。

第96図1～11に図示した遺物はSD304の全体から出土したものである。1は漳州窯系の青花の皿である。2～6は京都系土師器で、2・4は口径8.2cmで、3は10.2cm、6は11.9cmと法量が分化している。5は非ロクロ系で京都系土師器と同じ技法で製作されているが、豊後府内で在地化し創出された器形で口径10.6cm、器高3.5cmの坏形になる。7・8は瓦質土器で、7は内面に刷毛目が入る鉢で、8は口縁部上面が拡大し平坦面を形成して沈線が巡る火鉢である。9は備前焼の大甕の破片の周辺を打ち欠き円形に仕上げた遺物である。10の挽臼は上臼で、石材は硬質の阿蘇溶結凝灰岩である。11の銅銭は1009年初鑄の「祥符元寶」で、北宋銭である。

SD304は検出された位置や、時期、形状から第2南北街路の東側の側溝と考える。しかし、第2南北街路の東側は、敷設時から

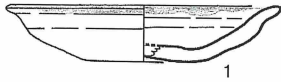


第92図 SD275・276実測図(1/50)

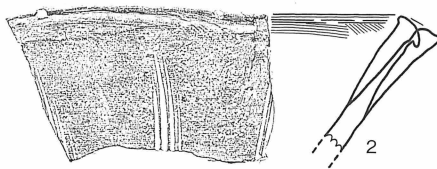
漳州窯系

第2節 中世大友府内町跡第51次調査

SD232

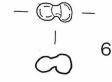


1

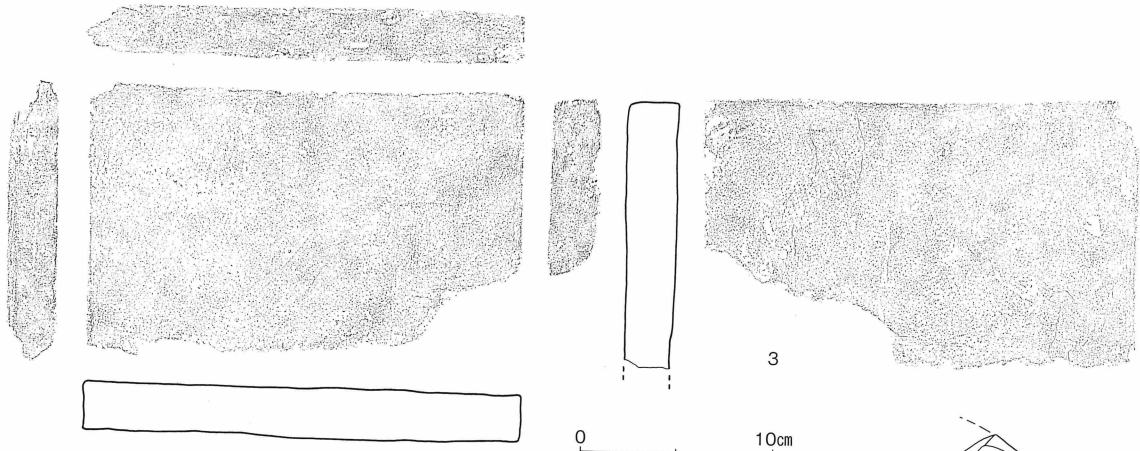


2

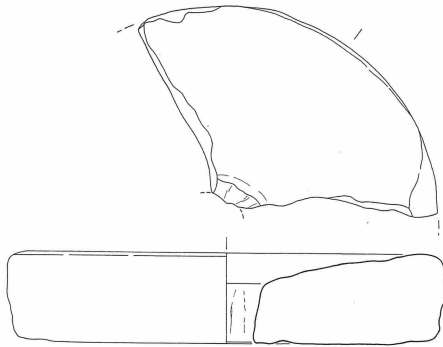
SD276



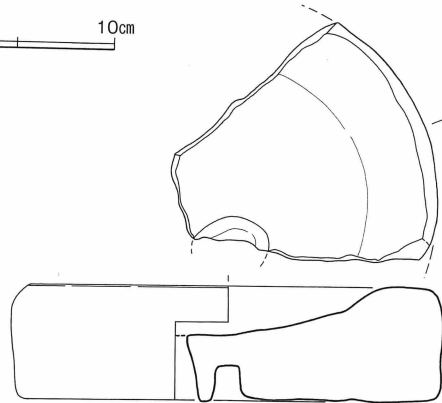
6



3

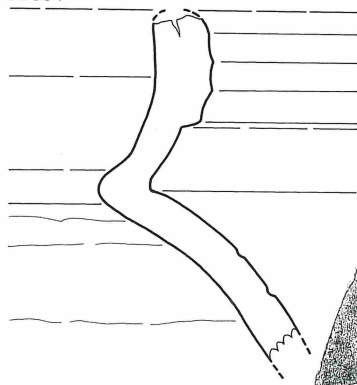


4

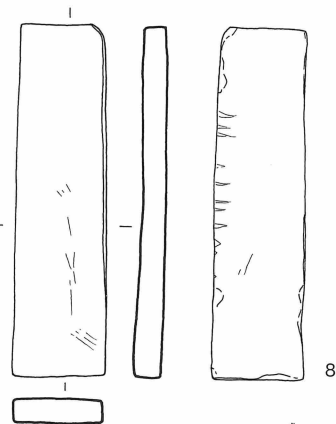


5

SD304



7



8



9

第93図 SD232・276・304 出土遺物実測図 (1/3)・3(1/4)・4・5(1/6)・6(1/1)

西に縮小する傾向があり、この溝は、最終段階と想定し、天正14年（1586）の島津氏の豊後府内侵入以後まで機能していた可能性が高い。

SD314 SD314はI31のSD060の上面で検出された溝である。確認できた規模は、南北約4.5m、幅30～40cm、深さ約40cmである。

出土遺物は、遺構が小規模なため、多くない。第96図12に在地化した京都系土師器の坏1点を図示した。時期は16世紀後葉である。

SD314は、検出された位置や、時期が16世紀後葉であることから、第2南北街路の西側側溝の一部と考える。

SD332 SD332はJ31で検出された南北方向の溝である。この場所では数条の同じ方向の溝が検出されている。確認できた遺構の規模は、長さ4m、幅約50cm、深さ10cm程度の小規模なものである。

出土遺物の代表的なものを第96図13に図示した。遺物は在地化した京都系土師器の坏で、16世紀後葉と考える。

SD349 SD349はI・J31で検出された南北方向の溝である。確認された遺構の規模は、長さ約3m、幅約50cm、深さ10cmである。

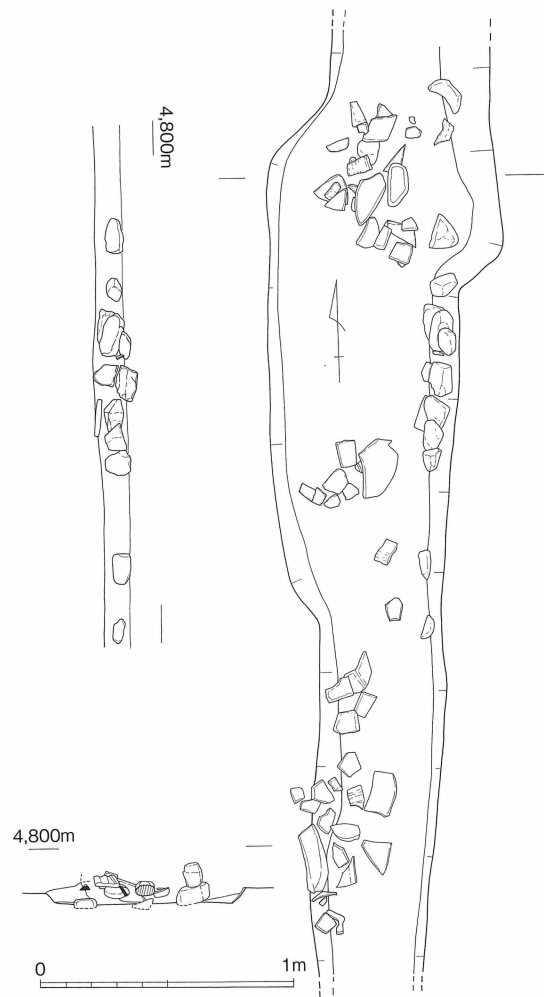
主要な出土遺物は第96図14に図示した瓦質土器の碗である。この碗は高台の断面が三角形である。他に、京都系土師器の小破片が出土している。

遺構の時期は、16世紀後葉で、SD332と同様、第2南北街路を敷設した初期の側溝の一部と考える。

SD354 SD354はI31で検出された南北方向の溝である。SD060に沿った東側の位置で、SD314の東側に約1m離れて検出された。SD314との関係は、SD354が街路の積土の途中で検出されることから、SD314が新しい。規模は幅60～70cmで、深さは約10cmである。長さは約5.5m検出されたが、やや蛇行する。

主要な出土遺物は、第96図15に図示した。遺物は口径14.4cmの京都系土師器で、16世紀後葉と考える。

SD354はSD314と同様、第2南北街路の西側の側溝



第94図 SD304の一部実測図（1/30）

第2節 中世大友府内町跡第51次調査

の一部と考えるが、両者に前後関係が認められることから、西側に1m拡張した可能性が強い。

御内町 SD357 SD357はI・K31・32・33で約30mの長さで検出された溝である。第2南北街路の東側に形成された御内町の整地層であるSX345の下位の整地層SX358を除去後に検出された遺構である。遺構の位置と規模は付図1-1図に図示しており、幅は約70cm、深さは20～30cmである。

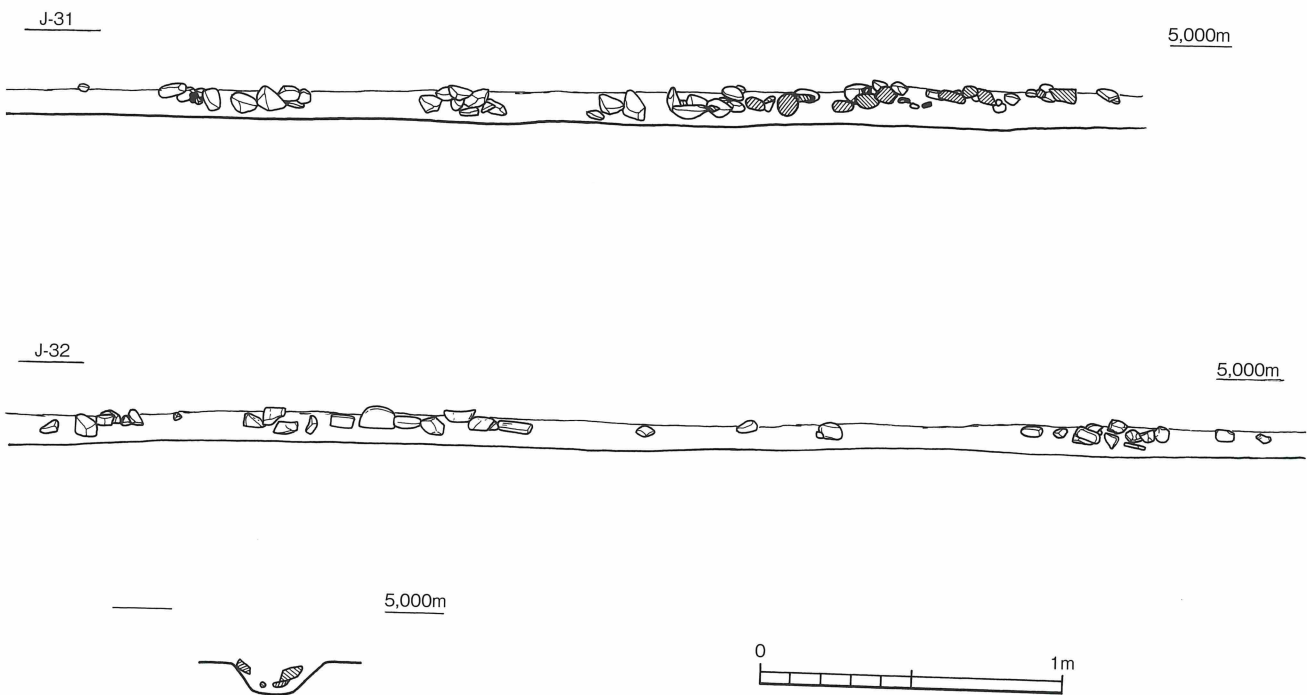
龍泉窯系 出土遺物は第97図に図示したが、1は龍泉窯系の青磁の碗である。2～15は在地系土師器で、2・3は皿、4～15の坏は口径が8cm前後である。坏は12点を図示したが、口縁部の形態は底部から尖るように延びる4～9、平均的な厚さの10～12、中位が厚くなる13などがあるが、14・15は器高が高く、口縁端部が外反する特徴を持つ。16は在地系土師器の皿の中央を穿孔し、脚を付けたもので、燭台と理解されている。17は京都系土師器であるが、上層からの混入である。

SD357の時期は14世紀代であるが、14・15があり、後葉から末葉が考えられる。

SD363 DS363は調査区の東側沿いに検出された大規模な堀である。付図3-1図に図示したが、約60mの長さで確認された。平面的な観察では判別出来なかったが、土層断面図で観察すると、少なくとも3度の掘り返しが行なわれていることが判る。そのことを示すように遺物も上層から16世紀代、下層から14世紀代の遺物が出土した。この遺構の南端は、万寿寺北境の堀と5mの間隔を開けて終わっている。また、K32の下部からは拳大の集石が2mの範囲で確認された。

常滑焼 出土遺物は第98～105図に図示した。第98図1・2は外面に連弁のある龍泉窯系の青磁碗である。3～6は中国産の白磁である。7・8は常滑焼の大甕の口縁部と底部である。9～12は瓦質土器の甕と考える。16～19も瓦質土器で、16は香炉、17は播鉢、18は鉢、19は火鉢である。第99図20～33は京都系土師器で、多くは上位から出土した。第99図34～48、第100図・第101図61～64に図示したものはロクロ目土師器で、J・K31周辺で多くが出土した。

第101図65～80・第102図・第103図103～117は在地系土師質土器で、皿や坏を含め、大型の破片や完形品の大部分は下層からの出土である。118・119は在地系土師器の皿に高い高台が付くもので、中央部に穿孔がある。118にはその痕跡が認められる。120は小型の皿で、焼塩壺の蓋の可能性もある。121は土鍋の口縁部である。122～124は瓦質土器で、122は皿状、123は火鉢、124は碗である。125



第95図 SD304 側面図及び断面図 (1/50)

燭台

は中央に円柱状の穿孔のある燭台である。

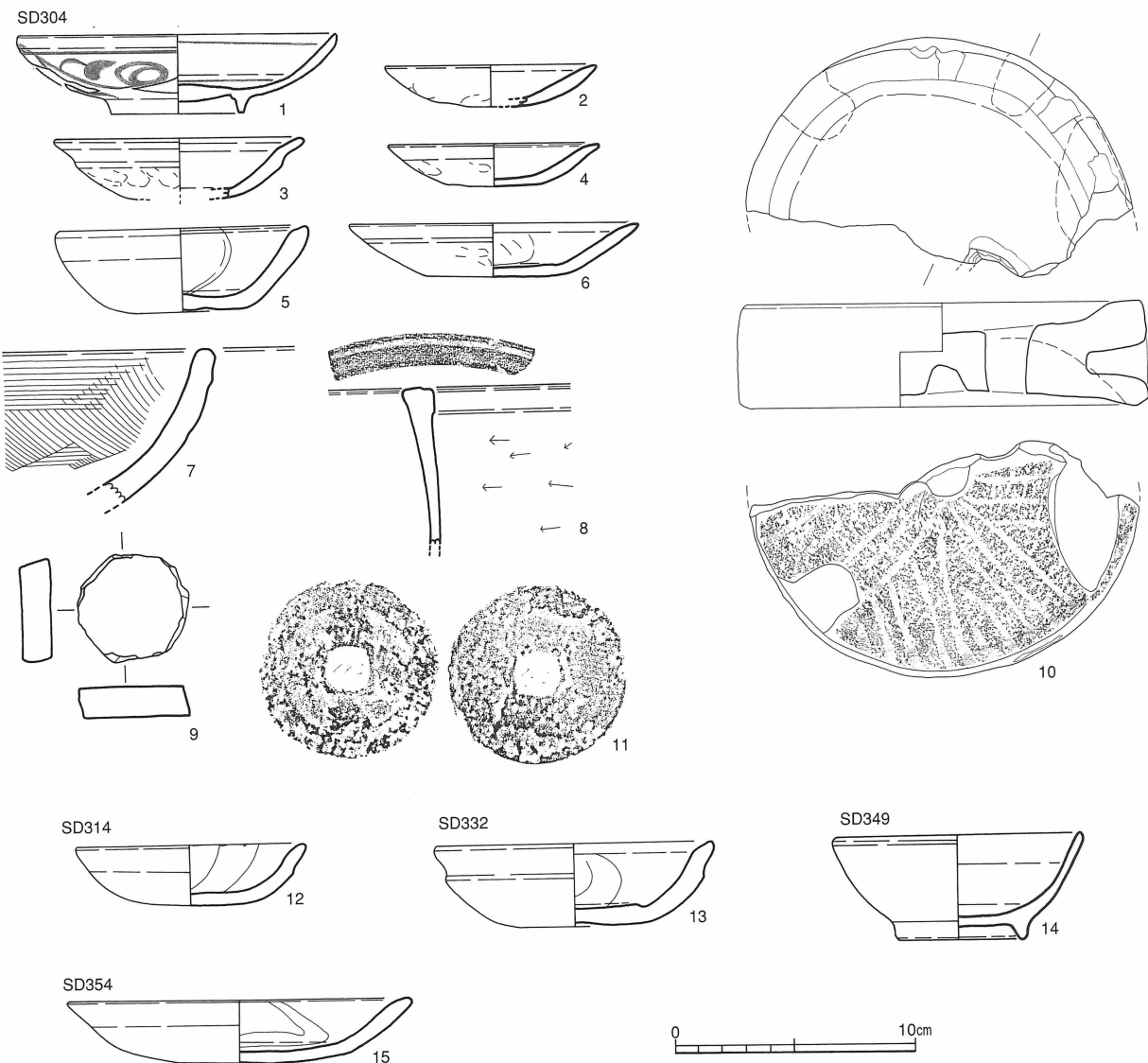
石鍋

第104図126～130は土鍋である。口縁部の形態は、各種あるが、130は最下層出土で、ほぼ完全な形に復元された。内面は刷毛目で、外面の底部は格子目の叩き痕が残る。131～133は紡錘形の土錘である。134は片面におろし皿状の文様が刻まれた扁平な粘土板である。135は硯で、素材は赤間石である。136は軽石製で、大小6ヶ所の孔が穿かれている。137は滑石製の石鍋の底部である。

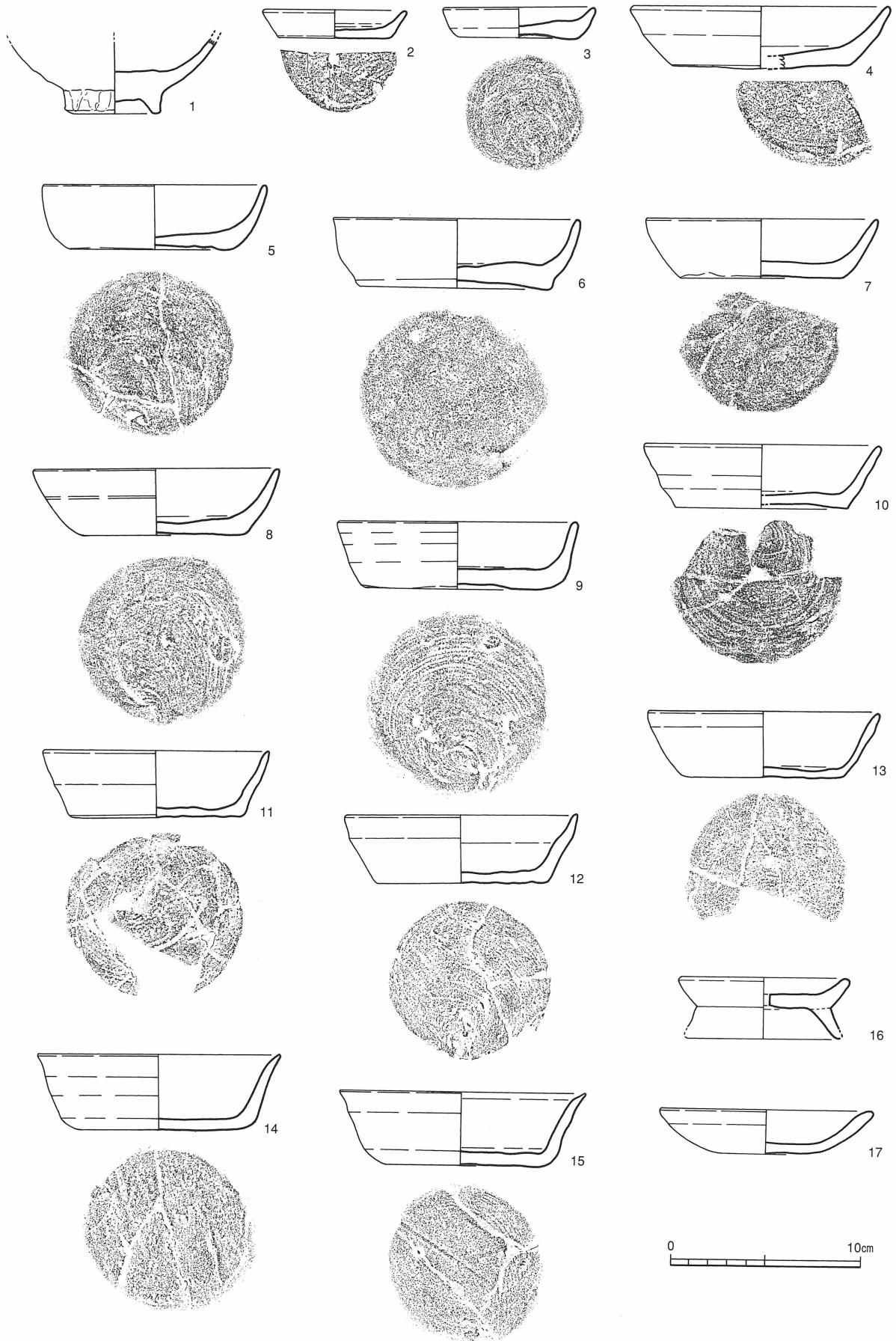
第105図128は凝灰岩製の石造品である。全体の4分の1で、角に脚が付く手水鉢のような機能が想定できる。139は巴文のある軒丸瓦である。表面には瓦当を丸瓦に付けるための傷が刻まれている。

第105図140～153は銅銭である。140は621年初鑄の「開元通寶」である。141は990年初鑄の「淳化元寶」である。149も「○化元○」と判読でき、同銭種の可能性がある。142は1038年初鑄の「皇宋通寶」である。143～145は1068年初鑄の「熙寧通寶」である。148もその可能性が強い。146は1078年初鑄の「元豊通寶」で、147は1368年初鑄の「洪武通寶」である。

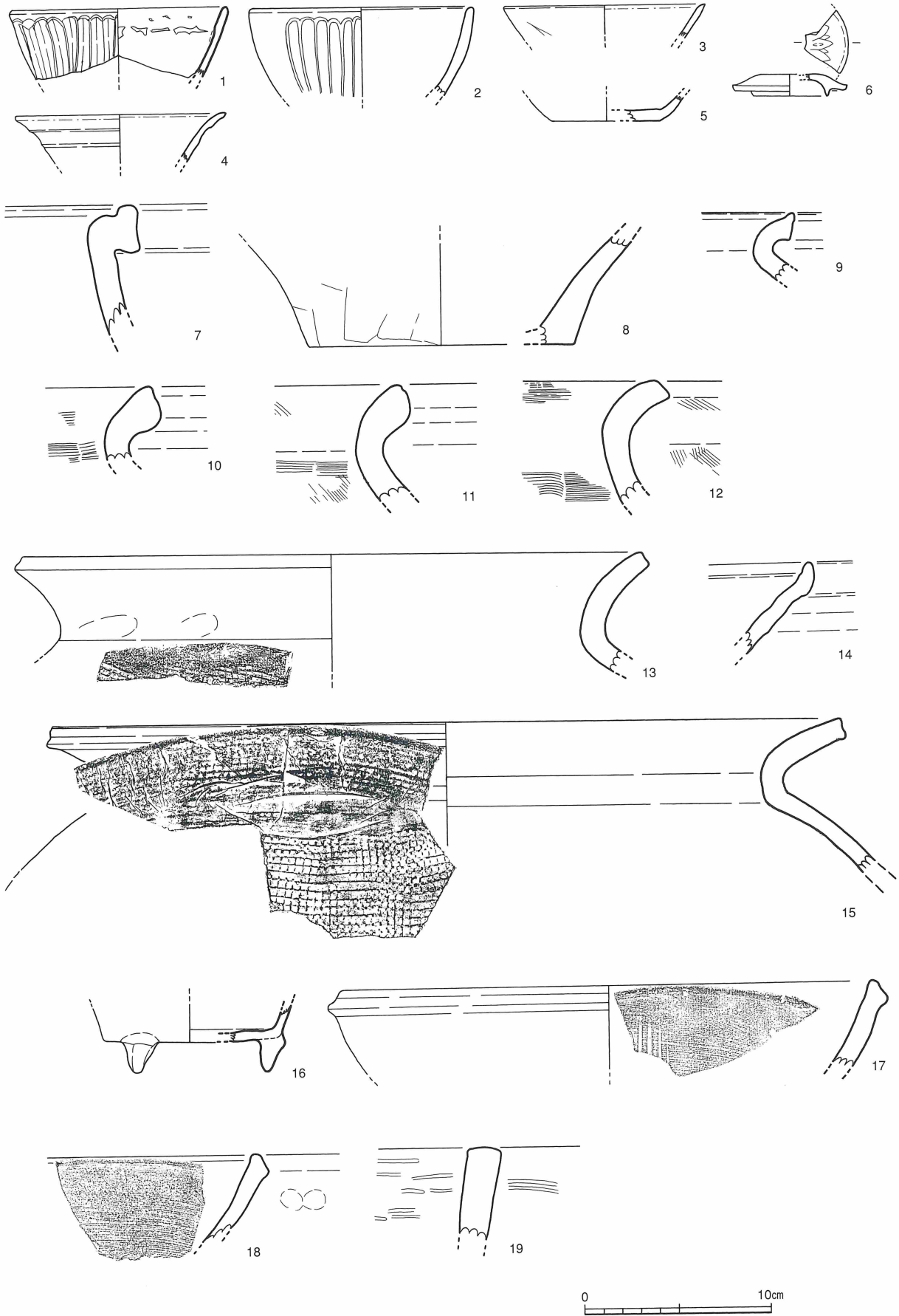
以上がSD363から出土の遺物であるが、遺物の上から見ても、最下層を形成する最も深い場所から14世紀代の遺物が出土することから、この時期に最大規模の溝が掘られたと想定することができる。



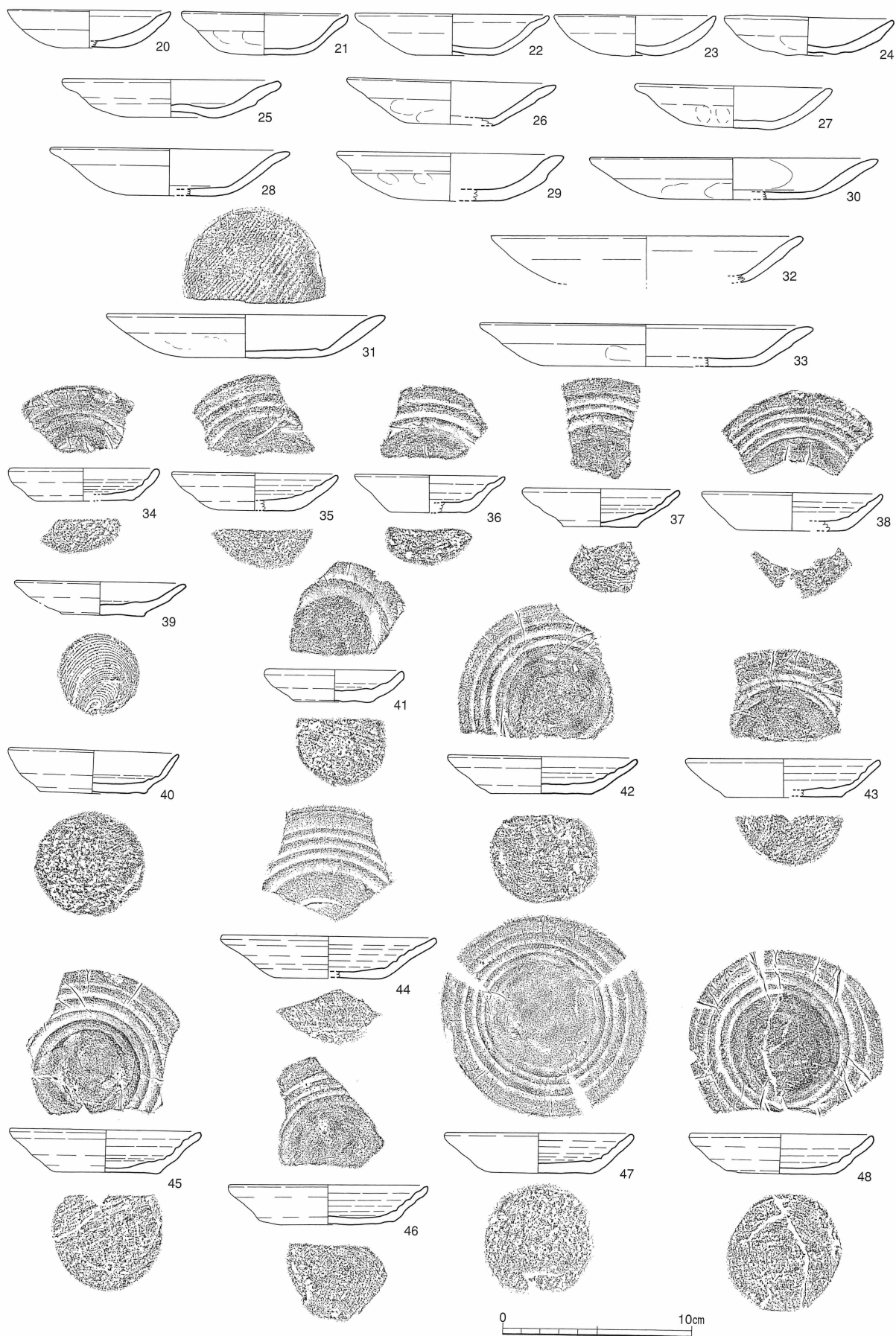
第96図 SD304・314・332・349・354出土遺物実測図 (1/3) 10(1/6)



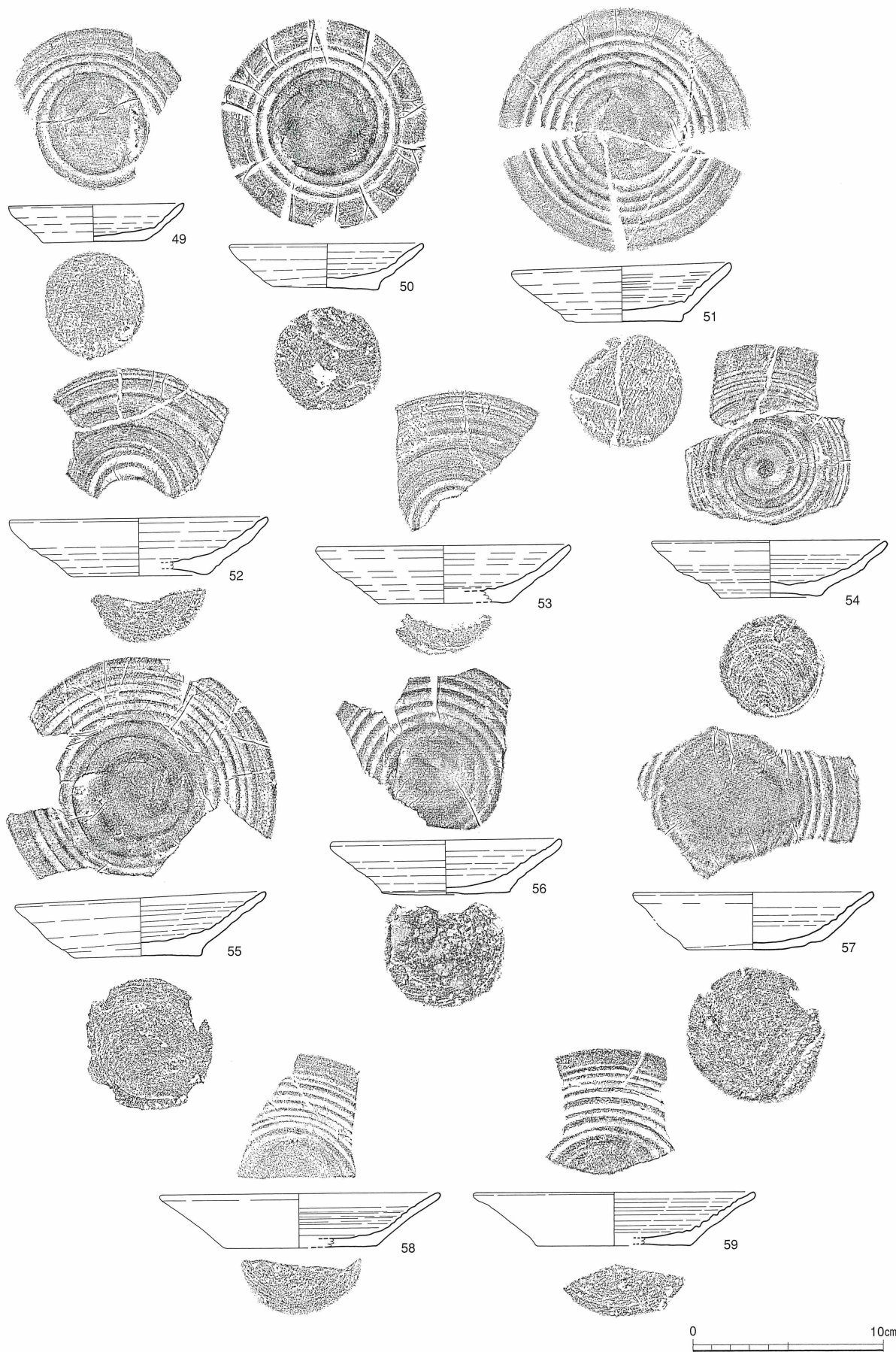
第97図 SD357出土遺物実測図 (1/3)



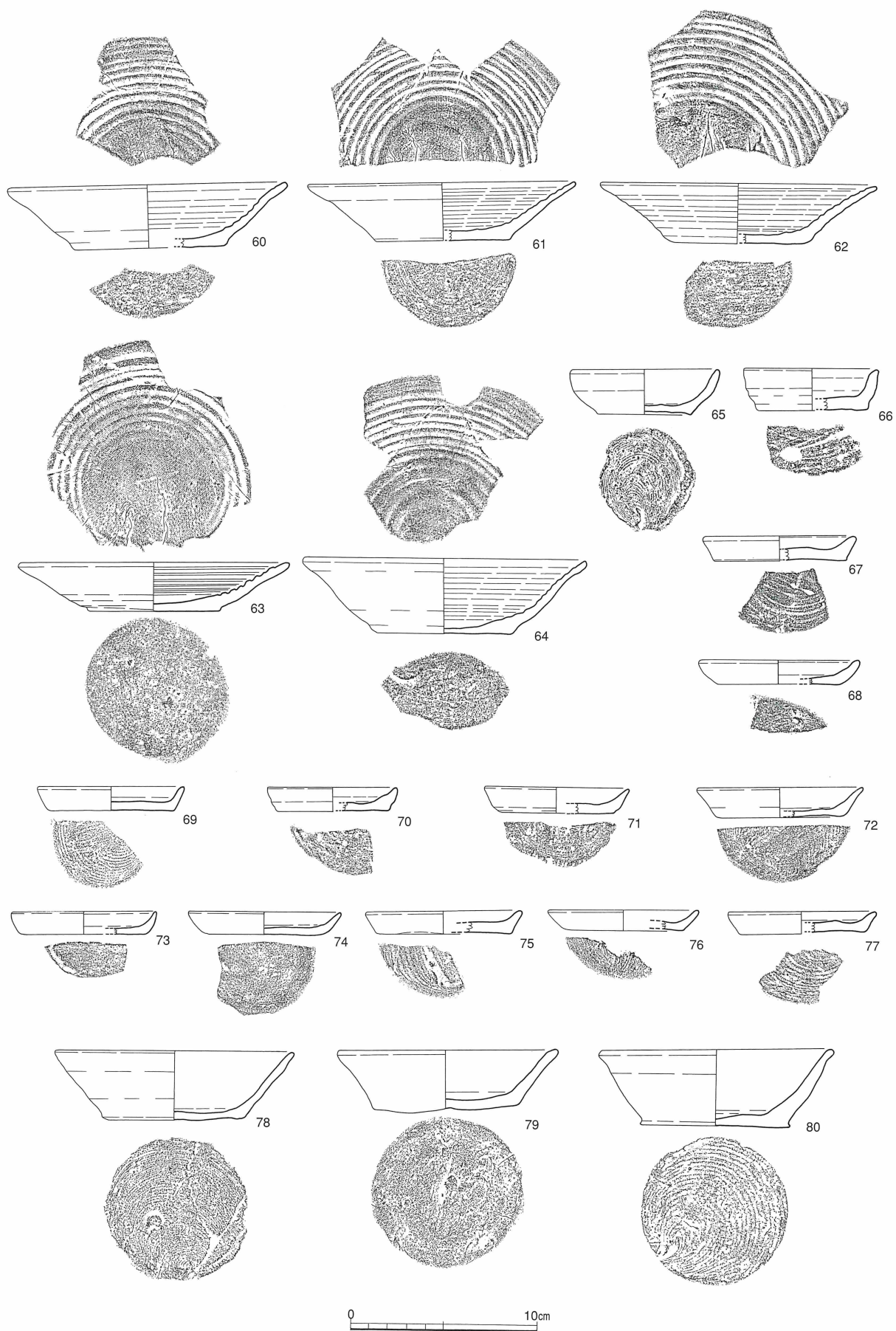
第98図 SD363出土遺物実測図① (1/3)



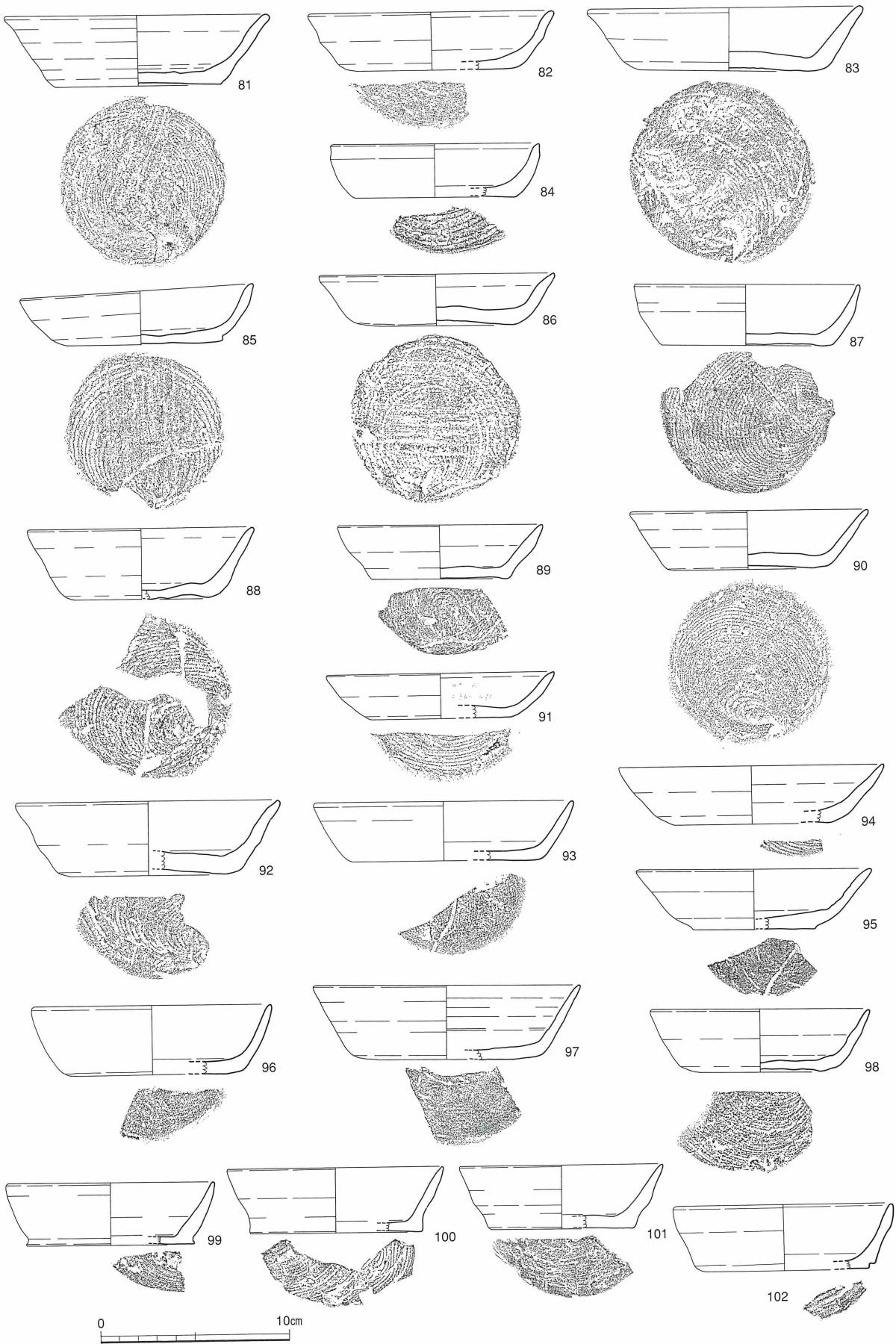
第99図 SD363出土遺物実測図② (1/3)



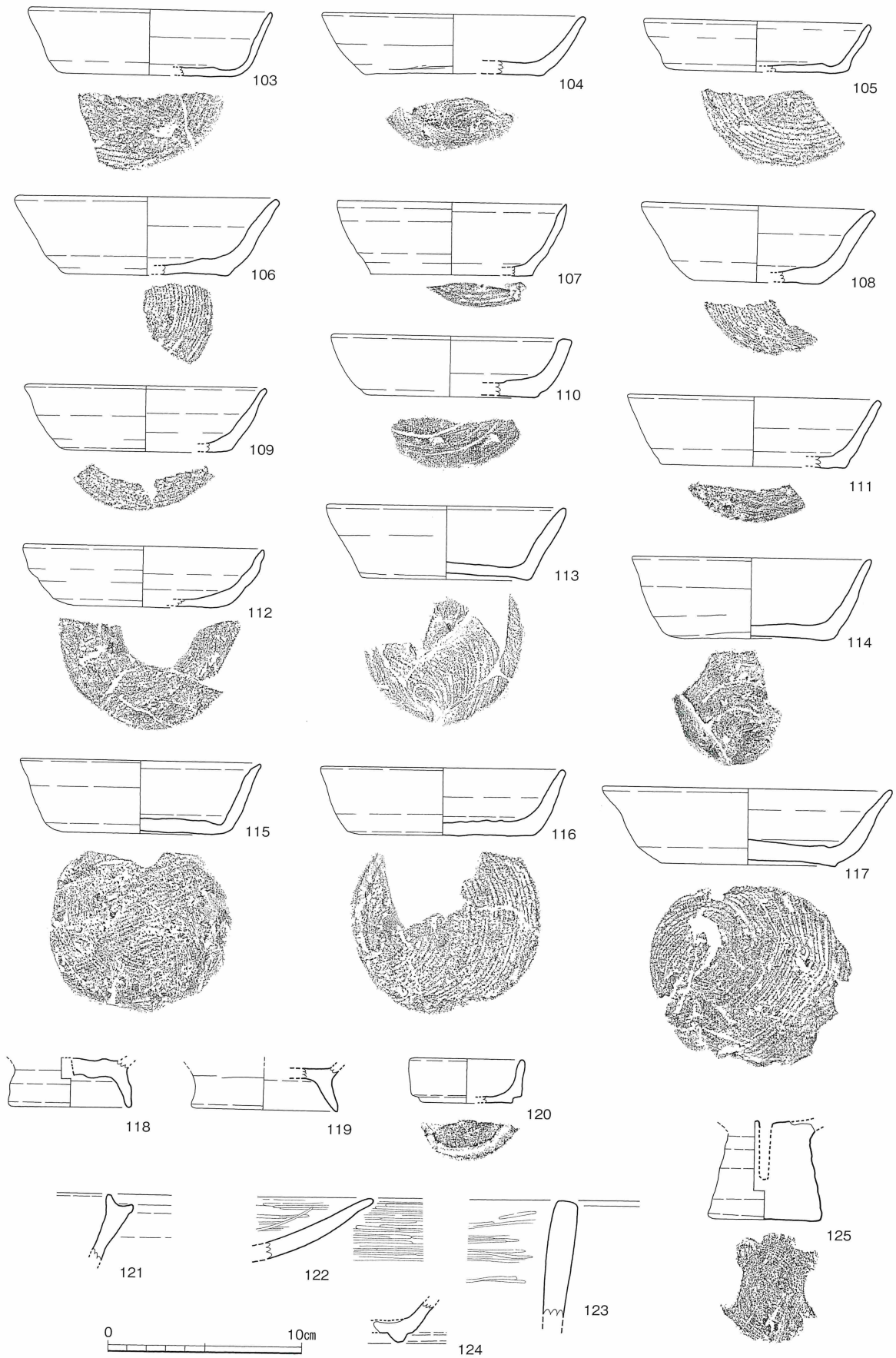
第100図 SD363出土遺物実測図③ (1/3)



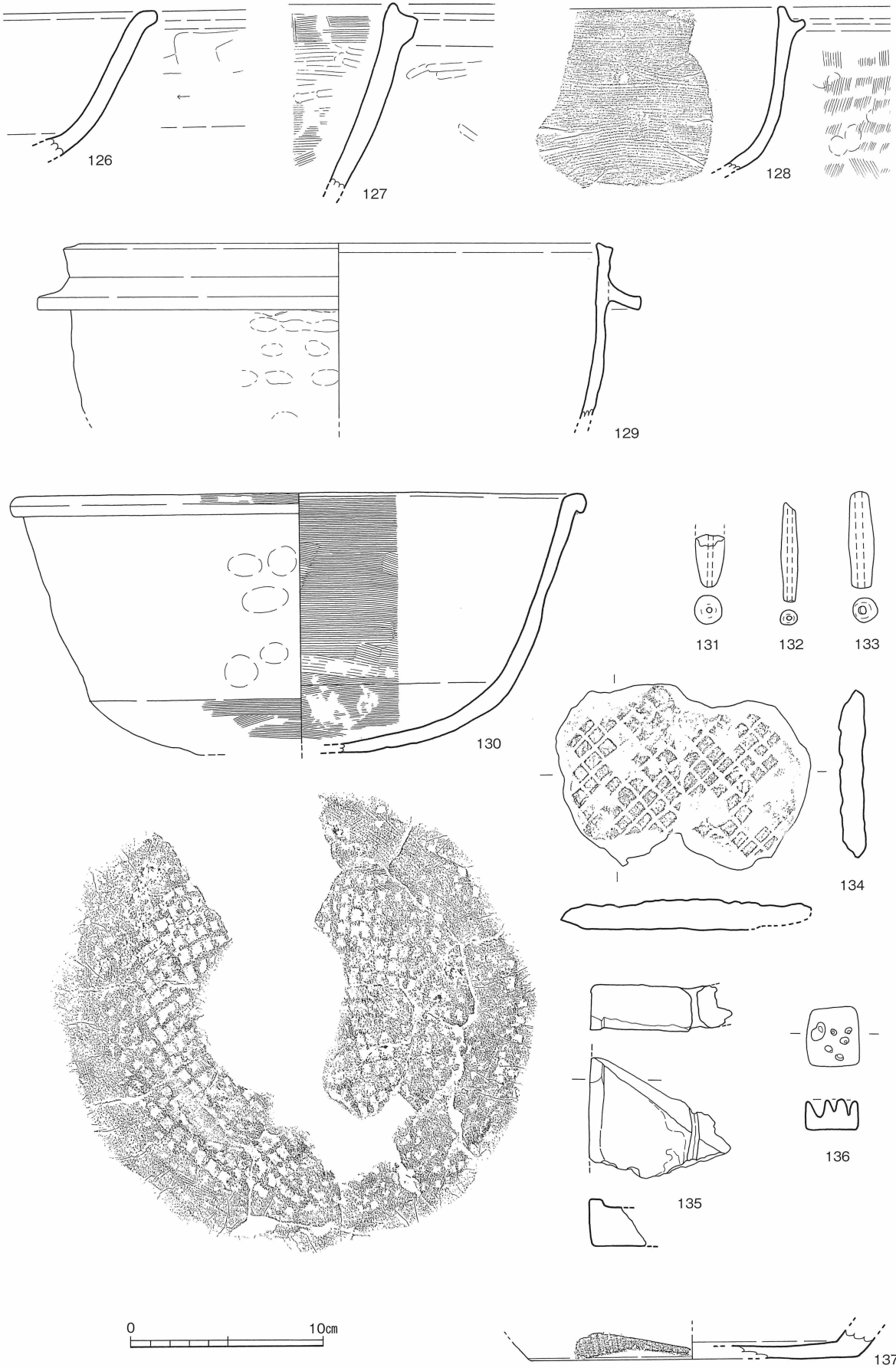
第101図 SD363出土遺物実測図④ (1/3)



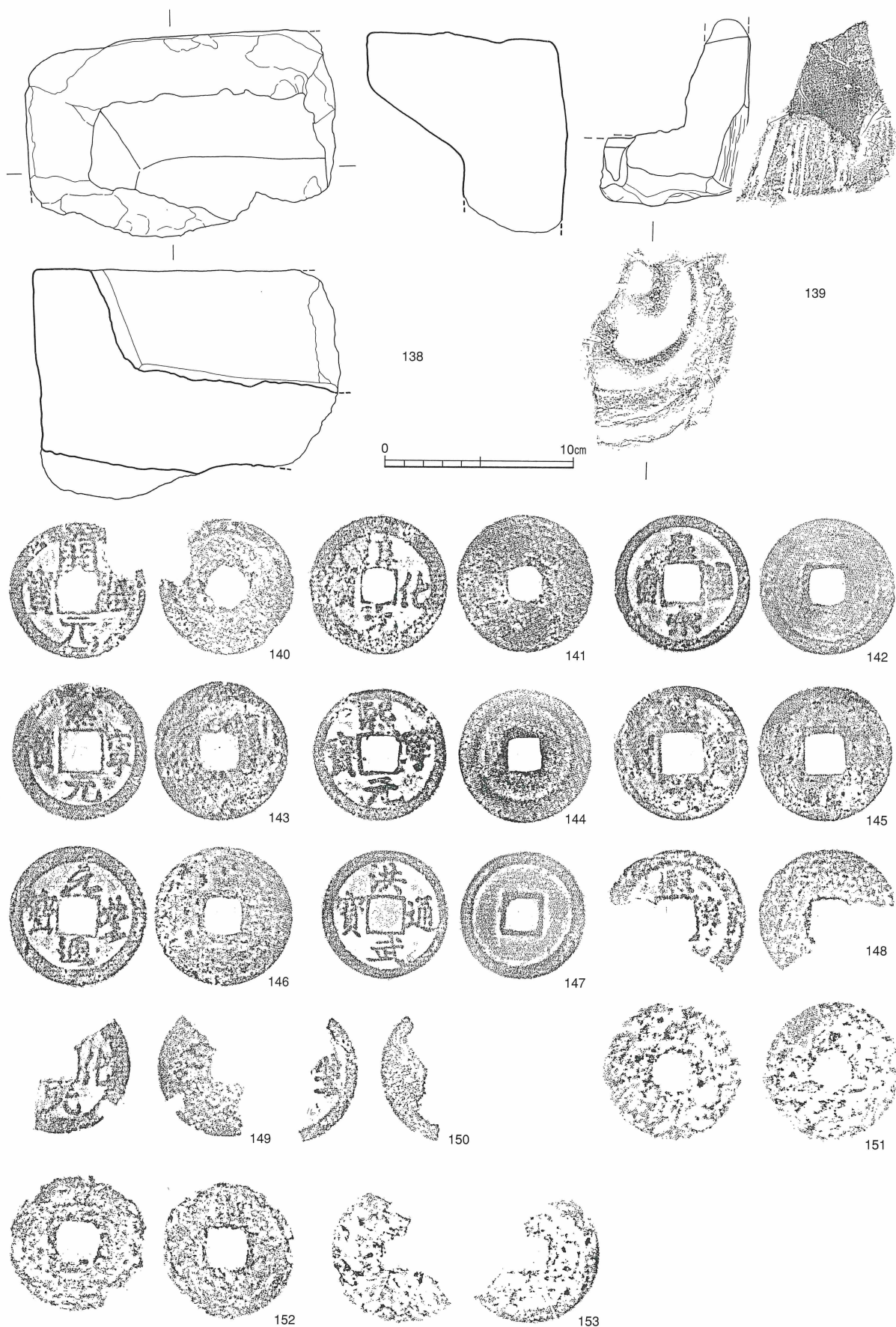
第102図 SD363出土遺物実測図⑤ (1/3)



第103図 SD363出土遺物実測図⑥ (1/3)



第104図 SD363出土遺物実測図⑦ (1/3)



第105図 SD363出土遺物実測図® (1/3) 140～153(1/1)

この溝がある程度埋まった段階でJ・K31を中心に出土したロクロ目土師器の15世紀後葉から16世紀初頭の時期の溝がある。そして、最上部に京都系土師器に象徴される16世紀後葉の遺構の存在を考えることができる。

SD370 SD370はJ33で確認された遺構で、第106図に図示したように、北端部にSP383とした直径40cm、深さ45cmの柱穴状遺構があり、そこから南に約2m延びる溝状遺構を確認した。同じ方向と規模の溝は、南に3m離れた位置で、約2.6mの長さで確認され、さらに南に4mはなれた位置で、約3mが確認された。この遺構はSD397として第107図に図示した。こうした全体状況は付図1-1に図示している。SD370の溝の規模は、幅約40cm、深さ約15cmで、SD397は幅約30cm、深さ約10cmである。

遺構内からは第106図に示したように、礫や備前焼の大甕の破片が出土している。16世紀後葉の溝と想定され、第2南北街路の初期の東側側溝に関連する遺構と考える。

SD446 SD446はJ・K37で検出された東西方向の溝である。付図1-1に図示しているように、万寿寺北境の堀と、SD363の南端部の間に掘り込まれている。長さは約8.3mが確認され、幅は約50cm、深さ約10cmである。遺構の位置や、「府内古図」に描かれる万寿寺北側の東西方向の街路であるSF447の北側の側溝と考える。

出土遺物は、第109図1の銅銭があるが、銭名は判読不明である。

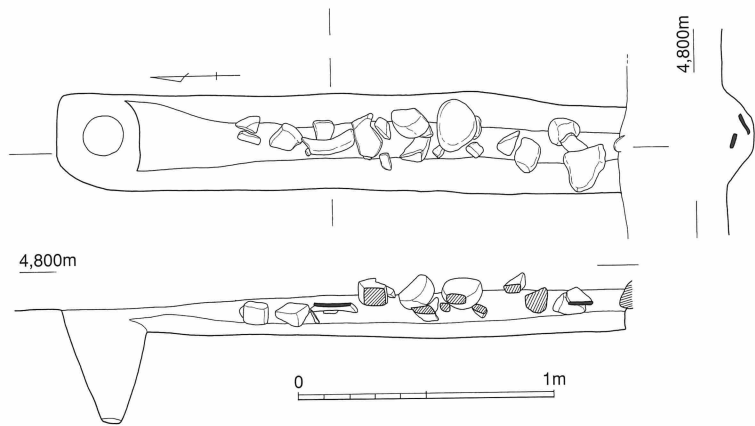
SD462 SD462は付図1-1に平面図を図示した。この溝は、平成14年に府内町跡第20次C調査で、万寿寺北境の堀の北側で確認した遺構の西側部分にあたる。溝は緩やかに北方に向け、直角にカーブし、SD363方向に向かい、約4m続く。遺構の規模と形態は、第108図に図示したように、上面幅が1.4mで、断面形態はV字になり、深さ約70cmで達する底面の幅は約10cmである。北方になるに従い、幅が狭く浅くなる。

出土遺物は第109図4～17に図示したが、特に8～17は第108図に示したように底面から約30cm

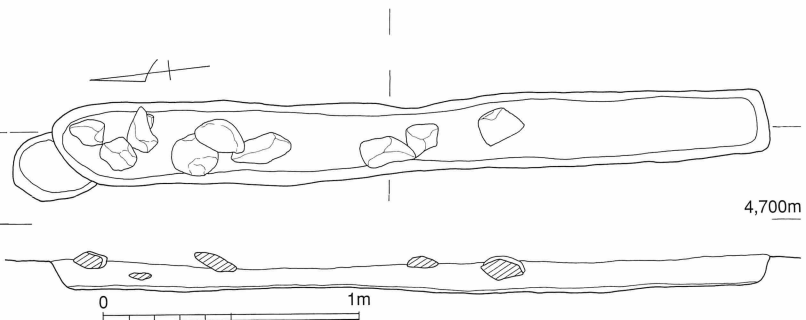
上位で、一括廃棄された状態で出土した。1は龍泉窯系の鎬連弁のある青磁碗である。5～7はロクロ目土師器である。一括性の強い8～17の共通性は、胎土が京都系土師器よりも白色で、器壁はロクロ目土師器より薄い。器面の外面にはロクロ挽きによると思われる螺旋状の段がついている。口径は13cm前後で、器高は2.5cm前後である。長州山口の大内館跡出土の土師質土器に類似する。

遺構の時期は、15世紀中葉と考える。

SD463 SD463はJ36の東北部で検出された南



第106図 SD370・SP383 実測図 (1/30)



第107図 SD397 実測図 (1/30)

白磁皿

北に細長い遺構である。遺構の東側はSD363と接し、西側も他の溝と接する。このため遺構の規模は明確でないが、南北約4mが確認された。遺構の深さは約20cmで、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物は第110図1～6に図示した。1は中国産の白磁皿である。2・3は口径8cmと13.3cmの京都系土師器である。4は糸切り底の土師器であるが、口縁部の作りは京都系土師器に類似する。5は不明な青銅製品である。6は判読不明の銅銭の破片である。遺構の時期は16世紀後葉と考える。

SD483 SD483はI32の東北角、SD060の東側沿いで検出された溝状遺構である。規模は、ほぼ南北方向に長さ4mで、幅は約50cm、深さは約20cmである。

主要な出土遺物は、第109図2の京都系土師器である。この遺物から、遺構の時期は16世紀後葉と考える。第2南北街路の西側側溝の一部と考える。

SD495 SD495はI33・34の東側で検出された溝状遺構である。場所はSD060の東側に並行する。検出された層位的な位置は、第2南北街路であるSF012の版築状の積土の下位で検出された。規模は5.2mの長さが確認され、幅は約40cmで、深さは約10cmである。

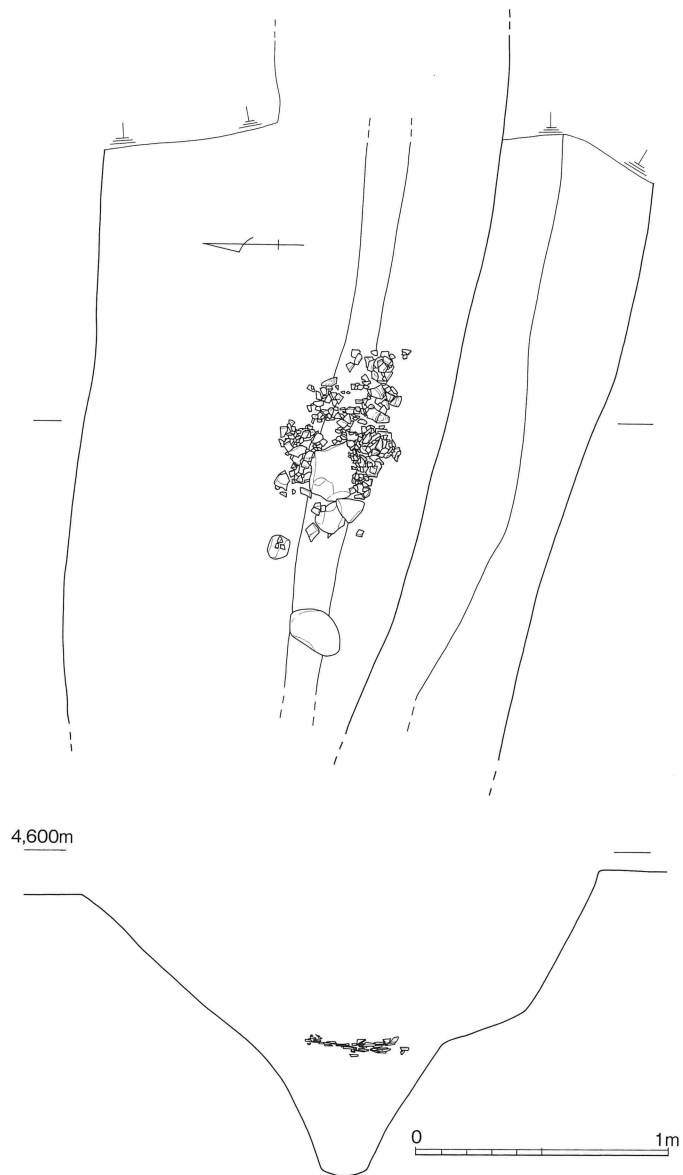
出土遺物は、第109図3に図示した口径10.8cmの京都系土師器である。遺構の時期は16世紀後葉と考える。

SD499 SD499は第2南北街路としたSF012の版築状の積土を除去した後に検出された溝状遺構である。位置は、先に報告したSD014の南側SD014Aの北側で、延長するような状況で、検出された。遺構の規模は、長さ16.5m、幅50～60cmで、深さは約10cmであるが、南になるに従い遺構の幅が不明瞭になる。

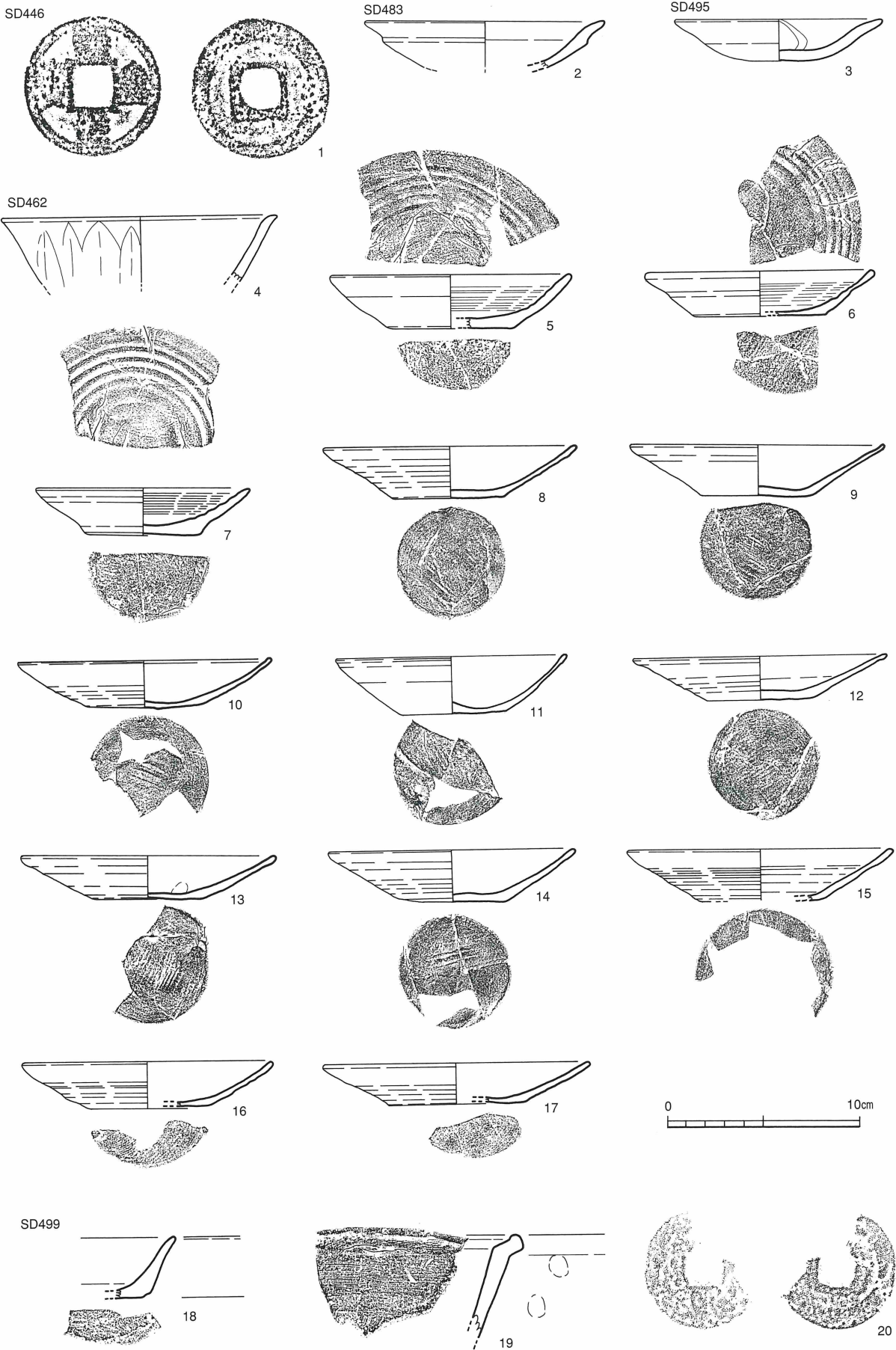
出土遺物は、第109図は18～20に図示した。18は在地系土師質土器の坏である。19は土鍋の口縁部の破片である。20は3分の1を欠く銅銭である。銭貨名は不明である。

SD519 SD519はI35で検出された短い溝である。確認された規模は、長さ1.5mで東西方向からやや北に振るが、西端はSD060と切り合い不明である。幅は約50cm、深さは約10cmである。

出土遺物は、第110図7に図示した京都系土師器の破片があ



第108図 SD462及び出土遺物実測図 (1/30)



第109図 SD446・462・483・495・499出土遺物実測図(1/3) 1・20(1/1)

る。この遺物から、16世紀後葉と考える。

SD557 SD557はI・J38で検出された南北方向の溝状遺構である。北側を大型土坑であるSK533に、南側は現在の工業用水管で切られている。確認される遺構の規模は、南北約3.5mで、幅は約1mが予想されるが、東側が別の溝と切り合い不明である。深さは約20cmで、床面は平坦で幅は広く、断面形は逆台形である。

砥石

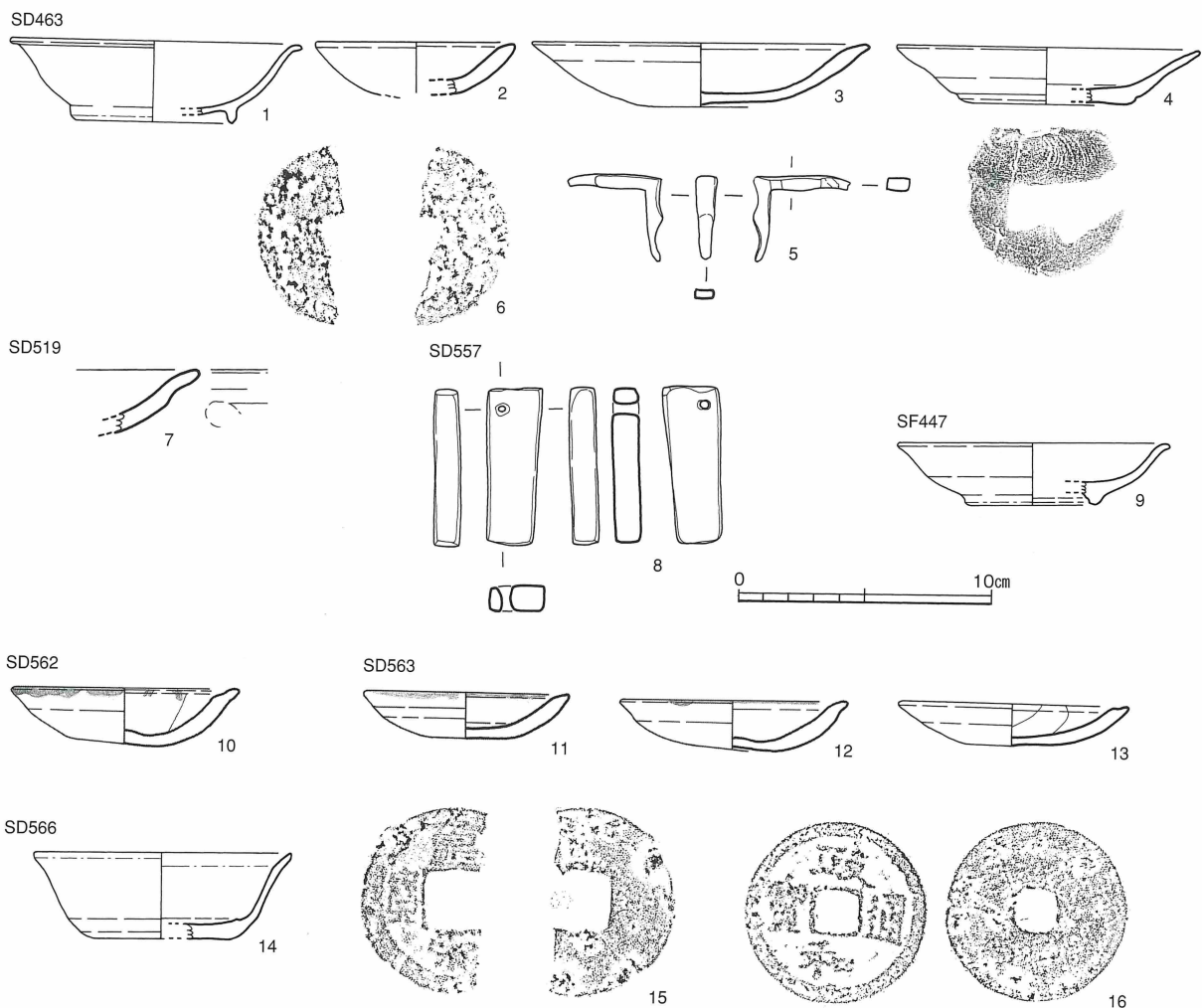
出土遺物は第110図8に図示した砥石の完形品が1点出土している。この砥石は全長6.2cm、31.5gの小型で安山岩製である。片隅に穿孔があり、吊り下げられるようになっている。

遺構の時期は、第2南北街路下で検出され、糸切り底の破片が出土しており14世紀代と考える。

SD562 SD060の底面は、約50cmの幅で深さ約20cm深く掘窪められている。この溝はI34でさらに深く約30cmとなる。この溝について、I34より北をSD562、南の深くなった部分をSD563と区別し、遺構の切り合い状態からSD563が新しいと判断して遺物の取上げを行なっている。しかし、両者とも、SD060の底面であることに変わり無く、大きな差はありえない。

SD562から出土した遺物は第110図10の口径9cmの京都系土師器で、16世紀後葉である。

SD563 SD563から出土した主要遺物は第110図11～13である。3点とも豊後府内から出土する京都系土師器の中でも最小タイプである。遺物の上からも、SD562と時期の区別はできない。



第110図 SD463・519・557・562・563・566・SF447出土遺物実測図 (1/3) 6・5・15・16 (1/1)